
真・恋姫†無双～乙女大乱改～

西森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫†無双〜乙女大乱改〜

【Nコード】

N4711T

【作者名】

西森

【あらすじ】

現代で平和に暮らしていた北郷一刀は剣道大会の帰りに謎の声によって外史の世界へと飛ばされる。そして苦しんでいる人や困っている人を助けたいという一刀の優しい心がアニメの世界を救う！（この小説は基本はアニメのように進みますが、西森は無印くらいしか詳しく知りませんのでオリジナルがあるかもしれません。又、時々OVAの様な話が加わります）

「一刀、外史に飛ばされる」

ある剣道大会会場

?「オラッ!」

ズバツ!

審判「一本、それまで!よって勝者、北郷一刀」

ワーワー!!

会場が多いに騒ぎまくった。

大会委員長「今年の男子個人・木刀の部の優勝者は北郷一刀君に決定です!」

一刀「よっしゃー!」

彼の名は北郷一刀、聖フランチェスカ学園2年生。有名な剣道青年である。

今年開かれた大会は個人戦・団体戦と共に一刀の活躍で聖フランチェスカ学園が優勝した。

全国大会終了後

先輩「今回は北郷のおかげで優勝できたぜ」

先輩2「何せ先鋒なら五人抜きだし、大将なら5対1でも負けない
実力だしな」

先輩達が騒ぐなか、当の本人である一刀はあまり嬉しそうにしてい
なかつた。

後輩「どうしたんですか一刀先輩、優勝嬉しくないんですか？」

後輩が聞くと

一刀「いくら優勝しても相手にならなきゃ意味がないからなあんま
りつまらないんだよ」

一刀がこう言うのも理由があつた。

それは一刀が幼少時代から祖父によって行われた厳しい稽古により
一刀は強くなりすぎたのだった。

よって全国大会といつても一刀の相手になる人なんて一人もいな
かつた。

一刀「まあ優勝して嬉しい事って言ったら…」

一刀が話をしていると

P i p p i p p i …

携帯が鳴り出した。

パカッ

一刀が携帯を開くとメールが届いていた。

メールの内容は

『大会優勝おめでとう

ごちそう作って帰りを待ってます 小百合&一刀 』

一刀「優勝記念に小百合姉のごちそうを食べれるっていうのが嬉しい事かな」

パタンッ！

一刀は携帯を閉じると

一刀「それじゃあ俺は帰りますので！」

ダダッ！

先輩「気を付けて帰れよ！」

一刀は走り去っていった。

一刀が妹の一刀と義姉の小百合の待つ家に向けて走っていると

(ある世界を平和に変えて欲しい)

ピタッ

一刀「今の声は何だ？」

「刀は辺りを見渡すが特に異常はなかった。

「刀「空耳ってやつかな？」

「刀が再び走り出そうとすると

（ある世界を平和に変えて欲しい）

またあの声が聞こえてきた。

「刀「（声からして女のようにだけでも周りには女がないしどうなっているんだ!?)」

「刀が不思議に感じていると

フツ!

「刀「えっ!?!」

「昏間なのに急に目の前が暗くなった。

「刀「何が起きたんだ!?!」

「刀が不思議がっていると

ピカッ!

「刀「うわっ!?!」

さっきまで暗かったはずが急に眩しいくらいに明るくなった。

そして一刀はあまりの眩しさに目を閉じてしまった。

しばらく時間が立ち、一刀が目を開けてみると

一刀「何だよこれ!？」

さっきまで道路を走っていたはずが目の前には森しかなかった。

今、新たな外史が始まる。

「関羽との出会い」

「一刀「何処だよここ!？」」

「一刀は周りの景色が変わっていることに驚いた。

街中から一気に森の中が変わったのにも驚いたが他にさっきまで昼間だったにもかかわらずいつの間にか夜になっていた。

「一刀「俺の荷物は無事のようにけども…そうだ!携帯の通話機能なら」

「ガバツ!

「一刀は鞆の中から携帯を取り出して誰かにかけようとするが

「ピー 圏外です

「一刀「森の中だから圏外なのかな?」

この時、一刀は知らなかった。この世界では携帯が使えないことを

「一刀「仕方がない森をおりてみるか」

「一刀は森をおりることにした。

30分後

「一刀「腹減ったな」」

ゲキユ〜ッ!!

一刀はお腹が空いて動けないでいた。

一刀「剣道大会は昼前に終わったから家でご飯食べるつもりだったから間食してないし腹減ったな〜」

一刀が愚痴を言っていると

一刀「もうダメだ〜」

バタンッ!

その場で倒れてしまった。

ガサガサッ!

しかし一刀は知らなかった一刀に誰かが近付いてくることを

そして翌日

一刀「んっ…」

一刀が目覚めますと

?「気が付かれましたか?」

一刀の目の前には黒髪ポニーテールの美人がいた。

「刀「うわっ!？」」

「刀が驚いてあとずさると

?「そんなに驚くとは失礼だと思いますが」

黒髪の人が言う

「刀「すみません!いきなり目の前に美人さんがいたものでつい!？」」

美人と言われた黒髪の人

?「美人だなんて何を言うのですか!武人に対しては侮辱のようなものです」

何故か急に怒り出した。

「刀「ところでさっきから気になっていたんだけどその服ってコスプレ?」」

「刀が聞くと

?「こすぶれ?何を言っているのか分かりませんが服ならあなただっておかしいじゃないですか!」

ビシッ!

黒髪の人は一刀の着ていたフランチェスカ学園の制服を指差した。

一刀「(フランチエスカ学園の制服っておかしいと言われるくらいかわっているのかな?)」

一刀はこの時、理解していなかった。

一刀「それにしてもどこどこ?」

一刀が聞くと

?「どこって?ここはこの先にある幽州の村近くの森ですが…」

この時、一刀は黒髪の人が言った幽州が気になっていた。

一刀「(幽州ってどこかで聞いたことがあるなどどこだろう?……)

思い出した!三国史に出てくる街名だ!」

一刀は祖父から多少の知識を学んでいた。

一刀が考え終ると

一刀「ところでまだ名前聞いてなかったね俺は北郷一刀!君は?」

一刀が聞くと

関羽「我が名は関羽雲長といます!」

関羽さんが言うつと一刀は再び考え始めた。

一刀「(関羽だって!?関羽っていったら劉備につかえた美髯公で有名な!?)」

一刀が考えていると

関羽「もうよろしいかな北郷殿、私はこれで失礼する！」

ザッ！

関羽さんは一刀が考えているまに去っていった。

一刀が考え終って目を開いてみると

一刀「あれっ！？関羽さんは？」

関羽は既に去っていた。

一刀「参ったな、街への道を知ってたら教えてもらおうとしたのに

」

一刀が残念がっていると

一刀「あれは！？」

昨日は暗くて分からなかったが一筋の煙がたっていた。

一刀「煙があるところには人がいるかも」

ダッ！

一刀は煙めがけて走り出した。

しばらくして

一刀が煙の元にたどり着くと

一刀「大きいなあ!？」

目の前には大きな門がそびえていた。

一刀が門の中に入ろうとすると

門番「その者、止まれ！」

門番に止められた。

門番「怪しい服の奴め!ひっ捕えてやる！」

門番が一刀に襲いかかる

一刀「(この制服ってそんなに怪しいものなの!?)」

門番が一刀に掴みかかろうとしたその時!

ドドドッ!!

一刀の後ろ側から土煙が走っていた。

門番「またあいつか!今度は通さんぞ！」

門番が構えていると

？「退けー！退くのだー！鈴々山賊団のお通りなのだー！」

子供達『オオーツ！』

豚にまたがった赤髪の小さな子を先頭に子供達が走っていた。

？「今日も豪快に悪戯するのだー！」

ドドドーツー！！

そして構えていた門番とぶつかりと

ドカンツ！ ミ

門番「ぐはっ！？」

門番は豚にはねられた。

？「邪魔は片付いたのだ！村に潜入なのだー！」

子供達『オオーツ！』

そして子供達は村に入っていった。

そしてぶつかる瞬間に避けた一刀は

一刀「門番が気絶してるし、中に入ってもいいよな」

一刀は村の中に入っていった。

これが一刀と関羽、張飛との出会いである。

「関羽との出会い」(後書き)

話は進まないし、ページは短いし、新作のネタが頭に入ってくるで大変です。

下手すると隔週投稿になりかねませんので了承ください。

「三人が揃う時」(前書き)

久々の更新です。これからは週一のペースになります。

「三人が揃う時」

門番が豚に撥ねられてのびているうちに村へと潜入した一刀だが

一刀「この村はどうなってるんだ？」

村のあちこちに『鈴々山賊団参上！』と書かれていた。

一刀「まるで暴走族だな！？」

一刀が驚いていると

グキョ〜！

一刀のお腹が鳴り出した。

一刀「結局昨日は何も食べてないからお腹が空いたぜ〜！」

一刀がその場にしゃがみこんでいると

モワ〜ン

いい匂いがしてきた。

一刀「この匂いはチャーハンの匂いだ！」

匂いをかいで復活した一刀は匂いの元に走り出した。

ガラリッ！

そして一刀が店の中に入ると

関羽「いらっしやいませご主人様」

メイド姿の関羽に出会った。

関羽「・・・」

そしてしばらく経つと

関羽「うわー！？今のは忘れてください！／＼／」

一刀「えっ！？」

顔を赤くした関羽が暴れだした。

しばらくして

一刀「それじゃあ飯代が払えないから働いているわけか」

関羽「悔しいがその通りだ」

関羽は自らの失態をくやしがるのだった。

一刀「それにしてもこの村はどうなってるんだ？町中落書きだらけだけだ」

一刀が話していると

男「山に住む野猿のせいだよ」

話を聞いていたのか男が会話に入ってきた。

一刀「野猿って？」

一刀が聞くと

男「山に一人で住んでいるチビさ、村に降りてきてはいつも村の子供をひき連れて悪戯ばかりする奴だよ」

聞いた一刀は思った。多分そいつは豚に跨っていた赤髪の子だろうと

男「まあ度重なる悪戯に怒った役人が野猿を討ちに行くって話だぜ

」

一刀「えっ!？」

これを聞いた一刀は驚いた。

男「いくらチビでも限度があるからな」

すると話を聞いていた関羽は

関羽「済まないが、その山への道を教えてください」

男に山への道を訪ねた。

男「それは構わないがどうする気だ？」

男が聞くと関羽は

関羽「役人に伝えてください！野猿を連れて謝らせるから討伐は明日の昼まで待ってください」

スッ！

そして関羽は山に向かっていった。

それを見た一刀は

一刀「それじゃあ俺も行くかな」

関羽の後について行くのだった。

山道

関羽「何で北郷殿までついてくるのだ！」

関羽が聞くと

一刀「だって俺は野猿の顔を知ってるから役に立つし、武には自信あるからね」

しかし関羽は信用していなかった。見た目がへボい一刀が武に自信があるとは思えなかったからだ。

関羽が一刀を馬鹿にしながら歩いていると

ガサッ！

近くで小さな音が聞こえたのを一刀は聞き逃さなかった。

一刀「関羽さん、あの木に二人隠れてるぜ」

関羽「ハッ!？」

何言ってるんだこの人はと関羽が思っている

シュンツ!

木の後ろから石が飛んできた。

一刀「危ないっ！」

カンツ!

関羽に飛んできた石を一刀は持っていた木刀ではねかえした。

関羽「なっ!？」

関羽は驚いた。自分にも察知できなかった気配を一刀がよんだのだから

一刀「その木に隠れている人!出てきなさい！」

一刀が木に向かって言うと

スッ! スッ! スッ!

次々と木の後ろから子供達が出てきた。

「一刀「君達はもしかして鈴々山賊団の人かな？」

「一刀が聞くと

子供A「そうだい！」

子供B「お前らオヤビンを捕まえに来た役人の奴だろう！」

子供C「オヤビンを役人に渡してたまるか！」

子供達が言うと

関羽「我々は役人ではない！お前達のオヤビンに悪戯をやめるように注意しに来たのだ！」

「一刀「オヤビンの命は保証するからオヤビンに会わせてくれ！」

すると子供達は輪になってヒソヒソ話していると

子供A「本当に保証するならオヤビンに会わせてやるよ！」

スッ！

子供達は道案内をしてくれるようだ。

そしてたどり着いた先はとある洞穴の前

子供A「それじゃあオヤビンを頼むぞ」

スッ！

子供達は去って行った。

子供達が去った後、関羽は洞穴の前に立つと

関羽「出てこい山賊の野猿！黒髪の子供狩りの関羽が成敗しに来たぞ！」

関羽が叫ぶと

タタタッ！

穴の中から何か駆けてくる音が聞こえてきた。

バツ！

？「うりやりやりやー！」

ブンッ！

出てきたものはいきなり武器を振ってきた。

関羽「いきなりとはさすがは野猿だな」

スッ！

関羽も自分の武器を手に取りうつとするが

スカッ！

関羽「あれっ！？」

関羽は自分の武器を飯屋に忘れていた。

？「うりゃーっ！」

ブンッ！

そして野猿の武器が関羽に当たるかと思いき、関羽は思わず目を閉じたが

ガキンッ！

関羽「えっ！？」

関羽は自分の目を疑った。何故なら目の前で野猿の武器を受け止める一刀がいたからだ。

一刀「チビのくせに力は強いな！？」

？「はにゃにゃ！？」

バツ！　バツ！

そして二人は互いに離れると

一刀「俺の名は北郷一刀、君の名前は？」

張飛「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

一刀はまた驚いた。

張飛といえは髭デブで有名(?)なのに目の前の張飛はちびっ子だったからだ。

張飛「お前らは鈴々を捕まえに来た役人なのだな! だったら倒すのだ!」

バツ!

張飛が攻めてきた。しかし一刀は一步も動いていない。

関羽「(何故北郷殿は動かないのだ?)」

関羽が心配するなか

張飛「とりゃー!!!」

張飛が飛び出してきた。

すると一刀は木刀を構えると

ビシッ!

一刀「面っ!」

張飛に面を繰り出した。

喰らった張飛は

張飛「はにゃっ!?!」

バタンツ!

その場で倒れてしまった。

関羽「(一体何が起きたのだ!?)」

一刀の剣筋は武人である関羽にも見えないくらい早かった。

関羽が考えていると

一刀「関羽さん、この子気を失っているみたいだから運ぶの手伝ってくれろ?」

一刀が声をかけてきた。

そして二人は張飛を穴に運ぶと

張飛「うにゃっ!?!」

張飛が目を覚ました。

一刀「目が覚めたようだな」

スッ!

一刀が張飛の顔を見ると

張飛「ひっ！？謝るから痛いお仕置きは嫌なのだ！」

ズザザーッ！

張飛はいきなり後退りしてきた。

関羽「我々はお前をいじめたりはせん、お前に役人に謝ってもらおうと来たのだ」

一刀「そもそも何で村に悪戯しに行くんだ？」

一刀が聞くと

張飛「…寂しかったのだ」

張飛がポツリとつぶやいた。

張飛「鈴々はおじいちゃんが行ってからずっと一人ぼっちなのだ、だから村の子供をひき連れて悪戯してたのだ。悪戯すればみんな鈴々と一緒にいてくれるから、でも夜になるとまた一人ぼっちになるのだ…」

張飛が泣きそうになると

ガバッ！

一刀は張飛を抱き締めた。

一刀「一人で寂しかったんだな、でも悪戯はダメだよ」

一刀がささやくと

張飛「ヒック…ごめんなさいなのだ〜！」

張飛はわんわん泣き出した。

関羽「（この男は私にはない不思議な力があるのかも知れないな）」

この時、関羽の一刀に対する評価が上がった。

そして夜になり、

カポ〜ン！

関羽「こんな山の中でお風呂に入れるとは思わなかったな」

関羽は一刀が寝ている隙にお風呂に入っていた。

その時、

ガラリッ！

風呂の扉が開いて

張飛「鈴々も入るのだ〜」

ザブンッ！

張飛が飛込んできた。

関羽「こらお前！静かに入らんか！！」

関羽が張飛を叱ると

張飛「（じ〜）」

張飛は関羽の胸を見つめていた。

関羽「な…何だ！？」

関羽が聞くと

張飛「関羽のおっぱいはどうやって大きくなったのだ？」

関羽「なっ！？／／／」

関羽は顔を赤くした。

張飛「どうしてなのだ？教えてほしいのだ！」

あまりしつこく聞いてくる張飛に関羽は

ザバツ！

風呂から体をあげると

関羽「胸に大志を抱けばそのぶん大きくなる！」

バンツ！

張飛「オオーツ！」

関羽が凄いことを言った直後に

ガラリツ！

一刀「俺も風呂に入るかな…」

一刀がいきなり風呂に入ってきた。

関羽「……」

一刀「……」

そして互いを見つめ合った二人は

関羽「キヤーツ！この変態！／／／」

ポイポイツ！

関羽はそこら辺にあるものを投げつけてきた。

一刀「俺は何も見えてないから！ピンクの先っぽなんて見てないから！？」

関羽「見てたんじゃないですかー！！／／／」

自ら墓穴を掘る一刀だった。そして関羽の一刀に対する評価が少し

下がった。

張飛「（こんなに騒がしいのは久しぶりなのだ）」

そして次の日の朝

三人で役人に謝りに行き、何とか許してもらったのだが

関羽「何でついてくるのですか!？」

関羽の後ろには一刀と張飛がついてきていた。

一刀「ほらっ！俺はこの先どうすればいいのか分からないしさ!？」

張飛「鈴々は関羽とお兄ちゃんのが好きになったのだ」

こう言われた関羽は

関羽「仕方がないですね、一人旅も飽きてきましたしいいでしょう」

旅に連れていくことを了承するのだった。

張飛「やったのだ!でもどうせなら真名も交換しあうのだ!」

一刀「真名^{まな}って何？」

関羽「北郷殿は真名も知らないのか!真名とは聖なる名で許可なく言えば首を切られてもおかしくないのだぞ!」

「一刀、（ブルッ！？）以後気を付けます！」

こうして一刀、関羽（真名は愛紗）、張飛（真名は鈴々）の三人旅が始まったのだった。

「三人が揃う時」(後書き)

この話を考えていたとき、真っ先に思い付いたのがお風呂のシーンです。

「公孫贄の城にて」

愛紗と鈴々と共に旅をすることになった一刀

そして一行は公孫贄が太守を勤めるといふ村にやって来た。

一刀達が何でそんな村に行くのかというと

愛紗「旅をすることは早めに路銀を稼がなくてはならないからです。ですからそのためにどこかの主君に仕えなければならぬのです！」

鈴々「愛紗は誰にいつてるのだ？」

一刀「さあな？」

それは誰にもわからない

そして一行が村の門にたどり着くと

門番「その三人何者だ！」

門番に止められた。

すると愛紗は

愛紗「我が名は関羽雲長、噂に聞く黒髪の子盗りだ！」

愛紗が叫ぶと門番は

門番「ほんとに噂の黒髪の山賊狩りか？確か黒髪の山賊狩りは超がつくほどの絶世の美女だと聞いたが？」

門番は頭を悩ませた。

それを聞いた愛紗はがっくりとしていた。

鈴々「よほど自分の美貌に自信があったようなのだ」

「一刀」そういうのを確か自画自賛っていうんだよ」

自画自賛…自分で自分のことをほめること。

「一刀と鈴々がヒソヒソ話していると

愛紗「聞こえてますよ！！」

愛紗にはしっかり聞こえていた。

愛紗「どうせ私は絶世の美女じゃありませんよー！」

愛紗は怒って一刀達を追いかけて回した。

「一刀」ごめんなさい！？」

鈴々「許してほしいのだから！？」

愛紗「誰が許すかー！」

結局逃げた二人は愛紗に捕まってしまい頭に大きなタンコブを作った。

その様子を見ていた門番は思った。

門番「（ほんとにこの人は黒髪の山賊狩りなのか？）」

そう思うしかなかった。

しばらくして

三人が公孫贇の城の中に入ると東屋（休憩所）から声が聞こえてきた。

公孫贇「また山賊が出てくるとはこの辺には何人山賊がいるのやら？」

東屋にて公孫贇が頭を悩ましていると

愛紗「失礼だが貴殿は幽州の太守である公孫贇どののでしょうか？」

愛紗が聞くと

公孫贇「確かに私は幽州の太守である公孫贇伯珪だがお前達は誰だ？」

やけに太守を強調して言う公孫贇が聞くと

愛紗「我が名は関羽雲長と申します」

鈴々「鈴々は張飛翼徳なのだ！」

一刀「俺は北郷一刀です」

三人が自己紹介をすると

鈴々「ねえねえ、お姉ちゃんはほんとに太守なのかなのだ？鈴々より弱そうなのにおかしいのだ」

鈴々の失礼な発言に

愛紗「こらっ！鈴々失礼ではないか！」

愛紗が鈴々を叱ると

公孫賛「別に構わないと言われなれてるからな…」

最後の方をボソツと言つと

公孫賛「おちびちゃん、私は確かに地味であり目立たないが白馬に乗ればどんな相手にも負けないすごい人物なのだ！人を見かけで判断したらいけないぞ！」

公孫賛が言つと

？「人を見かけで判断してはいけないと言つた伯珪殿がそのおちびの実力も分からぬとは面白いことですね」

どこからか声が聞こえてきた。

愛紗「今の声は何者だ！」

鈴々「隠れてないで出てくるのだ鈴々はちびじゃないのだ！」

二人が声の主を探していると

一刀「その木の後ろに誰かが隠れているだろ！」

全員『!?!?』

そしてみんなは一刀が指差した木を見てみると

?「ほほう、この私がどこにいるのかを見抜くとはお主はなかなかの腕前ですな」

スッ

木の後ろから白を主体とした服を着た女の子が現れた。

公孫賛「趙雲、やっぱりお前だったのか!？」

趙雲と聞いて一刀は頭の中を調べてみた。

趙雲で有名なエピソードといえば長坂の戦いで劉備の息子の命を救ったことで有名である。

公孫賛「すまないみんな、こいつは我が軍の客将で名は趙雲子龍

と言っんだ」

趙雲「趙雲と申す！以後お見知りおきを」

趙雲が軽く挨拶すると

公孫賛「ところで趙雲よ、さっき見た目で判断するなっっていうたのは何故だ」

すると趙雲は

趙雲「簡単なことです、こやつらは見た目はひ弱だが武力ならば伯珪殿を遥かに越える実力ですぞ」

そして趙雲は愛紗と鈴々を見ると

趙雲「そっちの黒髪の得物は偃月刀で武力が優れていて赤面症ですな」

趙雲が言うと

愛紗「なっ！？／＼／」

顔を赤くしていた。どうやら凶星らしい

趙雲「そちらのおちびは力は強いが頭は悪いですな」

鈴々「なっ！？」

趙雲「そしてそちらの殿方は少々スケベでありますがあなた達の中

で一番強い、違いますかな？」

愛紗「何を言うのだ趙雲殿、北郷殿の実力は…」

愛紗が最後まで言おうとすると

門番「公孫賛さまー！！」

門番が慌てて駆け出してきた。

公孫賛「そんなに慌ててどうしたんだ！？」

公孫賛が聞くと

門番「実は山賊が村に現れて村の娘をさらったようです！！」

公孫賛「何だって！？」

「人質奪還作戦」

呉の国を飛び出した一刀達は現在、ある荒野にて休んでいた。

駆けつけてきた兵によって村娘が賊にさらわれたことを知った公孫賛は

公孫賛「私がおさめる村から人質が出るなんて！？こうしてはおれん直ぐ様娘を助けにいくぞ！」

公孫賛が外にいこうとすると

趙雲「待たれよ伯珪殿！」

趙雲に呼び止められた。

公孫賛「何が待てだよ趙雲！早くいかないと娘の命が危ないんだぞ！」

公孫賛が言うと

趙雲「しかし、大勢でいけば賊にさられるようなもの、ここは少数でいけばよいかと」

一刀「確かに趙雲の言う通りだな」

一刀も趙雲の案に便乗した。

公孫賛「しかし少数でとはいっても自慢じゃないが我が軍は単体では弱いやつらばかりだぞ」

確かに自慢することではない

趙雲「その点に関してはご安心を、私がいきますから大丈夫でございます」

趙雲が言うと

愛紗「一人では危ないだろう私もいかせてもらおうぞ」

鈴々「愛紗がいくなら鈴々も行くのだ！」

一刀「じゃあ俺もだな」

しかし愛紗は一刀の参入に不満を持っていた。何故なら一刀の実力を知らないからである。

でも長々と話している時間がないので連れていくことにした。

賊のアジト

愛紗「ここが賊のアジトのようだな」

趙雲「見張りがいないのがちょうどよいな」

四人は見張りがいないのを確認すると

愛紗「それでは突入といくぞ！」

全員『オオーツ！』

みんなは潜入を開始した。

そして広場らしい場所にたどり着くと

わいわいガヤガヤ

賊達は宴会をしていた。

子分「お頭、今日は上玉の女が手に入りましたね」

お頭「まったくください！あの村にはババアとブスしかいなかったから
今まで襲わなかったがこんな上玉がいたとはな」

ムニユツ

村娘「いやんっ!？」

お頭が村娘の胸をさわることを嫌がる娘

お頭「胸くらいさわったって滅るもんじゃねえし別に良いじゃんか
よ」

ムニユツムニユツ!

嫌がる娘に対してなおも続けるお頭

それを陰から見ていた愛紗達は

愛紗「おのれっ!外道らめ!!」

趙雲「ほほう、あのお頭なかなか揉むのがうまいな」

一刀「鈴々には早いから見ちゃいけません！」

パッ！

鈴々「お兄ちゃん、何で目隠しするのだ？」

怒る愛紗、変なところに興味をもつ趙雲、鈴々の目をふさぐ一刀など様々な反応であった。

しかしずっと見ているわけにもいかないのです

愛紗「私と趙雲は正面から行きます、北郷殿は裏口から、鈴々はいざというときの出口を探してくれ！」

全員『了解！』なのだ

実はこの組み合わせには裏があった。

それは裏口なら敵が少ないと愛紗が考えわざと一刀を裏口に配備したのだ。

そして全員が行動を開始した。

お頭「やっぱり若い娘の胸は揉みごたえがあつて良いな」

お頭がまだ娘の胸を揉んでいると

愛紗「そこまでだ外道共！」

そこに愛紗達が現れた。

愛紗「我々はその娘を救いに来た！おとなしく返せば見逃してやる！」

愛紗が言うと

子分「お頭、あいつらきつとこの辺をおさめているハムの兵ですぜ！？」

子分が慌てると

お頭「慌てるんじゃねえ！裏口にいる一万の兵を呼んできやがれ！」

愛紗「一万の兵だと！？」

愛紗は驚いた。

まさか一万もの兵が裏口に潜んでいるとは思わなかったからだ。それと同時に一刀の心配をしていたが

一刀「悪いけど兵は来ないよ」

全員「！？」

全員が声のする方を見るとそこには一刀がいた。

お頭「まさか裏口から来たのか！？一万の兵はどうした！？」

お頭が聞くと

「一刀「相手が弱すぎるんで全員気絶してるよ」

スッ！

「一刀が指差した裏口を全員が見てみると

そこには一万の兵が気絶して倒れていた。

「一刀「さてと、人質も取り返したし、さっさと帰ろうぜ！」

お頭「なにっ！？」

お頭が慌てて人質を見るとさっきまで気絶して抱いていた人質がいつの間にか一刀の背中におぶさっていた。

お頭「何してやがるやつらを逃がすな！？」

賊達『ワアー！ワアー！』

賊達が一刀達を追いかけるが

「一刀「この早さなら逃げ切れる！」

ダダッ！

「一刀達の足は早く、賊達をあっという間にふりきった。

愛紗「信じられん、人を背負いながら私や趙雲より早いだなんて
!?!」

愛紗はその事を驚いていた。

趙雲「やはり私の目に狂いはなかったようだな」

そして三人が走っていると

鈴々「お兄ちゃん、愛紗、こっちなのだー！」

遠くの方で鈴々が呼んでいた。

愛紗「でかしたぞ鈴々！」

ダダッ!

そしてみんながたどり着くとそこには

ガラーンッ!

目の前には断崖絶壁の崖があり向かい側まで約30メートルという
距離があった。

鈴々「ここしか道がなかったのだ!？」

趙雲「とはいえこの距離を飛び越すのは至難だし、くずくずして
いると賊が来てしまう!？」

全員が悩んでいると

「一刀「この方法しかないな」

「スッ！スッ！スッ！

「愛紗「えっ！？」

「鈴々「んにゃっ！？」

「趙雲「なっ！？」

「一刀は三人を背負うと

「一刀「いくぜーっ！」

「ピョンッ！」

そのまま向こう岸まで跳んでいこうとした。

「愛紗「何て無茶な！？」

「趙雲「この手がありましたか！？」

「鈴々「鈴々空を飛んでいるのだー！？」

確かに落ちたら一貫の終わりの状況で無茶なことだと思っが

「ダンッ！」

「一刀は無事に向こう岸にたどり着いた。」

愛紗「渡れたのか!？」

趙雲「奇跡が起きたようだな」

鈴々「お兄ちゃん、もう一回やってなのだ」

確かに女とはいえ四人を背負って崖飛びはリスクが大きすぎて危険であった。

これは一刀だからできることです真似しないでください。

「一刀」ここまでではこれないと思うけどさっさと城に戻ろう」

そして一行は城に戻るのだが

鈴々「でもお兄ちゃん、あのままじゃいずれ賊が仕返しに来るのだ」

確かに鈴々の言う通りだが

「一刀」それなら大丈夫だよ来るときにあった吊り橋を壊しておいたからね」

そう、実は一刀は来るときにあった吊り橋を全員が渡った後、壊しておいたのだ

これを聞いた愛紗は

愛紗「なっ！！ではもし我々が入り口から戻ったときには帰れなかったかもしれないじゃないですか！！」

すごく怒っていた。

そして一行が公孫贇の城にたどり着くと

公孫贇「お前らよく無事だったな！？」

とても驚いていた。

それもそのはず、一万以上いる賊のアジトにたった四人で忍び込んで怪我ひとつなく帰ってきたのだから

愛紗「あのう公孫贇殿、誠に申し訳ないが仕官の件なのだが我々は旅を続けたいので遠慮させてもらいたいのだが」

愛紗が言うと

公孫贇「なら仕方がないさお前達のような強いやつが来なくて残念だけだな」

公孫贇が言うと

趙雲「申し訳ないが伯珪殿、私も離れさせていただく」

全員「えっ！？」

趙雲の言葉に全員が驚いた。

趙雲「伯珪殿のもとにいるよりこの者達と旅をする方が面白いからな」

趙雲が言つと

公孫賛「そうかお前が出たいなら仕方がない達者でな！」

素直に見送る公孫賛だが心のなかでは

公孫賛「（お前がいったらうちの軍は弱くなるじゃないかだから帰ってきてくれ）」

とても残念がっていた。

趙雲「というわけでこれから世話になる趙雲子龍こと真名を星と申す！」

こうして一刀達の旅に新しく星が加わったのだった。

「喧嘩別れ」

一刀達三人の旅に新しく趙雲こと星が加わった。

鈴々「ランララライン 山があるから山なのだ、クマに出会って
くまったな」

一刀「鈴々、その歌は何だ？」

一刀が聞くと

鈴々「じいちゃんから教わったクマ避けの歌なのだ！楽しいからお
兄ちゃんも歌うのだ」

こういうと鈴々を止めることができないので

一刀「じゃあさっそく！山があるから山なのだ クマに出会って
まったな」

鈴々「鈴々も歌うのだ 山があるから山なのだ……」

二人が仲良く歌っていると

愛紗「それにしても星はついてきてよかったのか？公孫贄の元にい
ればそれなりに活躍できただろうに？」

愛紗が聞くと星は

星「確かに愛紗の言う通りなのだが所詮公孫贄殿の元ではそれほど

有名にはなれないし、はじめからいつの日か離れる予定だったしな
」

単純な性格だなと思う愛紗だった。

星「それにしてもすまないな家族の旅に便乗してしまつて」

星の質問に愛紗は

愛紗「は！？家族とはどういう意味だ？」

すると星は

星「どういう意味つて、鈴々はお主と一刀殿の娘だろう？」

これを聞いた瞬間愛紗は

愛紗「ななな！？なに馬鹿なことをいつてるのだ！私と一刀殿はそ
ういう仲ではないし、私は一度も子供を作るような行為は／＼／」

愛紗が顔を赤くしながら反論すると

星「ほほう、ならば一刀殿の妻には私になろうかのう」

星がからかいながら言うと

愛紗「それはいかん！」

愛紗は必死で止めに入った。

愛紗「はっ！？（なぜ私はむきになっているのだ？別に一刀殿のこととは何も思っていないはずなのに！？）」

この時、愛紗は気付いてなかった。愛紗は知らないうちに一刀に対して恋愛感情が芽生えていたことを

星「（やはり公孫贄を捨ててこっちに来たのはいい選択だったようだな）」

そして星は何かを知ったようにニヤリとするのだった。

そして昼時頃、ある飯屋では

愛紗「いらっしやいませ〜！」

星「ご注文はいかがかな？」

ウェイトレス姿の愛紗と星がいた。

愛紗「まさか星が無一文だったとはな！？おかげで働かなくてはならなくなっただけだ！」

星「まあ別にいいではないか私は結構楽しいし、一刀殿も喜んでくれるみたいだぞ」

スッ！

そして愛紗は星が指差した先を見てみると

一刀「ご注文はいかがですか？」

ニコッ

女の子達『ポワーン／＼／』

一刀のスマイルに女の子達は釘付けだった。

それを見た愛紗は

愛紗「別に私が気にすることでもない！」

と言いながらも

メキッ！バキッ！

お盆に八つ当たりをして破壊していた。

一方鈴々は

鈴々「はにゃー！？」

ガッチャーン！！

走っては皿を割り

鈴々「美味しかったのだ」

注文を届ける途中で全部食べてしまったりと散々だった。

それが何回も続くと

愛紗「鈴々！足手まといだから宿でおとなしくしておれっ！」

愛紗の雷が落ちた。

鈴々「わかったのだ！出ていけと言っなら出ていくのだ！」

ダッ！

鈴々は飯屋を飛び出していった。

一刀「鈴々！？ちょっと心配だから鈴々についていくよ!？」

ダッ！

一刀も鈴々のあとを追って飯屋を出ていった。

星「おやおや、子供と旦那が家出してしまったがいいのかな？」

愛紗「だから私と一刀殿は夫婦でもないし、子作りの経験もないっ
！」

愛紗はむきになって反論した。

「袁紹軍武將試験（前編）」

愛紗と喧嘩して鈴々は出て行ってしまい、一刀は鈴々のあとを追っていくのだった。

一刀「なあ鈴々、愛紗だって悪気はなかったんだからさ！」

一刀が鈴々に言うと

鈴々「お兄ちゃんは無言で黙ってほしいのだ！鈴々はどうしてもお金をためて愛紗を見返してやりたいのだ！」

しかし、世の中はそう甘くはなかった。

店主「子供はダメだよ」

店主「ガキはママのところに帰りな！」

店主「そっちの兄ちゃんならいいけどよ」

店主「うちは二人とも大歓迎よん 可愛がってあげるわねん」

みんな鈴々が子供だからと馬鹿にして雇ってくれなかった。（最後は怪しかったが）

そして一刀と鈴々が途方にくれていると

鈴々「お金を稼ぐって案外難しいのだ〜!!!」

「刀」（それ以前に雇って貰えてないけどね）確かに大変だよな」

二人がため息をついていると

ザワザワッ！

大通りが騒がしくなってきた。

「刀」何の騒ぎだろ？」

鈴々「見たいけど人混みで見えないのだ〜！」

背が低い鈴々では騒ぎがよく見えないのだ。

「刀」ほらよっ！」

スッ！

そんな鈴々にすかさず「刀」が肩車をする

鈴々「おおーっ！高いのだ〜」

「刀」そんなことより鈴々、騒ぎの元がなんなのか確かめないと
な」

鈴々「わかってるのだ」

じーっ

鈴々が騒ぎの元を見るとそこには立て看板があった。

鈴々「えーっと、袁紹軍武将大募集！見事採用されたら大金プレゼント」

立て看板にはそう書かれていた。

そして立て看板を見た鈴々は

鈴々「こっ…」

鈴々「これなのだー！」

？「これだー！」

鈴々が叫ぶと同時に誰かが叫んだ。

声のする方を見てみると

？「えっ！？」

茶髪のポニーテールの女の子がいた。

「袁紹軍武將試験（前編）」（後書き）

話の展開はうまく進まないし、ネタは思い付かないし、新作品が頭の中で完成しつつある、もしかしたら新作を書くためこの小説の投稿速度が遅くなるかもしれません。

「袁紹軍武將試験（後編）」（前書き）

遅くなりました。久々の更新です。

「袁紹軍武將試験（後編）」

？「へえ、あんたらも袁紹軍兵士募集の看板に目をつけたのかよ」

鈴々「そうなのだ！」

一刀「俺は違うけどね」

看板前にてポニーテールの女性と出会った一刀と鈴々はすっかり打ち解けあつて会話をしていた。

馬超「そっぴいや自己紹介がまだだったな、あたしの名前は馬超だ。よろしくな！」

鈴々「鈴々は張飛なのだ」

一刀「俺は北郷一刀、一刀って呼んでくれ」

そして互いに自己紹介をした後

馬超「それじゃあ仲良く募集会場に行くとするか」

鈴々「応なのだ！」

一刀「やれやれ」

募集会場

そこには

？「おーほっほっほっ！こんなに沢山の皆さんがわたくしの家来になりに来てくれてわたくし自分の人を引き寄せる魅力に少しは喜ばしいですわ」

金髪縦ロールを二つ構えた女性が何かを話していた。

一刀「誰だあの人は？」

鈴々「なんだかおばさん臭いのだ」

失礼なことを言う二人に

馬超「馬鹿っ！あの人が袁紹さんだぞ！」

馬超が言うと

一刀「マジでかよ!？」

鈴々「あんなオバサンに仕えるなら鈴々やる気がなくなるのだ」

帰ろうとする鈴々だが

袁紹「ではみなさん、見事選ばれた方は大金を差し上げますので頑張ってくださいな」

ピクンッ！

袁紹から大金という言葉が出てくると

鈴々「大金のためなら少しは我慢するのだ！」

コロコロ態度を変える鈴々だった。

そして

袁紹「では集まったみなさん、これからはわたくしを守る…」

袁紹が最後まで言おうとすると

？・？『ちよつと待ったー！』

サッ

何者かが会話に入って舞台の真ん中に立った。

文醜「やいやいテメエら！どうしても袁紹様の家来になりたければ

一の家来である文醜と」

顔良「二の家来である顔良を倒してからにしてください！」

バンツ！

二人は参加者達の前に立つと

男A「なんだと生意気な！」

男B「相手は女が二人だ、男の力を見せてやるぜ！」

男達『うおーっ！』

ドドドドッ！！

男達は一斉に文醜と顔良に立ち向かうが

ドカツ！バキッ！ボコッ！

ぼろくん

男達は返り討ちにあっけしきボロボロになった。

文醜「弱い男共だな！」

顔良「それで袁紹様の家来になりたいだなんて笑わせてくれますね
」

実はこの二人が家来募集を邪魔するには理由があった。それは袁紹に大金を払わせないためである。

文醜「（大金なんて払わしたらただでさえ少ない給金がさらに減っちゃうよ）」

顔良「（絶対に希望者を倒さなくちゃ）」

二人は男達を倒して安心していたが

スッ

鈴々「まだ鈴々が残っているのだ！」

馬超「あたしだって残ってるぜ！」

まだ二人残っていた。

袁紹「こうなったら仕方ありませんわね、ブ男さん達は消えたよ
うですし、互いに競いあってもらいましよう！」

鈴々・馬超・文醜・顔良『競いあい？』

四人が驚くと

袁紹「袁紹軍に必要な知力・美力・武力、この三つのうち先に二つ
とった方の勝ちですわ！」

袁紹が言うと

鈴々「受けてたつのだ！」

馬超「あたしだって！」

文醜「負けられないよな！」

顔良「そうだよね！」

ゴゴゴッ…!!

今、四人の目には炎が燃えたぎっていた。

一刀「ややこしいことになったな」

一刀はただ一人外野で見守るしかなかった。

しばらくして

陳琳「さあ、袁紹様の突然の思い付きで急遽開かれた家来争奪合戦！果たして勝つのは文醜・顔良選手か？それとも張飛・馬超選手か？実況・解説は私、陳琳がお送りします！」

観客達「わあーっ！」

ズツシリ

そして袁紹は玉座の椅子でふんぞり返っていた

陳琳「まずは知力対決です！」

そこで用意されたのが、バナナと数個の踏み台

陳琳「上空に吊られたバナナをジャンプせずにつかまえてください！」

ズコッ！

これに一刀がずっこけた。

一刀「チンパンジーのテストかよ！こんなもの誰だって解けるだろうが」

ところが

鈴々「背が届かないのだ〜！」

馬超「武器使っちゃダメなのか？」

文醜「バナナを食うのを諦める！」

ズコッ！

またまた一刀はずっこけた。

男「兄ちゃん大丈夫か？」

一刀「あんな問題も解けないのかよ！」

誰もが解けないと思っていたが

顔良「これでいいんですよね？」

スッ

観客達『おおーっ！？』

顔良は普通に踏み台を積み重ねて見事バナナに手を触れた。

馬超「そんな手があったのかよ〜！」

文醜「さすが斗詩（顔良の真名）知力34なだけはあるぜ」

顔良「文ちゃん〜！そんな言い方ないでしょ〜！」

何はともあれ文醜・顔良組の勝利

陳琳「続いては美力対決です」

袁紹「それぞれ服を変えて会場みなさんに評価してもらいますのよ」

ジャーンッ！

かごの中には沢山の服がおかれていた。

鈴々「ねえねえ馬超、どんな服を着ればいいのだ？」

馬超「あたしだって聞きたいよ！」

二人が服選びに悩んでいると

一刀「仕方ない、大金を手に入れるためだし協力するよ」

スッ

一刀が舞台上上がった。

陳琳「どうやら張飛・馬超組は男に助っ人を頼むようですがいいのでしょうか？」

陳琳が袁紹に聞くと

袁紹「別に構いませんわ、あんなブ男に何ができると言いますの？」

袁紹が認めたことにより一刀の助っ人が許可された。

「一刀」(背丈が小さな子と中くらいな子に似合って人気がありそうな服といえば…あれしかないな)」

そしてお披露目の時

文醜「どうだいあたいの達のセンス？」

顔良「どうかな？」

どろくん

はっきり言って二人の服に関するセンスはゼロに近かった。

そして鈴々達はというと

ジャーンッ！

馬超「ポケ○ンゲットだぜ！／＼／」

鈴々「ピカールッなのだー！」

どこかで見たような赤い帽子を被った男と黄色いネズミのコスプレをした二人がいた。

馬超「(あたしにこんな格好させやがって！こんな変なのがつけるわけないだろうが)」

ところが観客の反応は

観客達『わぁーっ！』

馬超の考えとは違い大盛況であつた。

陳琳「さあこれで一対一の戦いになった。勝負の結果は次の武力対決で決まるぞ！」

鈴々「力比べなら負けないのだー！」

馬超「あたしだって負けないぜ！」

文醜「ここまできたら意地でも負けてたまるかい！」

顔良「絶対勝とうね文ちゃん！」

バチバチッ！

火花をとばしあう四人

袁紹「では次の武力対決の勝敗の付け方ですが、ここはやっぱり…」

「

スッ

そう言つて袁紹は背中から

バァーンッ！

袁紹「袁家に伝わる白鳥のまわしを締めての女相撲としますわ！」

まわしに白鳥の首がついたものを取り出した。

男達『うおーっ!!』

まわしを締めた選手達に期待する男達

一刀「（鈴々はともかく、馬超があのみわしを締めると…）」

モワッ

そして一刀は白鳥のまわしを締めた馬超を妄想していると

ポカーンッ!

馬超「このエロエロ魔神！」

一刀は馬超に後ろから殴られて気絶した。

そして試合の時、舞台にはすでに

顔良「文ちゃん、ちょっと恥ずかしいよう／＼」

文醜「我慢しろ斗詩、恥ずかしいのはあたいだって一緒さ／＼」

ジャーンッ!

すでに白鳥のまわしを締めた二人がいたが鈴々達の姿はなかった。

陳琳「おおっと、ここで速報です。張飛・馬超の両選手はくだらな
いから帰るとのことです。よって不戦勝により文醜・顔良組の勝利
とします！」

この結果に

文醜「勝ったのはよかったけれど…」

顔良「こんな恥ずかしい格好しなくなかったよね」

袁紹「大金を差し上げるというのに欲のない方達でしたわね」

これにて袁紹軍兵士募集大会は幕を閉じた。

一方、一刀、鈴々、馬超はというと

鈴々「ハァ、結局お金は手に入らなかったのだ」

一刀「鈴々はよく頑張ったよ！」

馬超「最後があんな勝負じゃなけりやな」

三人が言いながら歩いていると

カツンッ！

一刀達の泊まる宿の前に

愛紗「遅いぞ鈴々！」

バンッ！

偃月刀を持った鬼が待ち構えていた。

鈴々「愛紗！？」

愛紗「まったくお前は勝手に出て行って宿には戻ってないし、心配かけさせおつて！」

一刀「愛紗、鈴々は…」

一刀が口を挟もうとすると

愛紗「一刀殿は口を出さないでください！ あなたも同罪なんですよ！」

一刀「はい…」

シュルルッ

と勝手に小さくなる一刀

愛紗「だいたいお前は…」

愛紗が鈴々に説教していると

鈴々「ぐすんっ」

鈴々は涙を流しながら

鈴々「ごめんなさいなのだ〜！」

ぎゅっ

愛紗に抱きついた。

愛紗「鈴々、私も少し叱りすぎたようだな。もう泣くでない」

ぎゅっ

愛紗は鈴々を優しく包み込むように抱いた。

一刀「愛紗〜、俺もごめんなさ〜…」

一刀も愛紗に抱きつこうと涙を流しながら駆け寄るが

ドグボツ！！

一刀「何故俺だけ!？」

バタリッ

愛紗のクロスカウンターを食らって一刀は倒れた。

そして倒れた一刀に向かって

星「一刀殿、愛紗よりは小さいが私の胸ならば貸してやるぞ」

星が一刀の前で手を広げると

一刀「星〜！」

バツ

すぐに飛びかかる一刀

愛紗「一刀殿、鈴々がいるのですから少しは自重してください！

」

鈴々「鈴々は別に構わないのだ。それにそれは愛紗が勝手に焼きもちやいているだけなのだ」

星「愛紗よ、お主も少しは素直になればよいのに」

愛紗「何いつてるかー！／＼／＼」

馬超「あの、あたしはどうすりゃいいんだよ！」

こうしてなんとか仲直りした愛紗と鈴々であった。

「袁紹軍武將試験（後編）」（後書き）

次話の予定は未定ですが、ついに華琳が出てきます

「馬超、曹操を狙う」（前書き）

久しぶりの更新です。連載していた作品が一つ終わって時間に余裕ができたので投稿しました。（また次回から新作を投稿するので不定期投稿になります）

「馬超、曹操を狙う」

馬超を一刀達が泊まっている宿においてから一夜が明けた。

そして次の日の朝

愛紗「ほう、馬超はある人を追って故郷の西涼からやって来たのか」

愛紗達は真名は交換していないが馬超とすっかり打ち解けていた。

馬超「ああ、名前は教えられないけどな」

星「確か西涼には当主である馬騰殿がいたはずだがよく許してくれたものだな」

星が言つと

馬超「・・・」

馬超は黙りこんだ。

鈴々「馬超はどうしたのだ？」

一刀「さあね？」

一刀達が不思議に思っていると

ゴォンゴォンッ！

突然銅鑼ひびの音が鳴り響き

ササッ！

人々が避けて一本の大きな道を作り上げた。

愛紗「何が起きるんだ？」

鈴々「おじちゃん、何が始まるのだ？」

鈴々が側にいたおじちゃんに聞いてみると

おじちゃん「この村に国のお偉いさんが通るからみんな道を開けて
いるんだよ」

一刀「なるほど大名行列みたいなもんか」

星「それはさておき誰が通るのだ？」

星がおじちゃんに聞くと

おじちゃん「確か曹操とか…」

ビクンッ！

おじちゃんの話聞いた馬超は

馬超「あんの野郎！」

ダダッ！

血相変えて大きな道に向かっていった。

愛紗「待て馬超！？」

一刀「追いかけるぞ！？」

ダダッ！

一刀達も馬超の後を追っていった。

パカポコッ

その頃、大きな道には金髪縦ロールを2つ構えた女の子が大きな馬に乗り、その左右を赤い服を着た黒髪のロングの女性と青い服を着た水色の髪の女性が金髪縦ロールを守るように馬に乗っていた。

金髪縦ロール「この国は平和ね」

黒髪ロング「曹操様が納めている国はどこもかしこも平和に違いありませんよ」

この金髪縦ロールの女の子は実は曹操孟徳（真名は華琳）である。

そして黒髪ロングは夏侯惇（真名は春蘭）、水色の髪は夏侯淵（真名は秋蘭）という名であった。

華琳「だけでも争いを起こしてこそ平和が起きるのよ！もっと国を

大きくするには戦をしなければ」

春蘭「その通りです曹操様」

華琳達が話をしていると

馬超「曹操覚悟ー！」

ダダッ！

馬超が十文字槍・銀閃を構えて華琳に突っ込んできた。

ジャキンッ！

銀閃は華琳をとらえようとするが

ガキンッ！

おしくも春蘭の大剣・七星餓狼に食い止められてしまった。

馬超「くそっ！ならもう一度！」

サッ！

馬超は春蘭から距離をとって再び攻めようとするが

一刀「落ち着けよ馬超！」

ガシリッ！

後ろからやって来た一刀に捕まれてしまった。

馬超「（このあたしが気配を感じれなかったなんて！？）放せ北郷！曹操はあたしが殺してやるんだ！」

じたばた！

一刀に押さえつけながらも暴れる馬超に対して

一刀「そんなに暴れると！？」

むにっ！

馬超「／／／」

馬超が暴れたせいで一刀は馬超の胸を揉んでしまいその瞬間

馬超「このエロエロ魔神がー！どこ触ってやがるんだ！」

一刀「不可抗力…ぐほっ」

ドカカツ！

馬超の標的は華琳から一刀に切り替わり、一刀は馬超にボコボコにされた。

愛紗「馬超、大丈夫か！？」

鈴々「急に飛び出してどうしたのだ？」

そしてようやく愛紗達が馬超の元にたどり着くと

星「ほう、これはまたすごいことに」

ポローン

そこには馬超にボコボコにされた一刀が倒れていた。

みんなが一刀に夢中になっていると

華琳「春蘭・秋蘭！この者をとらえなさい！」

春蘭・秋蘭『はっ！』

シュバツ！ ガシツ！

華琳に命じられて二人は馬超を取り押さえた。

馬超「しまった油断しちゃった!?」

そして華琳は押さえつけられている馬超の顔を見ると

華琳「あら、あなたは確か西涼太守である馬騰の娘だったわね。あのマヌケな馬騰にこんないい娘がいたとは驚きね」

父である馬騰を馬鹿にされた馬超は

馬超「うるさい！父を殺した敵討ちだあたしと勝負しろ！」

愛紗達『!?』

この言葉に愛紗達は驚いた。曹操は馬超の父である馬騰を殺したという事実が衝撃であった。

華琳「親の敵討ちに私と戦えっていつの？その心意気は買ってあげるけどこれから死ぬあなたとどうやって戦うというのかしら？」

愛紗達『！？』

またも愛紗達に衝撃が走った。

華琳は愛紗達を見ると

華琳「見たところ馬超の仲間らしいけど何故そうなるのか不思議なようね。答えは簡単よ、太守である私に刃を向けたものは即刻死刑！これは当然なのよ」

華琳が言うと

華琳「それではさよならね」

サッ！

華琳が去ろうとすると

愛紗「待ってくれ曹操殿！」

ビシッ！

愛紗が華琳を呼び止めた。

華琳「しつこいわね、今さら何を…」

くるっ

華琳が愛紗の方を向くと

ドッキーンッ！

華琳は愛紗に心を打たれた。

華琳「（やつだー！黒髪の子山賊狩りの関羽じゃない！？強くて美しいって聞いたから我が軍に入れようと思ったけどこれはチャンスだわ／＼／）」

もんもん

華琳が一人で妄想していると

愛紗「私達と馬騰は同じ宿に泊まっただけの仲だが殺されるといふのを黙ってみておれん！どうか馬超の命を助けて頂きたい！」

スッ

愛紗が頭を下げて華琳に頼むと

華琳「そうねえ、私の条件をのむというのなら馬超を殺すのは見逃してもいいわよ」

華琳が言うつと

愛紗「わかった条件をのもうだから馬超の命は助けてくれ！」

愛紗が華琳に頼むと

華琳「いいわ、馬超の命は助けてあげる」

愛紗「よかった（ホッ）」

華琳「ただし条件として関羽！あなたは今夜私とねや閨ねやで過ごすのよ！」

ビシッ！

愛紗「なっ！？閨だと／＼／」

この時愛紗は曹操の噂話を思い出した。曹操は女好きで気に入った女は閨に連れ込んで ピー することを

華琳「嫌ならいいのよ馬超は殺すし、天下の関雲長が一度決めたことから逃げ出したって噂になるからね」

華琳はいたいところをついてくる。

そして迷ったあげく愛紗の返答は

愛紗「わかった！私でよければ付き合おう！」

華琳と閨を共にすることを決意した。

華琳「商談成立よ。春蘭、馬超は牢に入れときなさい！では関羽、また夜にね」

スッ

そして華琳は去っていった。

鈴々「星、曹操は愛紗を閨に呼んで何するのだ？」

星「それはだなあ…」

星が鈴々に話そうとすると

愛紗「鈴々にはまだ早い！」

星「おやおや」

愛紗に怒鳴られてしまった。

そして夜が来て

愛紗は華琳が用意した天幕の閨で裸になっていた。

愛紗「（ううっ、馬超を助けるためとはいえ私のはじめてを曹操にやるなんて）」

愛紗は今さらながら後悔していた。ちなみに条件は愛紗一人だとい
うので星と鈴々は宿に泊まっている。

ヒラッ

華琳「うふふっ！関羽はしっとりつやつやできれいな」

華琳が天幕にタオル一枚を巻いて入ると

バサッ

華琳「さあ、閨の時間よ！」

華琳はタオルを脱ぎ捨てて愛紗に襲いかかるつもりとする。

愛紗「もうダメだ!?」

そして華琳と愛紗の肌が触れ合おうとしたその時！

ガシャンッ！

刺客「曹操、お命頂戴する！」

華琳の命を狙う刺客が天幕の上から剣を突き立てて襲いかかってき
た。

愛紗「(まずい!?得物は置いてきてしまったから反撃できない！
?)」

愛紗がどうにもできずに戸惑っていたその時！

バリッ！

「一刀「このくせ者がー！」

刺客が降りてきたすぐ後に天幕の上から一刀が現れた。

愛紗「一刀殿！？」

華琳「！？」

突然の一刀の登場に驚く二人

そして現れた一刀は

「一刀「くらえーっ！」

ドカツ！

刺客「ぐえっ！？」

刺客に一撃食らわせると

刺客「ちっ！邪魔者がいたとはな！？ここは退却だ」

サッ！

刺客が逃げようとする

「一刀「逃がすかよ待てー！」

ダッ！

「一刀も刺客の後を追っていった。

そんな騒動が起きたあと、天幕に取り残された裸の愛紗と華琳は

華琳「あの男は確か馬超に殴られていた情けない男ね。でもその情けない男に助けられるなんてね」

スッ

華琳はタオルを巻くと

華琳「もう帰ってもいいわよ、あの男に免じて勘弁してあげるわ」

愛紗「えっ!?!」

華琳「春蘭！関羽を送ってあげなさい！だけど私はあなたを諦めた訳じゃないからね、いつか必ずや私と閨を過ごしてもらおうよ」

愛紗「(ぞくっ!?!)」

その言葉に恐怖を感じる愛紗だった。

しばらくして、愛紗が春蘭に送られていると

春蘭「喜ぶがよい、華琳様が馬超を解放してもよいと言った。馬超と共に帰るがよい」

愛紗「う、うむ」

愛紗は何か考え事をしていた。

愛紗「なあ夏侯惇殿、ひとつ聞くが曹操殿は本当に馬騰殿を殺したのか？私にはあの者が人殺しするようにには思えないのだが」

春蘭「・・・」

愛紗の言葉に春蘭は黙りこんだ。

そして

春蘭「関羽よ、お前は人を見る目は確かなようだ。いいだろう信じてくれるかわからないが真実を教えてやる」

春蘭は話を開始した。

「馬超、曹操を狙う」(後書き)

ちなみにこの小説はアニメにそっていただきますので春蘭は眼帯をせず両目があります。

「馬騰殺害の事実」(前書き)

作者が早く続きを書きたいのと続きを楽しみに待っている人(いるのかな?)のため書いてみました。

「馬騰殺害の事実」

夏侯惇（春蘭）は馬騰殺害の事実を愛紗に話しかけた。

春蘭「今から数カ月前のことだ。華琳様と馬騰は何進將軍かしんに呼ばれていたのだ」

数カ月前

何進「退屈じゃのう、誰か余興（宴会の演芸）をせぬか」

退屈をしていた何進はその場にいた曹操（華琳）達に命じると

馬騰「ういゝ、ヒック！それでは何進將軍、この西涼太守である馬騰が余興をしましょう」

酒に酔った馬騰がいうと

スッ

馬騰はザルと手拭いを用意して

馬騰「これぞ和の国（日本）に伝わる宴会芸の一つ」

キュッ！

馬騰は手拭いを頭に巻いてザルを手に取ると

馬騰「ドジョウすくいぞいませー！あらえつたっせー！」

馬騰の意味不明な行動に

しゅん…

場の空気が冷めてしまった。

そして何進將軍は

何進「もうよい！つまらなすぎてあきれわい！」

ビシッ！

と厳しくいつてしまった。

馬騰「これじゃダメですか？ならば裸躍りでも…」

スッ

酒に酔った馬騰が服を脱ごうとすると

何進「無礼者！とつとと去るがよい！曹操、送ってやれ！」

アニメを知っている人ならわかると思うが何進將軍は女である。

何進は華琳に命じると

華琳「わかりました何進將軍！（何で私がこんな酔っ払いの世話を

！」

ホントは華琳だって従いたくなかったが何進の方が位イデオが高いので従うしかなかった。(もしそむいたら罰を与えられるため)

そして帰り道

馬騰「うい」

パカポコッ

馬騰は酔っ払いながら馬に乗っていた。

華琳「馬騰、危ないから気を付けなさいよ」

華琳が心配するが

馬騰「馬鹿言ってるじゃねえよ！俺を誰だと思ってるんだ西涼太守である馬騰様だぞ…」

馬騰が話を続けようとしたその時！

ぐらりっ

馬騰「えっ!?!」

ゴロゴロっ!!

馬騰「うわぁーっ!?!」

馬騰は馬から落馬して坂を転げ落ちた。

華琳「まったくもう、何をして…」

ひょこっ

華琳は馬騰が落ちていった坂を見てみると

華琳「!？」

馬騰は岩に頭を強く打ち、亡くなってしまった。

しかもタイミングが悪く

兵士「ひっ!？」

偶然その場にいた見つかってしまい

兵士「曹操様が馬騰様を殺害したぞー!？」

ダッ!

その場にいた兵士から見たらそう見えなくても不思議はなく兵士はそのまま逃げていった。

そして次の日、華琳に馬騰殺害の容疑がかかる。現代なら即警察行きたが、この世界では人殺しは当たり前なので華琳は逮捕されなかった。

だが瓦版（新聞）は各地に流れていく

春蘭「こんなでたらめ書きおって！」

ブリッ！

春蘭は瓦版を破くと

春蘭「華琳様、さっさと民達に話をしてやりましょう！」

しかし華琳は

華琳「ほっておきなさい、どうせ私が話したところで全員が信じるかどうかかわからないじゃない。むしろこの件で私に齒向かう者が増えて好都合だわ」

そして華琳は真実を公表しなかった。

春蘭「以上が真実だ」

春蘭が真実を話すと

愛紗「成程、では夏侯惇殿馬超には真実を話した方がいいのではないか？」

春蘭「・・・」

愛紗の言葉を聞いた春蘭は黙りこむが

春蘭「いいだろう。信じるかどうかかわらんがな」

そして牢屋前

春蘭は牢から出された馬超に全てを話す

馬超「嘘だつ！そんな話信じるもんか！」

と言った具合であつた。

愛紗「馬超、信じたくない気持ちもわかるが事実なのだ」

愛紗が春蘭をフォローするようなセリフを言うと

馬超「関羽！お前だつて曹操に騙されているんだ！いくら関羽でもそれ以上言つたら許さないぞ！」

愛紗にまできつく当たる馬超

すると馬超の後ろから

一刀「俺は夏侯惇の話信じるぜ」

バンッ！

一刀が現れた。

馬超「北郷！？」

愛紗「一刀殿！？」

春蘭「貴様は！？」

三人が突然現れた一刀に驚くと

一刀「愛紗すまないな刺客には逃げられちまってな。そして帰る時に夏侯惇の話が聞こえちまってな」

愛紗「（この私が気配を感じなかったとは！？）そ…そうか」

一刀「そして話を聞いてみたら事実だと感じてね」

一刀が言う

馬超「北郷！お前まで曹操の味方する気かよ！」

馬超が叫んだ。

しかし一刀は

一刀「味方をするわけじゃない。馬超、真実を受け止めるんだ」

一刀が言う

馬超「うるせえ！あたしに説教するんじゃないよ！」

ブオンツ！！　ズツシーンツ！！

馬超は銀閃を一刀めがけて降り下ろした。

春蘭「馬鹿め！？今の一撃であの男は死んだぞ！？」

愛紗「一刀殿！？」

二人は一刀が亡くなったと思っていたが

一刀「おいおい、俺は生きてるよ」

三人「えっ！？」

ジャーンッ！！

なんと一刀は馬超の一撃を木刀で受け止めていた。

一刀「こんな一撃じゃ俺は殺せないよ」

一刀は馬超を挑発すると

馬超「この野郎！」

ガンガンッ！

馬超は連続で攻撃を仕掛けるが

パシッ！ パシッ！

一刀は馬超の攻撃を全て受け流していた。

春蘭「あの男は何者だ？あんな細い体でよく何度も受け止められる

ものだな!？」

愛紗「あ…あぁ!？」

これには初めて見る春蘭だけでなく愛紗も驚いていた。

馬超「くそっ!くそっ! 何で倒れないんだよ!？」

馬超が叫ぶと

一刀「俺は馬超がわかってくれるまで何度でも受け流すさ!武器と武器が交われれば俺の気持ちをも馬超が理解してくれるだろうしね」

ドキンッ!

この一刀の言葉に馬超は何かを感じていた。

今から数年前

西涼の屋敷

幼い馬超「ぐはっ!？」

馬騰「どうした翠(馬超の真名) いつもより気合いが足りないぞ」

幼い馬超は馬騰から鍛練を受けていた。

幼い馬超「な…何でもないよ!」

馬超は強気に言うが

馬騰「ははん、さてはまたおねしょしたんだな」

馬騰が言うつと

幼い馬超「(ドキンッ!?)(お…おねしょなんてしてないよあたしをいくつだと思ってるんだよ!／＼／＼」

馬超が誤魔化そうとすると

馬騰「嘘をついてもダメだぞ翠、武器と武器が交われればお前の心が俺にはわかるからな」

幼い馬超「ち…父上／＼／＼」

馬騰「ガハハッ！濡れた下着は自分で洗えよ！」

現在

馬超は一刀の言葉が昔、馬騰が言っていた言葉と同じことを言っていたことを感じていると

一刀「馬超、わかってやれ！曹操は馬騰を殺してなんかないんだ」

そして一刀の言葉を聞いた馬超は

馬超「うっうっ…！」

涙を流していた。

馬超「ホントはあたしだって曹操は殺っていないかもって思ってたんだ。だけど父上が亡くなった原因を曹操に擦り付けるしかなかったんだよ！」

馬超が叫ぶと

ぼんっ

馬超に近付いた一刀は抱きついて背中に手を置くと

一刀「今までずっと我慢してたんだろ。俺の胸の中でおもいきり泣きな」

それを聞いた馬超は

馬超「うっ…うわーんっ！！」

一刀の胸の中で豪快に泣いた。

それを見た愛紗達は

春蘭「どうやらわかってもらえたようだな」

愛紗「そのようだ。(チクチクッ！)(何故だ？何故一刀殿と馬超を見ていると胸がちくちくするのだ?)」

愛紗は一刀に恋心を抱いていることに気付いてなかった。

そして翌日

鈴々「馬超は西涼に帰るのかなのだ？」

馬超「ああ西涼のみんなに事実を話さなきゃいけないからな。あんたら達に出会えてよかったよ」

馬超は愛紗達と別れて西涼に帰ることになった。

愛紗「今別れてもまたいずれ会うであろう」

星「その時を楽しみにしているぞ」

鈴々「さよならなのだ」

愛紗達が馬超に別れの言葉を言うと

馬超「あつ！そうだ北郷ちよつとこつちに来てくれよ」

一刀「何だ？」

馬超は一刀を呼び寄せると

馬超「昨日のことには礼を言うけどあたしが泣いたって誰にも話すなよ（ひそひそ）」

一刀「どうしようかな」

一刀が言った瞬間

ぶみっ！！

「一刀「たあーっ!?」」

馬超は銀閃の柄で一刀の足を刺した。

馬超「それじゃあまたな！」

ダダッ!

そして馬超は駆けていった。

鈴々「お兄ちゃんどうしたのだ？」

「一刀「いたた…別に何も無いよ」」

そして愛紗は一刀を見つめると

愛紗「(でえいつ!何故私は一刀殿のことを意識するのだ!!)」

星「(ほほう、愛紗もやはり乙女のようなな)」

「一刀のことで赤面していた愛紗があることを思い出した。」

愛紗「そういえば一刀殿、曹操が刺客に襲われそうになった時素早く来ましたがどうしてですか？」

愛紗が聞くと一刀は

「一刀「ああそれは目が覚めた後、星から話を聞いて先回りして愛紗

を守るために天幕の上に隠れてたんだよ。だけど愛紗が天幕に入ってきた瞬間服を脱ぎ出して裸になっていたのをそのまま見続けてさ、そしたら曹操まで裸になって二人がくつつこうとした時に隣が騒がしいんで見てみたら刺客でさ、そのまま刺客を退治に…」

ここで一刀が閉じていた目を開いてみるとそこには

愛紗「ほほう、私の着替えを覗いた上に曹操に襲われそうになっても助けずに覗きをするとはね」

ゴゴゴッ…!!

一刀の目の前には鬼の角が生えたら愛紗が偃月刀を構えていた。

一刀「いや…あの…!?ごめんなさい！」

ピューッ!

一刀は愛紗から逃げ出した。が…

愛紗「待てこのエロ男がー!!!」

ドドオーッ!!

愛紗は物凄い勢いで一刀に迫っていく。

鈴々「ずるいのだ。愛紗とお兄ちゃんだけで鬼ごっこするなんて! 鈴々もするのだ」

星「ふむ、では私も参加させてもらおうか」

ドドオーッ!!

愛紗から逃げる一刀と一刀を追う愛紗、二人を追う鈴々と星

四人の旅はまだまだ続く。

「馬騰殺害の事実」(後書き)

とりあえず第一章としての分が終わるまでは連続投稿してみます。

(新作を待っている人(いるのかな?)は少しの間お待ちください。

(次回は董卓が登場します

「トントントン？」（前書き）

ついに十話を越えたー！

西森の中では十話を越えたらようやく長期掲載ということの意味します。これからも頑張って更新しますのでよろしくお願いします。

何度も言いますがこの小説はアニメをもとに執筆していますのでアニメとは違う展開がちらほらあります。

「トントン？」

とある城

？「ゆえ〜！どこにいるの〜？」

ドタバタッ

とある城にて眼鏡をかけた緑髪の女の子がドタバタ廊下を走っていた。

？「おいおい詠えいそんなに慌ててどうしたと言うのだ？」

スッ

そこへ偶然通りかかった巨大な斧を持った影が薄そう…

？「だまれっ！」

もといプライドが高そうな女の子が賈馱（真名は詠）に聞くと

詠「華雄將軍、月ゆえを見なかった？」

華雄「董卓様か？今日は見ていないが」

月とは董卓の真名である。

詠「あの子っいたら『村の様子を見に行きます。なるべく早く帰りますので待っていてください』董仲穎』って書き残して出掛けちゃっ

たのよ！ああもう自分の目で見たいっていう志はいいけれど村近くの森には最近化け物が出るって聞いているのに心配だわ！？」

詠が一人で慌てていると

華雄「そう心配するな。董卓様だって子供では…」

華雄が心配をなくすため話しかけると

詠「うるさい！ あんたなんか何がわかるっていつの…いつしちやいられない早く搜索隊を編成しなくっちゃ！」

ダダダッ！

詠は慌てて走っていった。

詠が去った後

華雄「私に向かってあんだだと？」

と？を浮かべて呆気にとられていた。

その頃、一刀達一行は

一刀「痛いです」

ぼろくん

愛紗「ふんっ！自業自得だろうが」

前回愛紗を助けずに覗きをした罰として一刀はポロポロな体にされていた。

鈴々「星、何で愛紗はお兄ちゃんをポコポコにしたのかなのだ？」

星「さあわからんな それにしても裸を見られたくらいであればひどいと思うのだが」

前にも愛紗は一刀に裸を見られた(二話目参照)が今回はその時以上のお仕置きだった。

そして一刀達が歩いていると

？「やめてください！」

ビクンッ！？

遠くから女の子の声が聞こえてきた。

愛紗「あっちから声が聞こえる！鈴々、星いくぞ！」

鈴々「合点承知なのだ！」

星「うむっ！」

ダダッ！

声が聞こえてきた場所に急ぐ一行だが

一刀「ま…待ってくれよ！」

ボロボロな一刀は後から行くしかなかった。

声が聞こえてきた場所

？「やめてください！」

そこには白い髪のウェーブ（西森は髪型については素人です）の大
人しそうな少女が三人のチンピラに囲まれていた。

アニキ「まあそう言うんじゃねえよ」

チビ「俺達と一緒に遊ぼうぜ」

デク「だなく」

グイツ！

三人が少女の腕を無理矢理引っ張ろうとすると

バツ！

愛紗「止めぬか馬鹿者共め！」

鈴々「嫌がつている人に無理矢理はダメなのだ！」

そこへ愛紗達がたどり着いた。

アニキ「なんだテメエらは？」

アニキが聞くと

星「聞いて驚くな！この者こそ噂に聞くほど美人ではないが黒髪の山賊狩りだ」

ビシッ！

星は愛紗を指差しながら言う。

愛紗「どどういう意味だ！」

愛紗がその事に怒っていると

アニキ「フンッ！確かに美人じゃないがたかが女三人に何ができる！」

チビ「逆にお前達が俺達の相手をしてもらっぜ」

デク「だな」

スッ

チンピラ達は構える。

愛紗「貴様らめ、誰が美人でないだと もう許さん！」

ジャキンッ！

愛紗達も武器を構える。

とそこへ

ガサガサツ バツ！

「一刀「遅くなつてすまない」

ぼろくん

ボロボロになつた一刀が現れた途端

チンピラ達『ギャーッ！！化け物だぁーっ！？』

ピューッ！

あまりにも一刀の顔が怖かつたのかチンピラ達は去っていった。

「一刀「何がどうなつてるの？」

しばらくして

バシャバシャツ！

「一刀「お水ありがとうございます」

？「いいえ、私も助けてもらいましたから（顔がはっきりするとい顔してますね／＼）」

「一刀は助けた少女から水をもらい顔を洗つてようやくいつもの顔に戻った。」

鈴々「そういえばまだ名前を聞いてないけど名前は何なのだ？」

鈴々が聞くと

？「私はどう…。」

少女が名前を言い出そうとした時

？「（いけない。名前を言ったら襲われるかもしれないから偽名を使わなきゃ）」

少女は友達から言われた通り偽名を使うことにした。

トントン？「私はトントンです。」

鈴々「トントン？何だか鈴々みたいな名前なのだ。鈴々は張飛なのだ。」

愛紗「私は関羽だ。」

星「趙子龍と申す。」

一刀「俺は北郷一刀。よろしくねトントンちゃん。」

トントン？「は…はい／＼／」

一刀「（何で顔が赤いんだ？）」

星「（北郷殿は天性の女誑しのようだな）（ニヤニヤ）」

そして一行はトントンを送りに村に行くことにした。

鈴々「そういえばトントンは何で村に行くのだ？」

鈴々が聞くと

トントン？「それはですね最近村に化け物が現れると聞いて城主として…ではなく一度化け物を見てみたいと思ひまして」

愛紗・鈴々『化け物！？』

ゾクッ！？

トントンの化け物という言葉に怯える愛紗と鈴々

「刀「危ない目にあうかもしれないのに随分勇敢なんだね」

勇敢というより好奇心が強すぎるだけだと思っただが

そして一行が村にたどり着くと

愛紗「これは！？」

ズォーーンッ！

なんと村の民家の前のあちこちに巨大な岩が置かれていた。

星「何故このような岩が？」

「

鈴々「何かの儀式なのか？」

鈴々が言う

村長「これも全ては化け物の仕業なのですよ」

村の民家から村長らしき男が現れた。

村長は一行を家に招き入れると

村長「ことの始まりは数カ月前、森の方から不気味な音が聞こえま
してな、それから数日後突然民家の前に巨大な岩が置かれるようにな
ったのです。そして村の若いものが不気味な音がした方に様子を
見に行ったところ……」

トントン？「化け物が出たということですね」

村長「その通りですじゃ」

ゾクッ!?

化け物という言葉にまたも怯える愛紗と鈴々

そしてその頃、一刀はというと

一刀「この岩じゃまだな」

岩をじっと見つめて

「刀「せいっ！」

ぐぐっ！

岩を持ち上げようとしていた。

一方、村長の家

星「ところで村長殿、その化け物とはどのような姿なのですかな？

「

村長「それが見たという村のものに聞くと…」

・ 血のように真っ赤な角を持つ

・ 不気味な音をながしながら迫り来る

・ 獣の鳴き声を発声する

村長「等々で逃げたため誰も化け物の姿を見たものがないのですよ」

村長が言つと

星「村長殿よ、いい時に我々が来たものだな。実は我々は皆武に自信があつてな、その化け物を退治してやるつではないか」

星が言つと

愛紗「な…何を言うのだ星！」

鈴々「勝手なこと言わないでほしいのだ！」

星に抗議する二人

星「おやおや、黒髪の子と張飛が困っている人を見捨てるというのか？まさか二人して化け物が怖いというのか？」

愛紗・鈴々『うっ！？』

凶星であった。

愛紗「仕方がない村を助けるためだしな」

ブルブルッ

と言いながらも足が震える愛紗

鈴々「それによつちには強いお兄ちゃんがいるから化け物になんか負けないのだ！」

ダッ！

鈴々は一刀を呼びに外に出る。

愛紗「あんな優男がなんの役に立つと言うのだ」

星「やれやれ」

愛紗はまだ一刀の実力を認めていなかった。

そんなとき

鈴々「大変なのだ！？お兄ちゃんがいないのだ！？」

鈴々が慌てて家に入ってきた。

愛紗「まったく、一刀殿はいつもいつも」

ダッ！

愛紗達も外に出ていくと

トントン？「あれっ？岩がありませんけど？」

なんと！？さっきまであった巨大な岩が無くなっていた。

愛紗「どういうことだ？」

愛紗達が不思議に思っていると

村人「そこにあつた巨大な岩ならあんたらと一緒にいた男が『邪魔だから山に返してくる』と言って持ち上げていったよ。しかしすごい男だな村人数人がかりでようやく持ち上げられる岩を一人で汗水流さず持ち上げたんだから」

愛紗達「えっ！？」

これには驚く愛紗達だった。

「トントン?」(後書き)

次回、怪物が現れる。

(もう正体がわかる人もいますけどね)

「化け物退治」(前書き)

時間が空きましたので連日投稿です。

「化け物退治」

化け物が潜むという森

結局愛紗達は化け物退治を引き受けることになってしまい一刀を置いて森にやって来た。

ゲヒヒツ！（カラスの鳴き声）

愛紗・鈴々『ひっ！？』

突然聞こえてきた声に怯える二人。

星「今のはカラスだ。まったく鬼をもびびらす力を持っていながら化け物を怖がるとは情けない。少しは村娘のトントンを見習え！」

トントン？「へう〜！？」

と言われながらもトントンも怖がっていた。

愛紗「仕方がなからう！私はお化けや妖怪の類いは苦手なのだ！」

鈴々「鈴々は愛紗が怖がっているから怖がってあげてるのだ！？」

星「情けないもの達だ！一刀殿が見たら笑われてしまうぞ」

愛紗「うっ！？」

あんな奴に笑われてたまるか！と思う愛紗だった。

星「しかしトントンまで来なくてもよかったのではないか？」

星が聞くと

トントン？「私も城主…ではなく村娘として化け物の被害を食い止めたのです」

ということまでトントンもやって来たのだった。

そして一行は化け物が現れたという場所にたどり着いた。

愛紗「鈴々、怖かったら抱きついて構わんからな」

鈴々「へへ〜んだ！愛紗だって怖かったら抱きついて構わないのだ

」

ガタガタブルブルツ

と言いながらも足が震える二人。

とその時！

？「くつちまうぞー！」

どこからか声が聞こえると

愛紗「ギヤーツ！？」

鈴々「怖いのだ〜!？」

ガシガシッ

互いに抱き合う二人

星「ぷぷぷっ、今は私の声だ」

さっきの声は星が愛紗達をからかうために出した声だった。

星がその事を白状すると

ゴツチーンッ!!

星は愛紗に殴られた。

星「私なりに緊張をほぐそうと思って…」

愛紗「ほぐれるか馬鹿者めが！」

愛紗が星に説教していると

？「グルルーツ!!」

愛紗「いい加減にしろ!!二度目を通じるとでも思っているのか!

」

愛紗は突然聞こえてきた声はまたも星の仕業だと思い怒鳴ると

星「私は何もしていないが？」

」

愛紗「じゃあ鈴々か？」

くるっ

愛紗は鈴々の方を向くと

鈴々「今は鈴々じゃないのだ」

愛紗「では…」

愛紗はトントンの方に首を向ける

トントン？「私じゃありませんよ」

愛紗「となると一刀殿だな！隠れてないで出てきなさい！」

愛紗が叫ぶと

ガササツ　　バビュンツ！

茂みの中から何者かが飛び出してきた。

鈴々「お兄ちゃんじゃないのだ!？」

星「何者だろうか？」

現れたのは一刀ではなく赤髪の触角のような二本のアホ毛が立った獣の仮面をつけた女の子が現れた。

トントン？「もしかしてこの人が噂の化け物さんでしょうか？」

愛紗「確かに赤い角のようなものがあるがお主がそうなのか？」

愛紗が聞くと

女の子「…食べ物持ってきたか？」

愛紗「は？」

すると女の子は

女の子「…持ってきていないなら持ってこさせる！」

ジャキンッ！

どこから出したのか女の子は物凄い戟を取り出すと

女の子「…食べ物よこせ」

ビュンッ！

いきなり攻撃を仕掛けてきた。

愛紗「なっ!?!？」

ガキンッ！

愛紗はとっさに青龍偃月刀で攻撃を防いだ。

鈴々「愛紗！？大丈夫かなのだ！？」

鈴々が愛紗を心配すると

ジーンッ！

愛紗「（受け止めたただけだというのに何で一撃だ。悔しいが一人で勝てる相手ではなさそうだな）」

愛紗がそう考えると

愛紗「鈴々、星、手を貸してくれ！こいつはたぶん三人でかからな
いと勝てない」

愛紗が言うと

星「お主がそういうのなら余程の使い手なのだろう」

鈴々「三VS一は卑怯だけど仕方ないのだ！」

ジャキンッ

二人は武器を構えて愛紗の横に立つ。

愛紗「トントンは下がっている！」

トントン？「は…はい！」

サッ

トントンが木の後ろに隠れると

鈴々「うりゃりゃーっ！」

シュシュシュンツ！

まず始めに鈴々が攻撃を仕掛ける。

だが

カキカキンツ！

女の子はすべて受け流した。

星「ならば助太刀するぞ鈴々！」

シュンツ！

星が鈴々を助けるべく出陣する。

星「セイセイセイッ！」

シュシュシュンツ！

星は高速の突きを繰り出すが

サササッ

軽く避けられていた。

星「馬鹿な！？我が突きを簡単に避けるとは！？」

それを見た愛紗は

愛紗「ならば私もいくぞ！」

バツ！

戦いに参戦した。

愛紗「ハアーツ！」

鈴々「うりゃりゃーっ！」

星「セイセイセイッ！」

三人の同時攻撃。普通ならばこれでたいていはやられるはずだが

ガガガガンツ！

女の子はすべての攻撃を受け流していた。

女の子「…お前達、弱い」

ぐっ！！

女の子が戟を握る手に力を込めると

ブオンツ！！

戟を振るい物凄い衝撃を起こした。その結果

愛紗「ぐわっ!?!」

鈴々「にやにやーっ!?!」

星「ぐほっ!?!」

バタタツ!

三人は衝撃で吹き飛ばされてしまった。

トントントン? 「皆さん!?!」

これにはトントントンも驚く

愛紗「ぐっ…」

愛紗は何とか立とうとするが体が痛くて立ち上がれない。

そしてそこへ

ザッ

触角の女の子が愛紗に迫る。

女の子「…食べ物くれないなら死ね」

ジャキンッ!

女の子の持つ戟が愛紗に迫る。

愛紗「（私はここで死ぬのか？せめて死ぬ前に一刀殿に会いたかった…）」

愛紗が死を覚悟したその時

ガキンッ！

一刀「待たせてごめんね愛紗」

ドンッ！

一刀が駆けつけて女の子の攻撃から愛紗を守った。

愛紗「一刀殿!？」

愛紗が驚いていると

女の子「（ぴくんっ）」

サッ

女の子の何かに反応して一刀から距離をとった。

スッ

そして一刀を指差すと

女の子「…お前強い。久々に本気が出せる」

愛紗達「!?!」

愛紗達は驚いた。何故ならばさっきの戦いですら女の子に本気を出させていなかったのだから

女の子「…お前、名前は？」

スッ

女の子が戟を構え直して聞くと

一刀「北郷一刀だ。君もなかなかの強さだね」

女の子「…恋でいい」

スッ

二人は互いに構え、そして…

シュバンッ!

二人は互いに高速でぶつかりあった。

星「なんという早さだ!?!早さならば我よりも早いぞ!?!」

素早さに自信のある星が驚くくらい二人は早かった。

ガキガキンッ!!

互いにぶつけ合う一刀と恋

鈴々「お兄ちゃんってあんなに強かったのか!？」

愛紗「まさか、ただ早いただけだろう」

愛紗はまだ一刀の実力を認めようとしないう。それもそのはず、普段からスケベでエッチな男を簡単に認めるわけには愛紗なりにいかなかったのだ。

そして互いに攻防を繰り返している二人だが

ピタッ

突如、恋の動きが止まった。

恋「…一刀、本気を出してない。まだまだ実力を隠してるからつまらない」

愛紗達「!？」

またも驚く愛紗達

一刀の実力は本気の恋以上のものだったのだ。

一刀「手を抜いているわけじゃないよ。ただ本気が出せない理由が…」

一刀が言おうとした時

グルルーツ！！

どこからか声が聞こえてきた。

愛紗「この声は化け物の叫び声！？」

鈴々「他にも化け物がいたのかなのだ！？」

愛紗達が驚いていると

グルルーツ！！

音は恋のお腹から聞こえてきていた。

すると一刀は

一刀「お腹空いてるなら食べなよ」

スッ

懐から握り飯を取り出して恋に差し出した。

恋「…いいの？」

一刀「もちろんさ」

一刀から了承を得ると恋は

タタッ！

茂みの方に走り

恋「…これ食べる」

ぽとんっ

茂みに握り飯を置いた。すると茂みの中から

わんわんっ！

たくさん犬が現れた。

愛紗「もしかしてこれが言っていた獣の鳴き声を発声するなのか？

」

一刀「恋、この子達は？」

一刀が聞くと

恋「…みんな恋の家族。この子達のために村から食料求めたけど誰もくれなかった」

と言った。

鈴々「おかしいのだ。誰もそんなこと言ってなかったのだ」

恋「（ふるふるっ）…ちゃんと岩に書いておいた」

星「岩だと!？」

」

「刀」そういえば岩を持っていった時、『ごはんちょうだい』と小さく書かれていたな」

この世界は紙は身分の高いものしか使えない重要な物のためお金の無い恋は岩に書いて送るしかなかったのだった。

「刀」だったらちゃんと『ごはんちょうだい』って村人に言わなきゃダメだよ」

「刀が言うと

恋「…わかった。ちゃんと言う」

恋は納得したようだ。

鈴々「それにしてもこの犬達はどうするのだ？」

愛紗「ふむ、この森の中でいつまでも暮らすというのは無理があるだろうしな」

愛紗がその事を言うと

トントン？「だったら私の家に置いてあげますよ。もちろんあなたも一緒に」

トントンが恋に向かって言うと

「刀」トントンってそんなにでかい家にすんでるの？」

トントン？「ええ、だって私は…」

トントンが最後まで言おうとするよ

詠「ゆえ〜!!」

パカパカッ!

詠が馬に乗りながら現れた。

トントン? 「詠ちゃん!？」

キキィーッ!

馬はトントンの前で止まると

バサッ

詠「月、^{ゆえ}心配したんだからね無茶しないでよ」

詠は馬から降りてトントンに話しかけた。

愛紗「何をいつてるのだ? この者の名はトントンのはずだが」

愛紗が突っ込むと

詠「トントン? ふざけないでよ! このお方をどなとこに居る…」

一刀「天下の副将軍・水戸…」

詠「うっさい!」

詠の名前が賈馱なだけにナイスなボケである。

詠「この人はこの先の城主董卓仲穎様よ」

一刀「董卓!？」

愛紗達「城主!？」

ドォーンッ!

一刀は驚いた。董卓といえば三国志の中でも有名な悪人であり最後は部下の呂布に殺されるのだ。

月「皆さんすみません!騙すつもりはなかったんですがなかなか言い出せなくてつい偽名を」

トントン改め月が謝ると

月「そうだ詠ちゃん。一人雇ってほしい人がいるんだけど」

詠「まったく、まあ月の頼みなら聞いてあげるわよ。誰なの?」

スッ

月は恋を指差す

月「それと…」

スッ

更に月は恋の足元にいた犬達を指さした。

詠「犬っ！？犬はダメよ！」

詠は犬を飼うことを拒否しようとするが

月「だゝめ 詠ちゃんさつき私の頼みなら聞いてあげるわよって
言っただもん」

詠「月」

以外と腹黒い月であった。

しばらくして

恋は村人に謝った後、犬達と一緒に月に引き取られ、月は城に帰っていった。

そして一刀達は

鈴々「お兄ちゃん何で強いのに黙っていたのだ？」

一刀「そ…それは、昨日まで弱かったけど今日になったらいきなり強くなったんだよ！」

あきらかに嘘であるが

鈴々「おお〜！お兄ちゃんはすごいのだ！」

鈴々を誤魔化すにはちょうどよかったです。

星「愛紗、お主も気になるのか一刀殿の力が？」

愛紗「私は別に」

星「まあ私はあれこれ追究する方ではないので別に構わんがいずれわかるだろうしな」

愛紗「うむっ」

一刀達の旅はまだまだ続く。

「化け物退治」(後書き)

次回は軍師・諸葛亮が登場します。

「諸葛亮孔明登場」(前書き)

早いものでこの小説の話もアニメでいつなら無印の6話を迎えるようになりました。

「諸葛亮孔明登場」

あてもなく旅を続ける一刀達は

モワーツ

深い霧がかかる林の中をさ迷っていた。

愛紗「こうなったのも全て鈴々が悪いのだぞ！」

愛紗が鈴々を叱ると

鈴々「鈴々は悪くないのだ。悪いのは蛇矛なのだ！」

自分の武器のせいにする鈴々

こうなった原因は数時間前に遡る（さかのぼる）。

数時間前

一刀「道が分かれてるな」

一刀達は二本の分かれ道にたどり着いた。

星「さてどちらに進もうか？」

みんながどっちの道に行こうか迷っていると

鈴々「こうなったら鈴々の占いで決めるのだ！」

「刀「鈴々に占いができるのか？」

鈴々「お兄ちゃんあまり鈴々をバカにしないでほしいのだ！それでは占い開始なのだ！」

そして鈴々は

ドンッ！

道の真ん中に蛇矛を置くと

バターンッ！

蛇矛が倒れ

鈴々「鈴々の占いだところちなのだ」

ビシッ！

鈴々は蛇矛が倒れた方向を指さした。

愛紗「あてになるのか？」

「刀「まあ今は鈴々の占いを信じるしかないな」

そして信じた結果

愛紗「こんな深い霧がかかる林に出会ったというわけだ！」

鈴々「愛紗だつて最終的に信じたのだ！」

二人は口喧嘩を始めた。

一刀「落ち着きなつて二人とも、星も何か言つてやつてよ」

くるっ

一刀は星のいる後ろを見ると

一刀「あれっ？」

鈴々「どうしたのだお兄ちゃん？」

一刀の変化に気付いた鈴々が聞くと

一刀「星がない!？」

ドォーンッ

何とさつきまで一刀の後ろにいたはずの星が姿を消したのだ。

一刀「この霧のせいではぐれたのかもな」

愛紗「まったく!鈴々の占いを信じたせいで大変な目に…」

愛紗が最後まで言おうとすると

コテンッ!

愛紗「うわっ!？」

バタンッ!

愛紗は石につまづいて転んでしまった。

一刀「大丈夫か愛紗」

鈴々「いつまでも鈴々のせいにするからバチがあたったのだ」

鈴々が愛紗をからかうと

愛紗「私は別になんとも…」

すくっ

愛紗が立ち上がるうとしたその時

ズキンッ!

愛紗「くっ!？」

愛紗は足をおさえた。

一刀「大丈夫か!？見せてみるよ」

スッ

一刀は愛紗のソックスらしきものを脱がすと

バァンッ！

「刀「ひどい腫れじゃないか！？これじゃあ歩くことすら難しいぞ」

一刀が言うと

愛紗「心配するなこんな腫れくらいで…」

スッ

愛紗は無理に立ち上がろうとするが

ズキンッ！

愛紗「くっ！？」

足に痛みが走ってすぐにしゃがりこむ

それを見た一刀は

「一刀「仕方ないな。ほらよ愛紗」

スッ

一刀がおんぶの体勢をとると

愛紗「何の真似だ？」

聞いてくる愛紗に対し

一刀「何の真似って？足が痛いならおんぶするしかないだろ」

一刀が言うと

カーッ！！

愛紗の顔が一瞬で沸騰したヤカンのように赤くなり

愛紗「バ…バカなことを言うな！どうせ一刀殿のことだから私と密着していい気持ちになりたいだけだろう！／＼／＼」

愛紗が言うと

一刀「俺がこんなときにそんなこと思うわけないだろ！」

ホントは少し思っていた一刀だった。

一刀「足が痛くて歩けないのならおんぶしかないだろう！」

愛紗「うっ！？」

数分後

愛紗「もし下心があると感じたら殴るから覚悟しておけよ！／＼／

」

一刀「はいはい」

鈴々「愛紗だけずるいのだ〜」

結局愛紗が折れて一刀に背負われることになった。

そして三人が歩いていると

鈴々「お兄ちゃん、霧の向こうにおうちが見えるのだ」

一刀「助かった。とりあえずそこで休ましてもらおう」

そして三人は霧の向こうにあった家にたどり着くと

コンコンッ！

一刀「すみません旅のものですが一晩泊めてください」

一刀が扉にノックすると

鈴々「お兄ちゃん何で扉を叩くのだ？」

一刀「そうかノックを知らないのか。いきなり入ったら相手が驚くからだよ」

鈴々「なるほど〜」

鈴々が新しい発見をしたとき

ガチャリッ

家の扉が開き

？「どなたでしょうか？」

キラーンッ

中から美人の女性が出てきた。

「刀「すみません連れの方が足を腫らしてしまいましたー晩泊めてくれませんか？」

背中に愛紗がいなければすぐにでも飛びかかっていた一刃だがここはぐつとこらえて用件を言つと

？「まあそれは大変ですね！？どうぞお入りください」

スッ

女性は一刃達を家に招き入れた。

？「朱里、ちよつと来てくださいな」

女性が名前を呼ぶと

とたたたーっ

？「何か用ですか水鏡先生？」

帽子を被った金髪ショートの子がやって来た。

水鏡「申し遅れました。私の名は水鏡。この子は諸葛亮といいます。
朱里、お客さんを案内しなさい」

水鏡先生は諸葛亮（真名は朱里）に言う

朱里「わかりました皆さんこちらにどうぞ」

朱里は一刀達を家の中に案内する。

そして愛紗をベッドに寝かせると

朱里「改めてご紹介させていただきます。私は諸葛亮孔明と申します」

鈴々「鈴々は張飛なのだ。よろしくなのだ」

愛紗「関羽だ。助けていただき感謝する」

一刀「俺は北郷一刀。よろしくね孔明ちゃん」

一刀が言う

朱里「はわわ〜！こちらこそはじめましてでしゅっ！」

噛みまくりで言う朱里であった。

さて、それから数日が過ぎ

一刀「よっ！」

パカッ！

水鏡「すみませんねえ、薪割りしてもらっちゃって」

一刀「なあにお世話になってるんだからこれくらいしますよ」

あんなことや

朱里「関羽さん、汗をふきますので服を脱いでください」

愛紗「うむっ」

スッ

愛紗は服を脱ごうとするが

じーっ

視線を感じてやめる。そしてその視線の先には

一刀「(じーっ)」

一刀が愛紗を見つめていた。

そして

ドガッ！！ ㊦

愛紗「一刀殿は外に出んか！」

「刀」はい…」

朱里「はわわ!？」

トボトボ

愛紗に殴られて「刀」は渋谷部屋を出ていくのだった。

そんなこともあったが

ただ一人不機嫌な人がいた。

鈴々「ブーツ!愛紗を孔明に取られて悔しいのだ!この辺には獲物がいないから暇なのだ」

鈴々だけが膨れっ面をするのだった。

「孔明、旅に加わる」

一刀達が水鏡先生の元に訪れてから三日目

朱里「なかなか足の腫れがひきませんねどうしましょっ？」

朱里が悩んでいると

水鏡「そうだわ、確か腫れに効く薬草がこの辺りに生えていたはずですけど」

水鏡先生がひらめくと

鈴々「だったら鈴々が取りに行くのだ！」

バツ！

鈴々は手をあげるが

一刀「鈴々、薬草がどんな姿をしているのか分かってるのか？」

一刀が鈴々に質問すると

鈴々「わからないのだ」

スッ

鈴々はあげていた手を下げていった。

朱里「だったら私が行ってきますよ」

朱里が言うと

水鏡「ダメです。あの薬草が生えている場所は危険ですし、たどり着くまでも大変ですからね。あとで私が取りに行きますよ」

水鏡先生が言うと

朱里「それじゃあダメですよ。水鏡先生はこれから近くの村に看護しに行く予定じゃないですかその後で薬草を取りに行ったら夜になつてしまいますよ。今からいけば夕方頃には帰ってこれますし私が行ってきます」

ダダッ！

そして朱里は走り出していった。

水鏡「ああ朱里！？もうっ言い出したら聞かない子なんですから」

水鏡先生が朱里を心配すると

「一刀」鈴々、こっそり孔明の後をついていつてくれないか？」

「一刀が鈴々に言うと

鈴々「何故なのだ鈴々は絶対嫌なのだ！」

断る鈴々だが

「一刀、鈴々だつて愛紗の役に立ちたいだろう。薬草を取ってくれば愛紗だつて喜んでくれるしさ。」

「一刀が言うと鈴々は」

鈴々「仕方ないのだ！お兄ちゃんがそこまで言つたら鈴々がついていってあげるのだ！」

実は鈴々は愛紗が休んでいる間何もできなかったことに不満を抱いていたのだ。

愛紗「（一刀殿は鈴々の扱い方がわかってきたようだな）」

「一刀のその点だけは感心する愛紗だつた。」

そして鈴々は朱里の後をこっそりついていった。

外

がさがさっ

朱里「ぷはっ！ようやく草むらを抜け出せましたね。」

体が小さな朱里にとって草むらは困難であつた。

朱里「でもあと少しで薬草のあるところですから頑張らないと！」

タタッ！

朱里が行つた数分後

ガサツ！

鈴々「ぷはっ！苦しかったのだ」

朱里の後をついてきた鈴々が現れた。

鈴々「孔明のやつこんな道を通るなんて意外とやるかもしれないのだ」

タタツ！

そして鈴々は朱里の後を追いかける。

すると

ポロ〜ンッ

今にも崩れそうな吊り橋の上を

朱里「はわわ！？下を見なければ怖くないでしゅ」

ブルブルッ

朱里が震えながら歩いていた。

実は朱里は高所恐怖症なのだ。

鈴々「あいつももしかして高いところが苦手なのかなのだ？」

鈴々がその事に気づいていたその時!?

ブチチツ… ブチンツ!

吊り橋のロープが切れてしまい

朱里「はわわ〜!?!」

ヒューツ!

朱里は下にある川の方に落ちてしまう

だが朱里が落ちようとした時

鈴々「うりゃーっ!」

ピョンツ! ガシツ!

隠れていた鈴々が飛び出して朱里の腕をつかむと

鈴々「止まるのだ〜!」

ぐっ!

ギューイーンツ!!

鈴々は蛇矛を岩に突き刺して

ピタツ

何とか川までの落下を防いだ。

鈴々「間に合ってよかったのだ」

鈴々が言うと

朱里「はわっ！？張飛ちゃんどうしてここに！？」

鈴々「お兄ちゃんが孔明が心配だからこっそり手助けするようにと
言っていたのだ」

鈴々が正直に言うと

朱里「はわっ、会って数日しか経っていない人に心配される私って

」

がっくーん

落ち込む朱里であった。

鈴々「それより早く上るのだ」

鈴々は落ち込む朱里を気にせずを上ろうとするが

鈴々「あれっ？」

朱里「どうしたんですか？」

朱里が聞くと

鈴々「どうやってのぼったらいいのだ？」

現在の鈴々の状況は片手で朱里の腕をつかみ、もう片方で蛇矛を掴んでいるため手が使えないのであった。

更に残念なことに

鈴々「腕がしびれてきたのだ」

蛇矛を掴んでいる鈴々の手がしびれてきた。

朱里「はわわ〜!? 張飛ちゃんもう私に構わず手を離してください
そうすれば上れますから」

鈴々「嫌なのだ! この手は絶対に離さないのだ!」

そして

シュルシュルツ

蛇矛を掴んでいた鈴々の手が離れていき

パツ!

ついに鈴々は蛇矛を離してしまった。

鈴々「うわーっ!？」

朱里「はわわ〜!？」

ヒューッ！！

仲良く落ちていく二人

だがその時！？

ガシッ！

鈴々の手が何かに捕まれた。

鈴々「何が起きたのだ！？」

落ちたはずなのに落ちないことに疑問を感じた鈴々が手の先を見てみると

「一刀「今引き上げてやるからな！」」

バンッ！

そこには一刀がいた。

ずるずるっ

そして一刀は鈴々と朱里を引き上げると

鈴々「何でお兄ちゃんがここにいるのだ？」

鈴々の質問に一刀は

「一刀、二人が心配になったから様子を見に来たんだよ」
と言つと

朱里「はあ、またも心配されちゃうなんて私ってそんなにドジ何
でしょうか？」

またも朱里が落ち込み始めた。

そんな朱里に一刀は

「一刀、俺が心配したのはかわいい鈴々と孔明が怪我してないかと思
つたからだよ別に孔明がドジだから心配したわけじゃないさ」

ニコッ

一刀が朱里にスマイルすると

ボンッ！

朱里「はわわ／＼／＼」

朱里は顔を一瞬で赤くした。恐るべし一刀の女たらしのスキルであ
る。

しかし当の本人である一刀は

「一刀、（何で顔を赤くしてるんだ？）」

この鈍感野郎！と言いたくなるくらい朱里の変化に気づいてなかつ

た。

しばらくして

朱里「それにしてもどうしましょう。関羽さんを治す薬草は橋の向こうにあるのですが橋は壊れちゃいましたし別の橋もありません」

朱里が悩んでいると

一刀「向こう岸までだいたい十メートルってところか」

一刀は向こう岸までの距離を計測すると

ガシッ！ ガシッ！

鈴々「にやっ!?!」

朱里「はわっ!?!」

いきなり鈴々と朱里を脇にかかえて

一刀「孔明、怖いかもしれないから目を閉じときな」

朱里「えっ?」

朱里は何が起きるかわからなかったが

タタタッ!

一刀は二人を抱えたまま少し後ろに下がると

「刀、いくぜーっ！」

ドダダーッ！！

全速力で走り出して

ぴょーんっ！！

向こう岸までジャンプしていった。

鈴々「うおーっ！」

朱里「はわっっ！？」

ドンッ！

そして見事にたどり着いて着地すると

「刀、やっぱり飛べたな」

スッ！

「刀は朱里の方を見ると

朱里「（ブクブクッ）」

そこには泡を吹いて気絶した朱里がいた。

一刀「大丈夫か孔明!?」

鈴々「お兄ちゃんもう一回お願いなのだ!」

更にしばらくして

気絶から立ち直った朱里は何とか薬草を入手して帰りも一刀に抱えられていくのであった。(今度は気絶するまでには至らない)

そして帰り道

一刀「フンフンッ!」

ザザッ!

一刀は木刀を振るいながら草むらを避けていた。

鈴々「これで歩くのが楽になったのだ」

朱里「・・・」

そして帰り道、朱里は一人で考え事をして黙っていた。

その後、家についた三人は朱里が取ってきた薬草で薬を作り、無事愛紗に届けるのであった。

その日の夜

朱里の部屋

朱里「どうしたんだろう私？一刀さんのニコツとした顔を見たら赤くなるだなんてどこがおかしいのかな？」

小さい頃から水鏡先生に預けられた朱里は男との恋愛を経験していなかった。

朱里「これってもしかして！？／／／」

だがそこは女の子。徐々に恋愛感情が出てきたようだ。

そして愛紗の腫れもひき一刀達が旅立つ日

愛紗「どうもお世話になりました」

一刀「感謝します」

鈴々「ありがとうなのだ」

水鏡「いえいえこちらこそ薪割りやら雨漏りした屋根の修理をしてもらって嬉しい限りですよ」

そして一刀達が旅立とうとした時！

朱里「はわわ！待ってくださいーい！」

ダダッ！

荷物を用意した朱里が一刀達のところに駆け出してきた。

朱里「皆さん私を旅につれていってくれませんか？」

朱里が言うと

愛紗「お主には水鏡殿がいるだろう」

と愛紗が言い返すと

朱里「水鏡先生には昨日お話しして了解を得ました。どうか私を連れていってください」

ペコリっ

朱里は頭を下げると

鈴々「鈴々は別に構わないのだ」

一刀「いいんじゃないの来るものは拒まずって感じですか」

二人に言われた愛紗は

愛紗「いいだろう来ても構わないぞ」

朱里を旅につれていくことを了承した。

朱里「皆さんよろしくです」

こうして新たに朱里が一刀達の旅に加わった。

「喧嘩別れ その2」

一 刀達の旅に新しく孔明（真名は朱里）が加わり旅を続ける一行は

一 刀「道が分かっているな」

二 本の分かれ道に差し掛かった。

鈴々「こういう時は鈴々の占いで決めるのだ！」

パッ！

そう言っつて鈴々は手に持っていた蛇矛を放すと

カランッ

蛇矛は右の方向に倒れた。

鈴々「こっちなのだ」

そして鈴々が右の方向に行こうとすると

愛紗「待て鈴々！左の道を行くぞ」

スッ

愛紗が鈴々とは違う道を指差すと

鈴々「何でなのだ？鈴々の占いでは…」

愛紗「お前の占いはあてにならん前の失敗を忘れたのか！」

前にも鈴々がこの占いをしてその道を行った結果、危うく迷子になりかけたのだった。

鈴々「今度は大丈夫なのだ！」

愛紗「お前的大丈夫はあてにならん！」

愛紗と鈴々が口喧嘩をしていると

朱里「はわわ〜！？一刀さん止めなくていいのでしゅか？」

初めてこの光景を見た朱里は驚くが

一刀「孔明、よく覚えた方がいいよ。あの二人に口出しすると怒りの矛先がこっちに向けられるからね」

朱里「そうなんですか！？」

二人の口喧嘩を見てきた一刀は落ち着いていた。

だが二人の口喧嘩はどんどんエスカレートしていき

鈴々「だったら愛紗達は左の道を行けばいいのだ！鈴々は絶対に右の道に行くのだ！」

愛紗「好きにしろ！我々は左の道に行くからな！」

ダッ！

二人はそれぞれ別の道をいくことになった。

朱里「はわわ〜！？どうすればいいんでしゅか！？」

一刀「まさかこうなるとはな。とりあえず鈴々を一人にするわけにはいかないから孔明は愛紗の方を頼む」

朱里「わかりました！」

ダッ！

そして一刀は鈴々に、朱里は愛紗についていくことになった。

鈴々サイド

鈴々「愛紗はいつも鈴々に対して説教ばかりなのだ！ご飯食べてる時も『静かに食べる！』とか『箸の握り方がおかしい』とか説教ばかりなのだ！」

鈴々が愛紗に対して愚痴を言っていると

一刀「愛紗は鈴々が大好きだから説教するんだよ。好きでもない人を説教しないだろ」

いつもの鈴々なら『ああ、なるほど』と納得するのだが

鈴々「お兄ちゃんはどうちの味方なのだ！」

今日の鈴々は一筋縄ではいかなかった。

一刀がどうしようか悩んでいると

一刀「んっ！鈴々あれを見てみるよ」

一刀は立て札を見つけた。

鈴々「なになに、『参加費無料肉マン大食い大会開催！一番多く食べた人には賞金あげます。(ただし途中で諦めた人は食べた分の肉マン代金を支払ってもらいます)』なのか」

一刀「大食らいの鈴々なら優勝できるんじゃないか？」

一刀が言うと

鈴々「ようしっ！愛紗への怒りを食欲に込めてやるのだ！」

ゴオーッ！！

鈴々が燃えていると

？「あれっ？一刀と張飛じゃないか」

どこかで聞いたような声が聞こえてきた。

そして一刀と鈴々が声が聞こえてきた方を向いてみると

一刀「馬超！？」

鈴々「馬超なのだ!？」

そこにいたのは以前出会った馬超（真名は翠）であった。

一刀「久しぶりだな。確か故郷に帰ったんじゃないのか？」

翠「確かに帰って故郷のみんなにすべて話してきたよだけど旅をしたいから一人旅しているのさ」

翠は以前父である馬騰を殺した曹操を狙って旅をしていたが馬騰殺害の事実を知って故郷である西涼のみんなに話すべく帰っていったのだ。

翠「それより関羽と趙雲はどうしたんだ？」

翠が聞いてくると

鈴々「ふふーんだ!愛紗なんて知らないのだ!」

ぷくーっ!

鈴々は膨れっ面をした。

翠「なあ、いったいどうしたんだ？」

一刀「話せば長くなるけど」

一刀は翠に事情を話すと

翠「なるほどな、それより張飛は大食い大会に出場するようだな」

鈴々「もちろんなのだ！絶対優勝してやるのだ！」

鈴々が意気込むと

翠「残念だけど優勝は無理だね。何故ならあたしも大会に出場するから優勝はあたしがもらったね」

ピクンッ！

この言葉に鈴々が反応した。

鈴々「ふふーんだ！馬超には絶対負けないもんねなのだ」

ピクンッ！

そしてこの言葉に翠が反応し

翠「だったら勝負しようじゃないか！絶対張飛には負けられないからな！」

鈴々「のぞむところなのだ！」

バチバチッ！

今、二人は互いに激しい火花を飛ばしていた。

一刀「（この二人って似た者同士なのかな？）」

と一刀は感じるのだった。

そしてついに

わあーっ！わあーっ！

陳琳「さあ始まりました肉マン大食い大会！果たして優勝するのは誰なのでしょう？実況はわたくし陳琳がお伝えします！」

肉マン大食い大会が開始された。

翠「張飛には負けないぜ！」

鈴々「馬超には絶対負けたくないのだ！」

バチバチッ！

まだ火花を飛ばす二人

一刀「二人とも頑張れよ」

そして一刀は客席から二人を応援するのだった。

その頃、分かれ道の逆を行った愛紗と朱里は

愛紗「これは…！？」

朱里「はわわ！？」

ドォーンッ！

二人が行った先には崖が待ち構えていた。

朱里「どうやら鈴々ちゃんの方が正しかったようですね」

ちやっかりと鈴々の真名をもらっていた朱里。

愛紗「どうやらそのようだな…」

これには愛紗も黙るしかなかった。

「大食い少女とさらし女」

陳琳「さあーっ！それでは肉マン大食い大会開始です！」

ゴォーンッ！！

会場に一齐に銅鑼の音が響き渡ると

バクバクッ！

選手達は一齐に肉マンに食らいついた。

しかしこの肉マンは普通より二倍のボリュームがあり

ばたりっ　　ばたりっ

次々と選手達が倒れるなか

翠「がつがつ！」

鈴々「もぐもぐっ！」

翠と鈴々はまるで電気掃除機のごとく肉マンを食べ続けていた。

パパパッ！

あっという間に二人の蒸籠（せいろ・肉マンを入れる籠のようなもの）から肉マンが消えていく！

翠「がつがつ！張飛には負けないぞ〜！」

鈴々「もぐもぐっ！馬超には負けたくないのだ！」

どうやら二人も限界らしい、勝者はこの二人にしばらくかと思いきや

ゴォーンッ！

陳琳「それまで！勝者決定です！」

全員『！？』

これに全員が驚いた。何故なら鈴々と翠の蒸籠にはまだ肉マンが残っているのにいきなり終了になったのだから

だが陳琳は

陳琳「勝者は許緒選手です！」

ドォーンッ！

翠と鈴々の隣の席にいた桃髪の女の子の勝利を宣言した。

許緒「ふーっ！お腹一杯だよ」

ドタバタンッ！

みんな翠と鈴々の迫力に夢中でその隣にいた女の子を見ていなかったのである。

一刀達を含めて陳琳を除く全員がずつこけた。

その後、

鈴々「負けて悔しいのだ〜！」

翠「あともう少しだったのによ〜！」

一刀「ハハハ：財布が軽いや」

肉マンを食べられなかった分の代金二人分を支払ってしまい一刀の財布は風が吹けば飛ぶくらい軽くなっていた。（翠がお金を持っていなかったため一刀が支払うことになった）

そんな三人のもとに

許緒「ちよつとすみません」

肉マン大食い大会で優勝した許緒（真名は季衣）が近寄ってきた。

季衣「お金を支払った人は誰ですか？」

季衣が聞いてくると

一刀「俺だけど何か用？」

一刀が答えると

季衣「これ少ないけどもらってください」

スッ

季衣は一刀にお金の入った小袋を渡した。

「一刀「もらっていいの!？」」

季衣「うん、ぼくはお腹が空いたから出場しただけだからお金なんていらないんだ」

なんて天使のような女の子だろう

鈴々「お前意外といい奴なのだな」

季衣「意外とは余計だけどぼくはお金なら他で稼いでるしね」

「一刀「他？」」

こんな小さな子を雇ってくれるところがあるのだろうか?と一刀が思っている

季衣「何か少しムカつくことが聞こえたような気がするけど…」

季衣がそう感じていると

男の子「許緒さん!」

ダダッ!

季衣のもとに男の子が駆け寄ってきた。

季衣「君は昨日泊めてもらった家の子供、どうしたの？」

季衣が聞くと

男の子「大変だよ！うちに昨日許緒さんが追い返した借金取りが現れたんだ！」

男の子が言つと

季衣「あいつらまだ懲りてなかったのか！ぼくがぶつとばしてやる！」

ダダッ！

季衣は男の子が来た方向を駆け出していった。

「一刀」どうやら厄介ごとらしいし、お金のお礼として行ってくるわ」

鈴々「お兄ちゃんが行くなら鈴々も行くのだ！」

翠「あたしを置いていくなよ！」

ダダッ！

そして一刀達も季衣のあとを追っていった。

男の子の家

借金取り「おいおい借りたお金は返すのが礼儀だろ」

借金取りが男の子のお母さんに詰め寄ると

お母さん「そんなこと言っただってもう元金は支払ったじゃないですか」

妹「そうだよ！返したんだから帰ってよ！」

男の子のお母さんと妹が反発すると

借金取り「黙りやがれ！借りたら利子がつくもんなんだよ！」

お母さん「だからといって借りたのは1000元なのに利子がついて1000元だなんて横暴ですよ！」

お母さんが反発すると

借金取り「黙りやがれ！さっさと払えばいいんだよ」

ジャキンッ！

借金取りは剣を抜いた。

とそこへ

季衣「おばさん！」

季衣が駆けつけてきた。

借金取り「お前は昨日のチビツ子！？昨日はよくも邪魔してくれたな」

季衣「なんだよ！まだぶつとばされたりないのかい？」

スッ

季衣が構えると

借金取り「へんっ！今回はお前を倒すために用心棒を雇ったんだよ！先生出番ですぜ！」

借金取りが叫ぶと

？「ようやくウチの出番のようやなあ」

ザッ

そこに偃月刀を持って胸にさらしを巻いた関西弁を話す女が現れた。

借金取り「張遼先生、あいつが例のガキです」

張遼（真名は霞しほ）が借金取りから聞くと

霞「なんやアンタ大人のくせにあんなガキにやられたんかいな！？まあ金もらった以上アンタには恨みはないが相手してもらおうで！」

シュンッ！

霞は季衣に速攻を仕掛けるべく早足で移動する。

季衣「ガキガキってバカにしないでよね！」

スッ

季衣は武器をとろうとするが

スカッ

季衣「しまった！？朝出るときに武器を家に置いてきちちゃったよ！？」

季衣はうっかり武器を家に置いてきてしまった。

霞「なんや武器出さへんのやったらいてまうでー！」

シュンッ！

霞の速攻が季衣に迫る。

季衣「ちいっ！」

スッ

季衣は素手で相手をしようとしたその時！？

ガキンッ！

季衣「えっ！？」

驚く季衣が目を開けてみると

ぐぐぐつ…

季衣の目の前には一刀がいて霞の攻撃を防いでいた。

一刀「許緒ちゃんだったね、お金のお礼として助太刀するよ！」

ブオンツ！！

霞「うおっ！？」

一刀は霞を吹き飛ばすと

鈴々「お兄ちゃん無事なのかなのだ！？」

翠「いきなり駆け出すなよ！？」

鈴々と翠が追い付いてきた。

霞「ほう、さっきのガキよりそつちのあんちゃんの方が手応えありそつやんか　ウチの相手してくれへんか？」

借金取り「ちよつと先生！？それでは約束が…」

借金取りが言おうとすると

霞「だまらつしゃい！ウチが相手決めて悪いつちゆうんかい！」

借金取り「いえ別に…」

霞の迫力におされてたじろぐ借金取りだった。

霞「そんじゃあ了解も得たようやし相手してもらおうか！」

一刀「女を相手にするのは気が引けるけど、どうやら相手しなきゃ許してもらえそうにないね」

スッ

一刀と霞は構えると

シュンツ！

二人は一斉に駆け出した。

カキカキンツ！

そして互いに高速の連撃を繰り出す。

鈴々「お兄ちゃん早いのだ！？」

翠「北郷ってあんなに早かったのかよ！？」

季衣「兄ちゃんすごいね！？」

三人が驚いているうちに

ガキンツ！

霞「なっ！？」

霞の飛龍偃月刀が一刀の木刀に弾かれた。

ジャキンッ！

一刀は木刀を霞の喉元のどもとに向ける

一刀「まだやる気？」

一刀が言うと

霞「ウチの負けや」

霞が降参した。

これで終わったと思いきや

借金取り「テメエら動くんじゃねえぞ！」

借金取りが突然叫び出した。しかも借金取りの手には

妹「はなせー！」

いつの間にか男の子の妹が捕まっていた。

一刀「しまった！？」

霞「人質は卑怯やで！ウチが負けたんやから放しや！」

借金取り「じやかましい！何が用心棒だ。そんな優男に負けやがって！一歩でも動いたらこのガキ殺すぞ！」

ジャキンッ！

借金取りは妹に剣を突き立てる。

人質をとられて身動きできない一刀達

だがその時！？

ヒュンッ！ ザクッ！

借金取り「ぐわっ！？」

借金取りの手に蝶の姿をした簪かんざしが突き刺さった。

そして借金取りは一瞬妹から手を放した。

そしてその隙に

シュンッ！

何者かが妹を救出した。

借金取り「誰だ！？」

借金取りが叫ぶと

？「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ！助けてと叫ぶ少女の声、美々

しき蝶が悪を討つ！我こそは正義の使者 華蝶仮面！

バーンッ！

突然謎の人物が現れたが明らかにその正体は蝶の仮面を着けただけの星だった。

翠「なああれって趙雲じゃないか？」

一刀「あれでバレてないって感じてるのかな？」

一刀と翠にはバレていたが

鈴々「かつこいいのだ」

鈴々にはバレていなかった。

華蝶仮面「さあ一刀ど…、青年よ今のうちだ！」

もはや言いかけている。

一刀「確かに突っ込むひまはなし！」

シュバッ！

一刀は高速で借金取りに迫ると

ズバッ！

借金取りに一撃を食らわした。

借金取り「ぐはっ!？」

ばたりっ

借金取りが倒れると

ザッ

霞「お前、覚悟せいや！ウチは卑怯もんが一番大嫌いなんや！」

ドガバキッ！

借金取りが倒れたところに霞が近付いて霞は借金取りをボコボコにぶちのめした。

しばらくして

霞「悪かったなどうやらウチが間違ってたみたいや」

一刀「わかってくれればそれでいいよ」

ガシッ！

一刀は霞と握手すると

霞「そんじゃさらばぜで！」

ダッ！

霞は去っていった。

季衣「それじゃあぼくもこいつを警備隊に引き渡さなくちゃならぬ
いからまたね」

スッ

季衣は借金取りを軽く持ち上げて去っていった。

翠「結局あたしは何もできなかったな、まああたしも旅を続けるか
らまたな」

ダッ！

そして翠も去っていった。

一刀「それじゃあ鈴々、俺達も…」

くるっ

一刀が鈴々の方を向くと

男の子「お母さん、妹、助かってよかったね」

お母さん「もうお前達に苦勞はかけないからね」

妹「よかったね」

鈴々「(じ〜)」

鈴々は親子の様子を見ていた。

「一刀「鈴々、行くよ」

鈴々「!? わかったのだ」

「ダッ！」

鈴々は驚いて一刀のあとを追っていった。

道中

「一刀「鈴々は愛紗と仲直りしたいんじゃないの？」

鈴々「何を言ってるのだお兄ちゃん!? 鈴々は愛紗のことなんて別に……」

鈴々が言おうとすると

朱里「はわわ! 一刀さん!」

前の道から愛紗と朱里が現れた。

愛紗「鈴々!」

鈴々「(ビクッ!?)」

愛紗の言葉に鈴々が驚いていると

愛紗「その…なんだ…お前の占いもたまには当たる時もあるのだな
」

愛紗が焦らしながら言つと

鈴々「(ニヤツ) そうなのだ鈴々の占いは百発百中なのだ！だから
愛紗もこれからは鈴々の占いを信じるのだ！」

調子にのる鈴々に

愛紗「調子にのるでない！このお調子者が！」

鈴々「鈴々は別によつてないのだ！偉そうに言わないでなのだ！」

ギャーギャーッ！

朱里「はわわ！？また口喧嘩しちゃいましたね！？」

「一刀「巻き込まれるのも嫌だし、ほつといた方がいいかもな」

朱里「いいんでしょうか？」

「大食い少女とさらし女」(後書き)

次回、黄忠と孫小香登場

「食い逃げ姫と弓の名手」(前書き)

今回はまだはつきりと紫苑が登場しません。

「食い逃げ姫と弓の名手」

旅を続ける一刀一行

今日のはんきに山道を歩いていると

？「ちよつと！離してよ〜！」

男「ダメだ！こっち来な！」

男が嫌がる女の子の手を引っ張っていた。

鈴々「女の子が連れ去られようとしているのだ!？」

愛紗「なにっ!？いくぞ鈴々！」

鈴々「応なのだ！」

ダダッ!

女の子を救うべく男の元に急ぐ愛紗と鈴々

一刀「ちよつと待ちなつて二人とも!？」

朱里「はわわ〜!？」

一刀と朱里が止めるのも気にせず二人は男の元に急いでいった。

？「いい加減に離してよ〜！」

男「黙りやがれこの食い逃げ…」

男が最後まで言おうとすると

愛紗「そのもの、手を離すがよい！」

鈴々「弱いものいじめは許さないのだ！」

パンツ！

愛紗と鈴々が男のところにとどり着いた。

男「何だよあんたら！？」

パツ

そして一瞬男の手が女の子から離れた瞬間

？「ラッキー」

ダッ！

女の子は愛紗達が来た方に逃げていき

ドシンッ！

？「きゃんっ！？」

一刀とぶつかった。

「一刀「大丈夫？」

スッ

一刀が手を差し出そうとすると

パシンッ！

？「ちよつと邪魔よ！」

ダダッ！

女の子は差し出された一刀の手をはたいて走り去っていった。

男「ああ！？逃がしちゃった！？」

そして男が驚いていると

愛紗「少女をいじめる極悪人め成敗してくれる！」

ブオンッ！！

男「ギヤーツ！？」

ドガッ！

愛紗は男に天誅を下した。

しばらくして

愛紗「申し訳ない！」

鈴々「ごめんなさいなのだ」

愛紗と鈴々は殴った男に頭を下げていた。

男「だから言おうとしたんだよ！団子を食い逃げしようとしたあいつを捕まえようとしたただけだって」

これが真相であり男は殴られ損であった。

男「ほらよっ！」

スッ

男は愛紗に手を差し出すと

愛紗「この手は一体？」

男「決まってるだろ食い逃げをあんたらが逃がしたんだから食い逃げが食べた分の団子代を払ってもらおうよ」

ビシッ！

男の方が正論であった。

愛紗「仕方がない」

スッ

愛紗が財布から団子代を出そうとすると

「一刀「おじさん、代金の代わりにこれあげるから見逃してくれない？」」

スッ

「一刀が先に懐から金色の髪飾りをおじさんに差し出した。

男「こいつは確か隣村で一番高いやつじゃないか!? よしっ! 今日のところはこいつで手をうってやるよ」

何とかおじさんに許してもらった一刀達だった。

そして道中

鈴々「お兄ちゃんいつの間にあんな高いもの持っていたのだ?」

朱里「私たちの貯金を全て合わせても足りないと思いますけど」

朱里と鈴々が聞いてくると

「一刀「あああれか、あれは食い逃げから掏った(すった)ものだよ」」

実は一刀が女の子とぶつかった時に女の子が怪しいと思った一刀はこっそり女の子の髪から髪飾りを掏っていたのだ。

朱里「はわわ！？じゃああの髪飾りは盗んだものじゃないですか！？」

鈴々「相変わらずお兄ちゃんは素早いのだ」

愛紗「感心してる場合か鈴々！一刀殿、人から盗んだものを売るなんて最低ですよ！」

一刀「別に売ってないよ代金払うまでおじさんに預けた…」

愛紗「同じようなものです！」

ギロリッ！

愛紗が一刀を睨み付けると

？「あぁーっ！やっと見つけた」

タタタッ！

一刀達の後ろから食い逃げした女の子が走ってきた。

？「ちよつとあんた達シャオの髪飾り知らない？あんた達と出会った時に落としたようなんだけど」

女の子が聞くと

朱里「あの～それがですねえ」

朱里は女の子にわけを話すと

？「何よそれ〜！人のものを盗るのは泥棒じゃないそのお兄さん
シャオの髪飾り返してよ！」

女の子が一刀に迫ると

一刀「食い逃げ犯に言われたくないなあ〜」

？「何ですってー！」

ジャキンッ！

女の子は懐からチャクラムのような武器を取り出すと

？「これでもくらいなさーい！」

シュシュンッ！

一刀目掛けて投げてきた。

朱里「はわわ！？一刀じゃん！？」

朱里が噛みながら驚くなか

鈴々「孔明、心配するなのだお兄ちゃん、簡単には死なないのだ

」

愛紗「まだ孔明殿は一刀殿の強さを知らないのだから無理もないが
な」

普通にする二人であった。

そしてその二人が安心して理由を朱里はすぐわかることになったのだった。

カキンッ

朱里「はわわ!？」

何と一刀は投げ出されたチャクラムを打ち返したのだった。

?「うわっ!？」

サッ

辛うじてチャクラムをよける女の子だが

スッ

?「ひっ!？」

目の前に一刀の木刀が現れた。

一刀「まだやる気？」

一刀が言うと

?「ポッ／／／」

突如女の子の顔が赤くなった。

？「髪飾りは諦めるからシャオと結婚してね／／／」

ガバツ！

一刀「うわっ！？」

女の子はいきなり一刀に抱きついた。

朱里「はわわ！？」

鈴々「お兄ちゃんはモテるのだな」

愛紗「（ぴしっ）そのようだな」

愛紗は何故自分が怒っているのかわからなかった。

シャオ「私の名前は孫小香。シャオって呼んでいいよお兄さん／／」

一刀「何でこうなるの！？」

そして一行はシャオを連れて近くの村の飯屋に立ち寄った。

朱里「じゃあシャオさん…」

シャオ「ちよっとお兄さん以外は呼ばないでよねチビツ子2号！」

鈴々「キャハハッ！朱里はチビツ子2号なのだ」

朱里「あの、私が2号なら鈴々ちゃんが1号だと思いますけど」
いつの間にか真名を交換しあった二人であった。

鈴々「鈴々はチビツ子じゃないのだ！」

愛紗「落ち着け鈴々、それでホントなのか小香殿が孫家の姫君だといふのは」

愛紗が聞くと

シャオ「本人が言ってるんだから間違いはないじゃない」

シャオがそう言つと

ガタッ

一刀達は円を作るように並んだ。

愛紗「ホントなのだろうか？」

一刀「食い逃げするくらいだから嘘じゃないの？」

朱里「でももしホントならすごいことですよ」

鈴々「おへそ丸出しの言うことなんて信用できないのだ」

シャオ「ちよつと！わざと聞こえるように話さないでよね！」

ガタンッ！

シャオがテーブルを激しく叩くと

ヒューッ　ガチャンッ！

コップが落ちて割れてしまった。

愛紗「ああもう何をしているのだ」

愛紗が割れたコップを集めていると

女将「ほらよ新しいコップだよ」

トンッ

店の女将が新しいコップを持ってきてくれた。

「一刀」すみません。これ少ないですがコップの弁償代に」

「一刀が財布からお金を渡そうとすると

女将「別に構わないよ。これから大儲けできるんだからさ」

鈴々「何故なのだ？」

鈴々が聞くと

女将「この街の長の娘と隣街の長の息子が結婚式をひらくんだよ。

そんなもって婿がとんでもない美形だというもんだからそれを見るために旅人がこの街に集まってくるのさおかげでこっちは大儲けだよ」

女将が言うつと

愛紗「結婚とはめでたいではないか」

シャオ「お兄さんとシャオの結婚式も負けなくらい豪華にしようね」

一刀「え」と

愛紗「（ピシッ！）」

またも苛立つ愛紗であった。

女将「ところが大変かもしれないんだよ。なんでも婿の命を狙う暗殺者がいるみたいなんでねえ、まあ当日は警護の人間が山ほどいるから大丈夫だろうけどね」

と女将は言うのであった。

そして飯屋を出た一行は

朱里「暗殺だなんて物騒ですね」

愛紗「でもまあ女将の言うように警護の人間がたくさんいるから大丈夫だろうがな」

鈴々「愛紗の言う通りなのだ それよりも早くこのお金で宿に泊まるのだ」

スッ

鈴々が財布を上に掲げる（かかげる）と

キラッ

財布の金具がキラリとひかり

キーンッ！ バシッ！

カアッ！

一羽の鳥が鈴々の持っていた財布を奪っていった。

鈴々「この泥棒カラス！財布を返すのだ！」

アホーッ

鳥は鈴々をバカにするかのごとく飛んでいく

愛紗「くっ！逃げ足の早い奴め！」

一刀「こんのっ！」

スッ

そして一刀は持っていた木刀を鳥目掛けて投げようとしたその時！

シュンツ！ ザシュツ！

突然矢が飛んできて命中はしなかったが飛んできた矢は烏の頭を掠めて（かすめて）いった。

ヒューツ！ パシツ！

鈴々「取ったのだ」

だが烏から財布を奪うにはちょうどよかった。

愛紗「あの矢はどこから飛んできたのだろうか？」

愛紗が辺りを見渡すと

バンツ

遠くの宿から矢を構えている女性がいた。

愛紗「（あそこからここまで三里半）一里が約3キロなので約10キロメートル）だというのにすごい腕だな」

そして一刀達は宿に泊まることにした。

次の日

シャオ「ふあゝ、眠いよう お兄さんおんぶして」

一刀「頑張りなよシャオ」

朱里「なるべく早く次の街にいきたいですね」

愛紗「そのために早起きしたわけなのだが」

鈴々「人が多すぎて歩きにくいのだ」

ずらーんっ

道には結婚式を見るためなのか早朝にもかかわらず人がたくさんいた。

愛紗「しかしこの大通りは見事なものだ。遠くの宿まではつきりと

…」

とここで愛紗が何かに気がついた。

何とこの大通りは遠くの宿から見通しがいいのだ。

愛紗「（もし暗殺者が婿を狙うなら遠距離のはず、ここから宿まで六里（約18キロ）までであるがこの場所にとどく者がいるとしたら）」

とここで愛紗は昨日のことを思い出した。さらに奥にある宿は昨日矢を放った人が泊まっている宿であった。

愛紗「もしかして！」

ダダッ！

そして愛紗は宿の方に駆けていった。

鈴々「どうしたのだ愛紗？」

鈴々が聞くと

愛紗「少し用がある。みんなは後からついてきてくれ」

そして愛紗は宿に向けて走るのであった。

「阻止せよ暗殺計画」

一刀達が宿に着くと

宿の人「あなたにお客さんだよ」

？「私に客人ですか？」

その部屋には見事な胸をした美女がいた。

そして愛紗が部屋に入ると

愛紗「我が名は関羽という。昨日は義妹の財布を盗もうとした烏を
追い払ってくれてすまなかったなそのお礼にまいったのだ」

愛紗が言う

？「わざわざお礼だなんて私の名は黄忠、字は漢升あせうと申します」

黄忠（真名は紫苑）が言う

ガラリッ

愛紗はいきなり窓を開けて

愛紗「この窓から通りがよく見えるものだな、だがこの窓から媚を
狙えるとしたら相当な弓の使い手だろうな」

愛紗が言った途端

紫苑「くっ！」

ガチャリッ

紫苑は愛紗の偃月刀を手にし、愛紗に向けようとするが

スッ！

紫苑「！？」

愛紗がいち早く紫苑の持っていた弓・颯鵬くほうを構えて紫苑の方に向けた。

愛紗「長物（偃月刀やなぎなた等）の扱いは弓よりうまくないらしいな」

愛紗が言つと紫苑は観念したのか

カラリッ

偃月刀から手を離すと

紫苑「申し訳ありませんでした！」

バタンッ！

突然頭を下げた。

愛紗「貴方のような優しい方が暗殺なんてするはずがない訳を話し

てくれないか？」

愛紗が聞くと

紫苑「わかりましたお話しします」

と紫苑が言った途端

愛紗「もういいぞ鈴々入ってくれ」

愛紗がそう言うと

ガラッ！

扉の外には鈴々達が待ち構えていた。

愛紗「安心してくれみんなは私の仲間だ。それより事情を話してくれないか？」

紫苑「わかりました」

そして紫苑は訳をなしはじめた。

紫苑「夫を早くに亡くした私は幼い娘の璃々と二人仲良く村に住んでいました。ところがある日買い物から帰ってくると娘は預かった返してほしけりや指定の場所に一人で来いと書かれていたので私は向かったのです」

紫苑がはなしていると

一刀「(じくっ)」

一刀がいつになく真剣な目付きで紫苑を見ていた。

愛紗「(一刀殿も珍しく真面目に話を聞くのだな)」

愛紗は感心していたが一刀の視線を見てみると

ドオーンッ！

一刀の視線の先には紫苑の爆乳があった。どうやら一刀は紫苑の爆乳を見ていたようだ。その事に愛紗が気づくと

ゴッチーンッ！！ ミ

愛紗「大事な話の最中に何を見ているのだ！」

一刀「すみませんでした」

シャオ「ちよっと！シャオの婿を殴らないでよね！」

鈴々「いつからお兄ちゃんはお前のものになったのだ！」

朱里「はわわ〜！？皆さんお静かに〜！？」

一刀達が騒いでいると

紫苑「あのう、話を続けてもよろしいですか？」

紫苑が聞いてくると

愛紗「すまない続けてくれ」

と愛紗は一刀をボコリながら答えるのだった。

そして紫苑は話を続ける。

紫苑「私が指定された場所に行くところには一人の男がいて、『娘の命を助けたければある街の婿を暗殺しろ！さもなければ娘の命はないと思え！』と言われて仕方なく私は暗殺を引き受けたのですほろっ

紫苑が涙を流すと

愛紗「人質をとるとは許せない奴だな。黄忠殿、ここであつたのも何かの縁だ。我々も娘の救出を手伝わしてもらおう！」

愛紗が言つと

鈴々「悪い奴は見過ごせないのだ！」

一刀「協力させてもらつよ」

一刀達が次々と言い

紫苑「皆さんありがとうございます」

紫苑はお礼を言つたのだった。

シャオ「でもさあー監禁場所が分からないんじゃないじゃあ救いようがないじゃん」

シャオの言う通りであった。

鈴々「ところでこの落書きは何なのだ？」

みんながどうしようかと考えている時、鈴々が机の上にあった紙に興味をもった。

紫苑「それは誘拐犯が娘が無事な証にと娘が書いた絵です」

一刀「どれどれ」

一刀達が紙を見てみると

朱里「あれっ？」

朱里が一枚の紙に興味をもった。

朱里「皆さんこの書かれている人に見覚えありませんか？」

朱里が聞くと、紙にはどこかで見たようなおじさんが描かれていた。

一刀「この絵は団子屋のおやじ！」

シャオ「道理で人相が悪いと思ったら悪人だったのね！」

あわれな団子屋のおやじ

だが朱里は

朱里「違いますよ。犯人がわざわざ仲間の似顔絵を送るなんて居場所を知らせるようなものです。これはきっと黄忠さんの娘が見たものを書いたんですよ」

朱里が言うと

鈴々「そういえばあの店の近くに古い建物があったのだ!？」

愛紗「そうとわかればいくぞ！」

ダダッ!

愛紗達が外に出ようとする

紫苑「娘の居場所に心当たりがあるんですか!?!ならば私も一緒に!」

紫苑も出ていこうとするが

朱里「ダメですよ黄忠さんは顔を知られてますからここにいてください!」

ダダッ!

出ていこうとする紫苑を何とか引き留めて一刀達は宿を出るのだ。た。

一刀達が去って数分後

男「黄忠、そろそろ出番だから準備しろよ。もししくじったら娘の命はないからな」

男がやって来て紫苑に宣告してきた。

紫苑「（こうなったら後は頼みますよ関羽さん達）」

もはや紫苑にできることは愛紗達が成功するのを祈ることだけだった。

さてその頃、愛紗達は

鈴々「あれっ？お兄ちゃんがないのだ」

いつの間にか一刀の姿が消えていた。

愛紗「ほっておけあんな奴がいなくても我々だけで何とかなる！」

だが愛紗は一刀をほっとくことにした。

団子屋

男「あの兄ちゃんからもらった髪飾り早く売りにいかないとな」

団子屋のおやじが暇そうにしていると

トントントンッ！

勝手口からノックの音がした。

男「何の音だ？」

おやじが勝手口に行くと

愛紗「何だそれは鈴々？」

鈴々「お兄ちゃんから教わった『のつく』なのだ。これなら脅かさずに人を呼べるのだ」

朱里「はわわ！？すごいですね」

そこには騒いでいる愛紗達がいた。

男「あんたら何しに来たんだ？」

おやじ言うのも無理もない。

愛紗「申し訳ない、実はだな…」

愛紗がおやじに事情を話している頃

向かいのボロ屋

チビ「しかしまあこんなガキを見張るだけで金がもらえるなんて楽な仕事ですね」

デク「俺達を雇ってくれたあの人に感謝だな」

アニキ「そういえば大将の名前って確かりゅ…」

アニキが言おうとすると

？「ひっくひっく」

小さな女の子が泣いていた。

アニキ「うるせえ！ピーピー泣くなぶっ殺すぞ！」

この泣いている女の子こそ紫苑の娘の璃々である。

団子屋

男「えっ！？向かいのボロ屋に人質が！？」

おやじが驚いていると

愛紗「そうなのだ。つきましてはあなたに手伝ってほしいのだが」

男「俺に？」

向かいのボロ屋

チビ「それにしても金が来るまで暇だな」

チビが暇そうにしていると

男「お前がやったんだろ！」

シャオ「シャオが盗むわけじゃない！」

外から声が聞こえてきた。

男「前に食い逃げしたくらいだ、お前が店の売上金盗んだに違いない！」

シャオ「だったら裸にでもして調べればいいじゃん！」

バサッ！

シャオは上着を脱ぎ捨てて下着姿になった。

チビ「おおっ！」

アニキ「うるせえぞチビ、どうした？」

チビ「アニキもデクも見てくださいなすごいものが見れますよ」

アニキ「すごいもの？」

スッ！

アニキとデクが外を見ると

男「まだ下があるだろ！」

シャオ「わかったわよ！」

バサッ！

シャオはスカートを脱ぎ捨てた。

シャオ「これで満足でしょ！」

だが調子に乗ったおやじは

男「まだまだ！下着が残っているだろう全裸になりな！」

台本にない台詞を言い始めた。

シャオ「（ちよつと）予定と違うじゃない！」

そして三人が外に夢中になっている隙に

愛紗「男というものは皆こういう性格なのか？」

鈴々「わからないけどお兄ちゃんはああいう性格なのだ」

パンツ！

いつの間にか愛紗と鈴々がボロ屋に侵入し、

愛紗「天誅っ！」

鈴々「なのだ〜！」

ビシバシッ！

三人をこらしめるのであった。

しばらくして

朱里「関羽さん馬を借りてきましたから急いでください！」

愛紗「さすがは孔明殿、準備がよろしい。では璃々殿行くぞ！」

璃々「うんっ！」

スッ！

愛紗は璃々を馬に乗せると

愛紗「せいやっ！」

パカパッ！

馬を走らせて街に急ぐのだった。

その頃、街では

ズンチャッチャッ

今まさに隣街から婿がやって来ていた。

男「さあ黄忠よ、準備しな！」

男が紫苑に言うと

紫苑「わかりました」

スッ！

紫苑は颯鵬を構える。

狙いは婿のいる台座

男「あの位置なら外しはしねえ、もし外したら娘の命はないからな」

紫苑「わかってますよ！」

チャキッ！

紫苑は狙いを定める。

紫苑「（関羽さん達は間に合わなかったようですね、ごめんね璃々、人殺しのお母さんで）」

ちょうどその時

愛紗「間に合ったか！？」

愛紗が街にたどり着いた。

愛紗「くそっ！この人混みでは宿まで着くのに時間がかかりすぎる！？」

愛紗がどうしようか考えていると

シュパンツ！

愛紗「！？」

矢は無惨にも婿に放たれた。

キーンッ！

放たれた矢が婿に迫る！

だがその時、ものすごいことが起きた。

パシッ！ ビュンッ！

何と婿は高速で放たれた矢をつかみ、投げ返したのである。

キーンッ！

投げ返された矢は

ブシュッ！

男「がはっ！？」

バタッ！

紫苑の隣にいた男に命中した。

紫苑「いったい何が！？」

ちなみにこの出来事は一瞬でやられたので相当な武人でしか何が起きたのかわからないくらいだった。

しばらくして

璃々「お母さん」

紫苑「璃々っ！」

ぎゅっ

紫苑は飛び付いてきた璃々をぎゅっと抱きしめた。

愛紗「何が起きたのかわからんが一件落着だな」

鈴々「めでたしめでたしなのだ」

ところがそうもいかず

朱里「はわわ！？ところで一刀しゃんはどこでしゅか!？」

朱里が聞いてくると

一刀「おーいみんな〜！」

ダダッ！

遠くから一刀がやって来た。

愛紗「一刀殿！我々が大変な目に遭っていたのにどこほっつき歩い

てたんですか！

鈴々「お兄ちゃんずるいのだ！」

シャオ「おかげでシャオだって恥ずかしい目に遭ったんだからね！

みんなに責められる一刀

だが紫苑は

紫苑「あらっ、あの手の傷は」

一刀の手のひらに矢でかすったような傷があるのを発見した。

そして紫苑は気づいた。

実はあの婿は一刀の変装であり、万が一間に合わなかった時のため
一刀が婿の身代わりになっていたのだ。

紫苑「ありがとうございますね一刀さん」

だが紫苑はあえてみんなにこの事を伝えないでおくのだった。

そして別れの時

愛紗「黄忠殿、また会う日まで」

鈴々「璃々もまた会う日までさよならなのだ」

璃々「うん関羽お姉ちゃん達もまたね」

璃々が元気に言うと

紫苑「すみませんね親子の旅を邪魔してしまって」

この紫苑の言葉に

愛紗「親子？」

愛紗は不思議に思った。

紫苑「だって

愛紗 一刀

一

鈴々

でしょ？」

紫苑が言うと

愛紗「なっ！？絶対にちがう！／＼／＼」

愛紗は顔を赤くして叫ぶのだった。

「温泉を探せ」

とある麗羽の城

カポーンッ

この城で袁紹（真名を麗羽）がお風呂に入っていた。

麗羽「やっぱり一日の疲れをとるのはお風呂が一番ですわ」

疲れといっても大抵の仕事は猪々子と斗詩にやらせていて麗羽は判子押ししかやっていない。

そんな麗羽がゆったりとお風呂に入っていると

ガラッ！

猪々子「麗羽様、のんびり風呂に入っている場合じゃないですよ！

」

勢いよく文醜（真名を猪々子）が入ってきた。

麗羽「何ですの猪々子？わたくしは今入浴中…」

麗羽が言おうとすると

猪々子「そんなことより早く見てもらいたいものがあるんですよ！
さあこっちに！」

麗羽「えっ!?!」

グイッ! ザバッ!

猪々子は風呂に入っていた麗羽を無理矢理風呂から出した。

すると当然のごとく

麗羽「ちょっと猪々子! わたくしは裸ですよ!」

ピロピロッ

タオルも身に付けず裸の麗羽を猪々子が部屋につれて歩く(さいわいこの城には男はいない)

猪々子「大丈夫ですってどうせ小説なんだから絵はないんですし」

麗羽「後で映像化されたらどうしますの!」

それはあり得ない。

猪々子「大丈夫ですってどうせ麗羽様の裸なんて誰も興味はない…」

「

麗羽「いいから止まりなさい!」

ガツンッ! ミ

猪々子「ぐげっ!?!」

猪々子は麗羽に殴られてしまった。

玉座の間

麗羽「それでわたくしに用とは何ですか？つまらなかつたらお仕置きですわよ」

バスローブを身に纏った麗羽が玉座に座ると

斗詩「実は倉を整理していたらこのような地図が見つかりまして」

バサッ

顔良（真名を斗詩）が地図を麗羽に見えるように広げると

斗詩「この地図によると山の奥深くにお宝がねむっているらしいです」

猪々子「そのお宝さえあれば日頃の麗羽様による無駄遣いも解消できますよ！」

ピキンッ

猪々子の言葉に麗羽が怒った。

麗羽「誰の無駄遣いですって」

猪々子・斗詩『ひいつ！？』

麗羽の迫力に怯える二人

麗羽「まあお宝あると聞いて黙ってはいられませんわ！早速行きま
すわよ！」

猪々子・斗詩『あらほらさっさ！』

そして麗羽達はお宝めがけて旅立っていった。

次の日の朝 道中

華琳「なかなかいい天気じゃない絶好の温泉日和だわ」

曹操（真名を華琳）が夏侯惇（真名を春蘭）と荀イク（真名を桂花）
を連れて温泉に向かっていた。

春蘭「ハア」

華琳「どうしたのよ春蘭？」

ため息を吐く春蘭に対して華琳が聞いてみると

春蘭「秋蘭もつれてくればよかったと思いましたがね」

春蘭の妹、夏侯淵（真名を秋蘭）は城で留守番しているのだ。

華琳「仕方ないじゃない我が軍の主要が全員行くわけにはいかない
しさ、まあ秋蘭は帰ったらおもいきり可愛がってあげるからね」

ニヒヒッ

不気味に笑う華琳だった。

そして華琳と春蘭が話しているのを見た猫耳フードを着けた荀イクこと桂花は

桂花「ちよつと脳筋（春蘭）！華琳様と長く話さないでよね！」

桂花は華琳命の毒舌家であり大の男嫌いであった。

春蘭「誰がノーコンだ！」

何故その言葉を知っている！？

そしてその頃、旅を続ける一刀達は

鈴々「くんくんっ！何だか臭うのだ」

愛紗「くんくんっ！確かに何か臭うな」

シャオ「何よこの卵が腐ったような臭いは！？」

朱里「この臭いは…！？」

朱里が最後まで言おうとすると

一刀「すまん俺の屁だ」

ズコッ！

全員がずっこけた。

鈴々「もうお兄ちゃんのおならは臭いのだ！」

シャオ「ちよつと幻滅、お兄さんつてばこんな卵が腐ったようなおならするんだ」

一刀「えっ！？卵が腐ったような臭いだって！？すまんが最近鼻づまりで臭いがわからないんだ」

一刀が言うと

朱里「おならなわけないじゃないですか！この臭いは硫黄ですよ近くに温泉があるんです」

鈴々「温泉ってことはお風呂が近くにあるのかなのだ！？」

シャオ「やったー！久しぶりのお風呂だあ！」

愛紗「仕方がない旅の疲れを癒すためにも立ち寄るとするか」

一刀「やつほーいっ！」

一刀が喜んでいると

愛紗「わかってると思いますが一刀殿、覗いたら殺しますからね

」

ゴトゴトッ…！！

冗談ではなく本気の目をする愛紗であった。

そして一行は温泉にたどり着いた。

鈴々「鈴々が一番先に入るのだ！」

シャオ「ずるいシャオが一番なんだからね！」

ダダッ！

幸い男湯と女湯に分かれていたので分かれた愛紗達が入ると一番に鈴々とシャオが服を脱ぎ捨てて温泉へと駆ける。

愛紗「こら二人とも！風呂場で走るんじゃない！」

愛紗が止めようとするが二人は聞かずに

鈴々「そ〜れっ！」

シャオ「負けないんだから」

ぴよんぴよんっ！

温泉へと飛び込んだ。

だが

ドッシーンッ！！

温泉にお湯が入ってなく二人はお尻をぶつけた。

シャオ「何でお湯が入ってないのよう！」

シャオが叫ぶと

鈴々「お兄ちゃんそっちはどうなのだ？」

鈴々が男湯にいる一刀に聞いてみるが

一刀「こっちにもお湯がないよ」

男湯にもお湯がなかった。

とそこへ

華琳「あら、どこかで聞いた声がすると思ったら」

パンツ！

女湯に華琳達が現れた。

愛紗「曹操殿！？」

バツ！

愛紗は華琳に襲われないように構えると

華琳「あら関羽は相変わらずしっとりつやつやね」

じ

愛紗「ひっ!？」

ガバツ

華琳に見られていると知りすぐさま体を隠す愛紗だった。

温泉の外

華琳「どうやら偶然我が軍と関羽達が出会ったようね」

温泉から出た一行は温泉近くの茶店で一休みしていた。

桂花「華琳様から聞いたけど男なんて汚いやつと行動してるってホントだったのね!？」

ちなみに桂花は一刀達とは初対面である。

シャオ「それにしてもどうして温泉がないのよう!？」

シャオが温泉に入れなかったことに対して怒ると

主人「この辺はもう枯れちまったのさ」

茶店の主人が話しかけてきた。

主人「前はこの辺にも温泉があったんだがこの間の日照りで湯は枯れて、源泉も出なくなっちゃったからな。もしかしたら隣にある鉱

山を掘れば温泉が出るかもしれないがな」

主人が言うつと

華琳「なるほどね、それならここにいる関羽達と私達とで温泉掘対決をしようじゃないの！」

華琳が提案すると

愛紗「別に我々は…」

愛紗が断ろうとするが

シャオ「面白い！呉の姫君として受けてたつわよ！」

勝手にシャオが勝負を受けてしまった。

華琳「両者同意で決定ね。我が軍が勝ったら関羽をもらつわよ！」

ビシッ！

勝手に賞品にされる愛紗

愛紗「ちよつと待て！何で私が…！？」

愛紗が最後まで言うつ前に

シャオ「いいわよ！関羽くらい一人でも二人でもあげるわよ！そのかわりこつちが勝ったらあんたのそのくるくる髪ほどいてやるんだから！」

シャオがまた勝手に引き受けてしまった。しかもシャオの要求は確実に興味によるものだった。

華琳「いいわよ！それじゃあ温泉堀対決開始よ！」

愛紗「ちよつと待て！私の意思はないのか!？」

こうして愛紗の意思に関係なく愛紗とくるくるほどきを賭けた対決が始まるうとしていた。

だが一行が向かった山には

麗羽「どこにお宝があるのかしら？」

宝を探しに来ていた麗羽達がいた。

猪々子「その地図古いですからね。地形変わってるんじゃないの？」

斗詩「文ちゃん、麗羽様のやる気を消しちゃ……」

斗詩が最後まで言おうとしたその時

斗詩「麗羽様、文ちゃん隠れてください！」

サッ

斗詩は隠れながら二人に言うが

猪々子「斗詩、何で隠れるんだ？」

麗羽「かくれんぼしている場合じゃありませんのよ！」

隠れない二人に対し

斗詩「いいから隠れてください！」

ドオンツ！

斗詩は顔を大きくしながら二人に怒鳴った。

麗羽「わかりましたわよ隠れればいいんですよ」

猪々子「一体どうしたんだよ斗詩？」

サッ

二人が隠れると

斗詩「あれを見てくださいよ」

スッ

斗詩はある一点を指差した。

猪々子「きれいな指だな。アタイとは大違いだ」

斗詩「指じゃなくて指の先だってば！」

ビシッ！

今度こそ二人は斗詩が指差した先を見てみると

バンッ！

そこには一刀達と華琳達がいた。

麗羽「あれは生意気なくなるくる小娘！」

猪々子「あつちの赤髪の子ビ（鈴々）は前に試験を受けにきたやつ！？」

麗羽「きつとあの人達もお宝を狙ってますのね！」

実際は違っのだが

斗詩「どうします麗羽様、曹操さんがいるんじゃ勝てませんし、あのおチビちゃん（鈴々）も強いつて聞きましたよ！？」

猪々子「あきらめて帰りますか？」

しかし麗羽は

麗羽「お黙りなさい！なぜわたくしが帰らなくちゃいけないの！そ
うですわ、連中が宝を見つけたらあの中で一番弱そうな人を人質に
しましょう」

斗詩「となると軍師の荀イクさんかあちらの金髪おチビちゃん（朱里）ですかね？」

しかし猪々子は

猪々子「何言つてんだよ斗詩、あそこにいる優男（一刀）が一番弱そうじゃんか！」

麗羽「確かにわたくしもブ男さんは嫌いですからね猪々子、あの男を人質に……」

麗羽が最後まで言おうとすると

鈴々「でつかい岩なのだ！？」

一刀達の通路に道を塞ぐ大きな岩が現れた。

華琳「春蘭、破壊できるかしら？」

春蘭「すいませんが無理です。足場が悪く跳んだだけでも崖から落ちてしまいます。こんな岩を持ち上げるなんてできませんし」

春蘭が言うと

桂花「役に立たない脳筋ねえ」

春蘭「何だと！ だったらお前が知恵を使ってどかしてみろ！」

華琳「やめなさい二人とも！」

二人は喧嘩を始めた。

スッ

華琳「んっ？」

そして一刀が岩の前に立つと

一刀「ふんぬっ！」

ググッ！

一刀は岩を持ち上げようとした。

朱里「はわわっ！？無理ですよ一刀さん！？」

シャオ「そっだよこんな岩が持ち上がるわけ…」

二人は心配するが

ガバッ！

一刀は岩を持ち上げた。

朱里・シャオ「・・・！？」

華琳達「・・・！？」

一刀の怪力に驚くほとんどの人達

そして一刀は

「一刀「せいやっ！」

ポイツ！

持ち上げた岩を滝の方に落としていった。

そしてそれを見ていた麗羽達は

麗羽「人質に男はいりませんわ！？」

猪々子「そうっすね！？」

斗詩「別の人にしましょう！？」

一刀の怪力に恐怖を感じるのであった。

桂花「フンッ！実は岩が軽かっただけよ！脳筋が持つのを嫌がったから岩の重さがわからなかっただけよ」

春蘭「何だと！」

二人はまた喧嘩を始めた。

一刀の力を桂花は疑っていたが

華琳「（関羽もいいけどこの男もいいかもね）」

華琳は一刀を狙っていたのかもしれない。

「危険な温泉探し」

愛紗を賭けて温泉を探しに山にやって来た一刀達と曹操（真名を華琳）達、ところがその山には袁紹（真名を麗羽）達が宝を探しに来ていた。

華琳サイド

華琳「桂花、それは何なの？」

華琳は桂花が握っているL字型の針金に興味を持った。

桂花「これは駄^{ダウジング}字神具という和の国（日本）から取り寄せたものです。これで水脈を探すことができますよ」

ダウジングは昔水道管を探すのにも使われていたもので金属探知機にもなるのだ。

フリントッ！

すると桂花の持っていたダウジングが開き始めた。

桂花「華琳様、温泉はこの地下に眠ってますよ！」

桂花が示したのは切り株のところであった。

春蘭「よしっ！早速私が掘り起こしてやる！」

春蘭がスコップを持って掘ろうとするが

華琳「待ちなさい春蘭！」

華琳がそれを止めた。

その理由は…

華琳「私は喉のどが乾いたは、近くに川があったからお茶にしましょう」

ドテッ！

ただの水分補給であつた。

普通なら目の前にある温泉をほうっておけるかと突っ込むだろうが

桂花「そうですねお茶にしましょう！」

春蘭「温泉は逃げたりしませんしね！」

華琳命であるこの二人が突っ込むはずがなかった。

そして目の前に温泉を残しながら華琳達は去っていった。

だがその様子を見ていた人がいた。

ガサッ！

麗羽「おーほっほっほっ！宝を目の前にして去るだなんてマヌケな連中ですわね！」

突然茂みから麗羽達が飛び出てきた。実は麗羽達はこっそり華琳達のあとをついてきていたのだ。

猪々子「そんじゃお宝はアタイ達が」

斗詩「いただきますね」

ザクザク！

そして文醜（真名を猪々子）と顔良（真名を斗詩）は切り株を掘始めた。

そしてついに

カツンツ！

斗詩「何かに当たったようだよ」

猪々子「お宝かな？」

グイッ！

そして二人で引っ張ってみると

猪々子「何だこれ？」

斗詩「ボロボロの剣？」

そこには錆びてボロボロになった剣が埋められていた。

そして剣の下には

わらわらっ！

たくさんのお虫がいた。

その虫を見てしまった三人は

麗羽達『ぎゃーっ！？』

ひどく叫んだという。

ちなみに桂花のダウジングの反応は剣に反応していた。

一刀達サイド

ザクザク！

一刀達は華琳達とは別のルートで探すことになり、辺りを掘り返していた。

愛紗「孔明殿、ホントにこの辺りでいいの？」

愛紗が孔明（真名を朱里）に聞くと

朱里「この辺は以前温泉が噴き出た場所なんです。だからまだ温泉が眠っていると思いませんか」

朱里が言うと

鈴々「それはわかるのだ！けどサボってないでお前も掘れなのだ！」

ビシッ！

鈴々はみんなが掘っているにもかかわらず一人サボっているシャオに怒鳴ると

シャオ「シャオはお姫様だからやらなくていいんだもん」

勝手なことを言うシャオに

鈴々「ふざけるなのだ！」

鈴々が怒鳴るが

一刀「ほっておけよ鈴々、働かざる者入るべからず。温泉を掘当てたら絶対シャオは入れないからさ」

一刀が言うこと

シャオ「お兄さんが言うなら仕方がない。シャオも手伝ってあげるわ！」

すくっ！

そしてシャオが座っていた石から降りてスコップを取ろうとすると

シャオ「きゃあっ！？」

突然シャオの悲鳴が聞こえてきた。

鈴々「どうしたのだ!？」

くるっ!

そして一刀達が声が聞こえてきた後ろを振り向くと

麗羽「おーほっほっほっ!」

シャオ「はなしなさいよ!」

シャオが麗羽達に捕まっていた。

一刀「あんたは確か!？」

麗羽「あら、あなたわたくしをご存じで?」

一刀は驚くが

一刀「誰だっけ?」

ずっっ!

全員がずっこけた。

前に一度一刀は遠目だが麗羽に会っているのであるが早く忘れた方がいいと考えて忘れていた。

麗羽「そんなことはどうでもいいですわ！　あなた達、この小娘を返してほしけりゃ宝を渡しなさいな」

シャオ「ちょっと！　私は孫家の末娘なのよ！　こんなことして後でただじゃおかないんだから！」

シャオは叫ぶが

猪々子「うそつけ！　あんたみたいなおちびが孫家の姫なわけないだろが」

斗詩「いくら助かりたいからって嘘ついちゃダメだよお嬢ちゃん」

全然信じてもらえなかった。

麗羽「さあどうしますの？」

麗羽が聞いてくると

ザザッ！

一刀達は作戦会議を開くため円陣を組む。

朱里「宝ってなんのことでしょうか？」

一刀「多分温泉のことじゃないの？」

鈴々「あいつ（シャオ）はうるさいから渡した方がいいのだ！」

愛紗「こら鈴々、いくらなんでもひどすぎるぞ！」

ガヤガヤ

一刀達が作戦会議をしていると

ぴくんっ！

朱里「えっ！？」

くるっ

朱里が後ろに気配を感じて振り向いてみると

朱里「はわわ！？」

一刀「どうした孔明？」

愛紗「なにか後ろにいるのか？」

くるっ

朱里が驚くのを見て一刀達も後ろを振り向くと

愛紗「あああ！？」

鈴々「くくく！？」

麗羽「うるさいですわね！何だと言いますの？」

くるっ！

そして麗羽達も振り向いてみるとそこにいたのは

ドオンツ！

一匹の大きな熊だった。

熊「グルルーツ！」

熊は吠え出すと

猪々子「熊だー！？」

愛紗「早く逃げないと！？」

誰もが逃げようとしたその時

鈴々「ランラン！？」

タタツ！

鈴々が熊に近づいた。

鈴々「みんな大丈夫なのだ。この熊は鈴々の友達のランランなのだ

」

モワッ

鈴々がランランとの思い出にひたっている

「一刀「鈴々、そいつはホントにランランか？」

「一刀の質問に鈴々は

鈴々「ホントにランランなのだ。だってランランなら左手の裏に白い跡が…」

スッ

鈴々は熊の手をしてみるが

ぽつんっ

そんな跡があるはずがなく

鈴々「逃げるのだー!？」

ドピューッ!!

鈴々が逃げると同時に一刀達と麗羽達も熊から逃げ出した。

麗羽「猪々子何かしなさいな!？」

猪々子「あんなでかい熊無理ですよ!？」

愛紗「死ぬ気で走るんだ!止まったら食われるぞ!？」

「一刀「朱里は俺に捕まって!？」

朱里「はいつ!?」

ガシッ!

シャオ「シャオも〜!」

ガシッ!

一刀達は熊から逃げ出そうと走り出すが

ドドッ!

熊「グルルーツ!!」

熊は猛スピードで追いかけてきた。(熊は人間より足が早いので逃げても捕まってしまう。死んだふりをしても熊は雑食性なので逆効果。おまけに木に登れるので木に逃げたら逃げ道がない。こういう時は鈴を鳴らして熊に人が近くにいることを教えるといいらしい。危険ですので絶対しないでください)

そして一刀達が逃げていると

猪々子「げげっ!? 滝だ!?」

ドドーツ!!

運悪く目の前には崖になっている滝があり逃げ道がなかった。

だが一刀は

「一刀「愛紗、鈴々、俺に捕まれ！」

愛紗「えっ!?!」

鈴々「お兄ちゃんを信じるのだ！」

ガシッ!

愛紗と鈴々が一刀に捕まると

ダダダッ!!

一刀はどンドン走る速度を早めて

「一刀「ホップ!ステップ!…」」

だんだんと早く走ると

「一刀「ジャンプ!…」」

ダッ!!! ピョーンッ!!

崖の端から跳んでいった!?

そして

ダダンッ!!

見事向こう岸まで到着した。

麗羽「わたくしは夢を見ているの!？」

斗詩「人が四人も抱えてあそこまで50メートルも跳ぶだなんて!？」

猪々子「夢に違いない!？」

麗羽達が一刀の跳躍力に驚いていると

麗羽達「はっ!？」

すでに麗羽達の足元に地面はなく

麗羽達「あれーっ!？」

ピューッ!! ドボンッ!!

麗羽達は滝壺に落ちていった。

一刀「あいつら大丈夫か!？」

愛紗「わかりませんね」

シャオ「お兄さんってすごいんだね!？」

鈴々「お兄ちゃんにできないことはないのだ!」

朱里「はわわ!？怖かったです!？」

しばらくして

麗羽「う…うん」

猪々子「麗羽様気がついたんですね!？」

斗詩「よかったです」

奇跡的に滝壺から落ちた三人は生きていた。

だが麗羽は

麗羽「生きていたじゃありませんわよ!ムカつきますわね!」

ドカツ!!

麗羽はムシャクシャして近くの岩に蹴りを入れると

ゴゴゴツ…!!

麗羽達『えっ!?!』

突然地鳴りが聞こえてきて

ブシューッ!!

岩の下から温泉が噴き出してきた。

またしばらくして

いつの間にか全員が集まり湧いて出てきた温泉に浸かっていた。

麗羽「おーほっほっほっ！服を脱げば我が軍の圧勝ですわ！この温泉はわたくしが出したのですからわたくしに感謝しなさいな」

麗羽が言うと

華琳「偶然が重なっただけじゃない」

桂花「図々しいっいたらありゃしない」

そして一刀は

愛紗「一刀殿、わかってると思いますですが覗いたら殺しかねますので注意してくださいね」

一刀「へいへい」

ぽっんっ

みんなが温泉に入っているのに対して一刀は一人外で待っていた。

そして温泉では

華琳「だいたい胸の大きさを勝負するのがおかしいのよ」

桂花「それがわからないだなんて胸がでかいとバカになるってホントなのね」

春蘭「ちよっと待て！それでは私も馬鹿みたいではないか！」

何やらおかしい争いが始まっていた。

麗羽「あらあら胸が貧しい人が何か言ってますわよ。大きさ、形、感度等どれをとってもわたくしの胸が一番ですわ」

桂花「あら感度なら華琳様が一番よ！」

華琳「!?!?!」

シャオ「ちよつと待ちなさいよ！感度ならシャオが一番なんだからね！」

いつの間にかシャオまで加わっていた。

鈴々「大きさなら愛紗だって…！」

愛紗「余計なことを言うな鈴々！お前にはまだ早すぎる！」

愛紗が鈴々に言うと

？「ハ―ハツハツハ！」

何処からか声が聞こえてきた。

？「このように愉快に話しているというのにたかが胸くらいでもめるとはバカなやつらめ！」

バンツ！

声が聞こえてきた方向を見てみると

そこには華蝶の仮面以外を脱ぎ捨てて裸になった華蝶仮面（星）が岩の上に立っていた。

華蝶仮面「そんな騒ぎを起こすやつはこの華蝶…」

華蝶仮面が最後まで言おうとすると

鈴々「あっ！変態仮面なのだ！」

ズコッ！

華蝶仮面は危うくこけそうになった。

華蝶仮面「変態仮面ではない！華蝶仮面だ！」

と華蝶仮面は言うが

愛紗「だがその姿はどう見ても変態仮面でしかないのだが」

華蝶仮面「えっ!？」

バツ！

愛紗に言われて華蝶仮面が改めて自分の体を見ると

見事に何も着ていなかった。

華蝶仮面「ハーハッハッハ！ではさらばだ！」

シュンツ！

そして華蝶仮面は去っていった。

愛紗「あいつは何しに来たのやら」

一刀「全くだな」

愛紗「そうですね一刀殿」

しゅん

愛紗「って！何で普通に入ってるんですか!？」

いつの間にか温泉に一刀が入っていた。

一刀「覗いたら殺すって言ったからさ堂々と入るごと…」

そして一刀が最後まで言う前に

ドガバキツ!!

一刀「ぎゃーっ!？」

その場にいたほとんどの人から集団リンチをうける一刀であった。

猪々子「それにしても宝って温泉のことかな？」

斗詩「案外そうかもしれないね」

ところがそうでもなく

一刀達が出会った熊の巣の奥深くに

熊「グルツ？」

キラキラッ

たくさんのお宝があったという。

「危険な温泉探し」(後書き)

次回、孫呉の一団が登場。

「呉の国の騒動」

ここは海を渡った先にある呉の国

この国では今、大変なことが起きていた。

ダダッ！！

玉座の間へと走り抜ける一つの影

バタンッ！

その影は玉座の間の扉を勢いよく開けると

蓮華「姉様、大丈夫ですか！？」

そこに入ってきたのは呉の国の次期王、孫権（真名を蓮華^{れんぷゐ}）であった。

蓮華は玉座に座っている呉の国の王であり姉の孫策（真名を雪蓮^{しえれん}）に話しかけると

雪蓮「心配しなくても別にいいわよ、ただ油断して腕を少し傷つけられただけなんだからさ」

雪蓮は包帯を巻かれた腕の傷を蓮華に見せると

蓮華「よくありません！姉様はいつもいつも戦のことばかり少しは周りの人のことも考えてください！」

蓮華が言つと

？「口を慎むのだ蓮華！」

バンツ！

雪蓮の隣にいた孫静（雪蓮達の母である孫堅の妹、雪蓮達にとっては叔母に当たる人物）が蓮華をしっかりとつけた。

孫静「雪蓮は国のために戦をしているのだ。それを少しはわかってやれ！」

孫静が蓮華に説教していると

冥琳「お待ちください孫静様」

同じく雪蓮の隣にいた周瑜（真名を冥琳）が孫静を静めた。

冥琳「蓮華様はまだ次期王としての自覚が足りないのでからお許しください」

ペーりっ

冥琳が頭を下げると

孫静「お前が頭を下げるならば仕方がない今回だけは許してやる」

説教はおさまった。

そしてその頃、一刀達一行はというと

ザッパーンッ！！

鈴々「大きな海なのだ〜！」

朱里「さすがは長江ですね」

一行は呉の国に向けて長江を渡っていた。

シャオ「凄いでしょ長江が見れたんだからシャオに感謝しなさいよね」

別にシャオが威張ることではない

愛紗「にしてもいいのか小香（真名を小蓮^{シャオ}）殿、お主は確か家出中だろう帰ったら説教されるのではないのか？」

愛紗がシャオに聞くと

シャオ「ご心配なくどうせ今ごろ、『シャオ、いなくなって寂しかったわ！』って泣き叫んでるんだから（それにお姉ちゃん達に一刀を紹介しなくちゃね。なんたって将来の家族なんだから）」

くるっ

そんなことを思いながらシャオは一刀を見てみると

一刀「オエ〜っ」

一刀は船酔いしていた。

一刀は船にかかわらず陸から離れた乗り物（飛行機等）に乗るときまって気分が悪くなるのだった。（ただし足が地面につけばすぐに治る）

そして一行は呉の国にたどり着き城についたのだが

孫静「この馬鹿者が！」

シャオ「うつ!?」

城に帰ったシャオを待っていたのは泣き叫ぶ声ではなく孫静の説教であった。

孫静「こんな大事なときに家出だなんてなに考えてるのですか！お前には呉の第三王という自覚が足りないぞ！」

シャオ「はいはいわかってますよ〜」

孫静「はいは一回!!」

そんな説教をうけるシャオに助け船が出された。

雪蓮「まあまあ孫静殿、説教はそれくらいにしないか、でないともた家出してしまっぞ〜」

シャオの姉の雪蓮である。ちなみに孫静を叔母と呼ばないのは人前だからである。

雪蓮「それよりも関羽（愛紗）殿、張飛（鈴々）殿、孔明（朱里）殿、北郷殿、妹が迷惑をかけたな妹に代わって礼を言わせてもらおう」

ペーりっ

雪蓮は一刀達に頭を下げた。

愛紗「とんでもない頭をあげてください孫策殿!？」

朱里「私達は別に迷惑だとか!？」

鈴々「大迷惑なの…むっ！」

一刀は鈴々の口をふさいだ。

一刀「迷惑だとか思ってますんから」

そして一刀達が言つと

シャオ「そつだお姉ちゃん達に紹介しなきゃいけないんだつた」

雪蓮「誰を？」

雪蓮が聞くと

グイッ!

シャオ「この北郷一刀つてのはねシャオのお婿さんなんだよ」

シャオは一刀の手を引つ張って言うと

蓮華「なっ！？／／／」

冥琳「何ですと！？／／／」

愛紗「（ピキッ！）」

驚く二人に対して（一人は嫉妬）

じっつ

雪蓮は一刀の顔をじっとみると

雪蓮「点数は100点中30点ね」

バンツ！

面を向かってはつきりと言われた。

シャオ「どうして30点なのよ！」

シャオが抗議すると

雪蓮「見た感じ武力が無さそうだから0点よ、顔はまあまあだから30点がいいとこね」

厳しい審査である。

シャオ「ふーんだ！シャオの中では100点だから別にいいの！後

で頂戴ちやうだいと言つてもあげないからね！」

雪蓮「そんなの別にいらわないわよ」

あげくの果てにそんなの呼ばわりされる一刀であった。

蓮華「そんなことよりも妹を送ってくれたお礼に今夜は宴うたげを開くから参加するがよい」

蓮華が言つと

愛紗「そうだな参加させてもらおうか」

ピクピクッ！

この時、愛紗のこめかみにつつすらと青筋が出ていた。

愛紗「（一体私はどうしたというのだ？何だか一刀殿が他の女とイチャイチャしていると妙にイラついてくる）」

愛紗はこの感情が嫉妬によるものだと気づいてなかった。

そして一刀は

一刀「俺って30点なのか」

ガックン

雪蓮にはつきりと30点と言われて落ち込んでいた。

そして宴の時

ズラーリッ!!

たくさんのごちそうが並ぶなか

鈴々「うおーっ!?!?ごちそうがたくさんならんでいるのだ〜!」

食いしん坊の鈴々は浮かれていた。

愛紗「こら鈴々!意地汚いからやめ…」

愛紗が最後まで言おうとすると

シャオ「はい一刀、アーンして」

一刀「アーン」

パクッ!

イチャイチャする一刀を見た途端愛紗は

ボキッ!!

朱里「はわわ!?!」

握っていた箸を折ってしまった。

雪蓮「それにしても喉が乾いたわ、伽留牙お酒持ってきて」

雪蓮が言うと

高蘭「はいはい」

タタッ！

呉の国の副料理長である高蘭（真名を伽留牙）がお酒を持ってやってきた。

高蘭「雪蓮様、お酒でございます」

雪蓮「ありがとう」

スッ　　ゲビッ！

雪蓮は渡された徳利とっくりを勢いよく飲むと

雪蓮「ぶーっ!?」

ブバッ！！

雪蓮の口からお酒が噴出された。

高蘭「ぷははっ！雪蓮様引っ掛かった」

雪蓮「伽留牙！あなた徳利に酒じゃなくて酢を入れたわねー！！お仕置きするからまちなさい！」

高蘭「ヤダですよ」

ドタバタッ！！

宴の会場を走りまくる二人に

蓮華「姉様！伽留牙！客人の前でやめてください！冥琳も何か言ってくれ！」

こういう騒ぎの時に二人を静めるのが冥琳の役目である。

蓮華は冥琳を呼ぶが

蓮華「あれ？冥琳はどこだ？」

冥琳の姿はなかった。

その頃、呉の城の軍義室では

重役A「まったく近頃の孫策様ときたら戦に明け暮れておる」

重役B「これというのも周瑜の監督不届きだな。まったくあの若僧が我ら古株を出し抜くなんて憎らしい」

呉の国の重役達が何かを話していた。

するとそこへ

張昭「お揃いのようだな皆の衆」

重役達『張昭殿！？』

呉で一番古株の張昭が現れた。

張昭「このまま孫策様についていたら呉は滅んでしまう、どうだ皆の衆よ！　そのこと謀反むほん・クーデターでも起こさないか？」

張昭が言つと

重役A「張昭殿の言う通りだ！」

重役B「謀反を起こして孫策、周瑜を殺してやろう！」

重役達の心は一つになった。

張昭「では同盟の証としてこの紙に署名してもらおうか」

スッ

張昭が一枚の紙を出すと

重役A「それくらい簡単なことだ！」

重役B「みてるよ孫策に周瑜め！」

スラスラッ

そして重役達は次々と名前を書き始めた。

張昭「（ニヤリッ）」

次の日

蓮華「冥琳、客人の関羽達の姿が見えないがどこにいったのだ？」

冥琳「孔明殿は陸遜（真名を穩）と共に書庫へ、関羽殿と張飛殿はシャオ様と一緒に山に狩りに案内役として甘寧（真名を思春）がついております」

蓮華「北郷殿は？」

冥琳「確か高蘭と共に調理場だと思いますが気になりますか？」

冥琳が蓮華に聞くと

蓮華「バツ…バカなことを言うな！？あんな男は別に気にもしていないがシャオの婿として来るなら私の義弟になるかもしれんからな／＼／」

と言いながらも顔を赤くする蓮華であった。

書庫

ズラーリッ！！

朱里「はわわわ！？たかさんの本がありますね！？これだけあると

（読むのに）興奮してしまいますね」

朱里が言うと

穩「そうですね、私も（読んでる途中で）興奮しちゃってます」

呉の軍師・陸遜伯言、彼女は本を読むと興奮する体質だった。

山

愛紗達が山道を歩いていると

バササーッ！

一羽の鷹が飛んでいった。

シャオ「よーしっ！」

ぐぐっ！

シャオは弓を構えると

ピシュンッ！

放たれた弓は

スカッ

見事に鷹から外れた。

シャオ「ちよつと西森！ アニメなら当たっていたじゃないの！」

「

これはアニメを元にした話なので多少の違いはある。

思春「シャオ様、私が弓をとってきますのでお待ちください」

シュンツ！

そして思春は外れた弓を取りに一人で向かっていった。

鈴々「にやははっ！おっぱい小さいうえに矢もへたつぴだなんて最悪なのだ」

カチンツ！

この鈴々の言葉にシャオがキレた。

シャオ「おっぱいが小さいのはあんただって同じじゃないの！だいたいシャオの方がおっぱい大きいんだからね！」

鈴々「鈴々の方がおっぱい大きいのだ！」

二人がもめていると

愛紗「二人とも、たかが胸の大ききくらいで喧嘩するでない」

愛紗が止めに入るが

シャオ「おっぱい勝ち組は黙ってて！こうなったらどっちが大きい
かあつちで勝負よ！」

鈴々「のぞむところなのだ！」

ザッ！

二人は愛紗を置いて少しいった先の草むらに入ってしまった。

愛紗「まったくもうあの二人はいつも喧嘩ばかりだな」

愛紗がため息をついていると

愛紗「んっ！あれは孫策殿ではないか」

城のテラスのような場所で雪蓮が酒を飲んでいるのを発見した。

愛紗「しかし一刀殿が30点とはな呉の王も男を見る目がないな」

タタッ！

そして愛紗が去ったすぐ後

バタンッ！

突然雪蓮が倒れたのだった。

「呉の国の騒動」(後書き)

ちなみに高蘭を他のキャラのように台詞が真名でないのは真名だと分かりにくそうだと思ったからです。

高蘭(真名を伽留牙^{きやるが})

「雪蓮暗殺事件」(前書き)

やはり高蘭も真名で書くようにしました。

「雪蓮暗殺事件」

孫家の城で孫策（真名を雪蓮）が何者かに襲撃をうけた。

そしてみんなは玉座の間に集められた。

タタツ！

朱里「ハアハア！？」

バタンツ！

兵士から報告を聞いた朱里が玉座の間にたどり着くと

そこにいたのは孫権（真名を蓮華^{れんぷゐ}）、周瑜（真名を冥琳）、甘寧（真名を思春）、陸遜（真名を穩）、孫小香（真名を小蓮・通称シャオ）、鈴々、孫家に仕える双子の大橋と小橋、副料理長の高蘭（真名を伽留牙・通称伽留^{キヤル}）、孫静、一刀、そして手錠をかけられた愛紗がいた。

朱里「どうして関羽さんに手錠がかけられてるんですか！？」

朱里が聞くと

蓮華「それは関羽殿が雪蓮姉様を暗殺しようとした疑いがあるからだ。何故ならば姉様が倒れた時に一人でいたのは関羽殿だけだから」

蓮華が言うつと

朱里「でも確か関羽さんには鈴々ちゃんと小香さんが一緒だったはずです！」

くるっ

朱里は二人の方を見ると

シャオ「それが…」

鈴々「一度だけ愛紗から離れた時があったのだ」

ガーンツ！？

その事に朱里はショックを受ける。

蓮華「これでわかっただろう、姉様を暗殺することができるのは…

」

蓮華が最後まで言おうとすると

朱里「待ってください！」

朱里が蓮華の言葉を止めた。

朱里「一人になった人が疑われるというのなら甘寧さんだって一人になりましたよね」

ギロリッ

思春「貴様、何が言いたい」

思春は朱里を睨み付ける。

朱里「孫呉の人だからって信用できるわけではありませんし、内心は孫策さんの暗殺を…」

朱里が最後まで言おうとすると

シュンツ！

思春「貴様っ！」

ジャキンツ！

思春は得物の幅広の刀・鈴音りんいんを朱里に向けて迫ってきた。

朱里「はわわ！？」

軍師である朱里が避けられるはずがない

蓮華「思春、やめろ！」

蓮華が思春を止めようとするが間に合わない！？

愛紗「孔明（朱里）！？」

鈴々「朱里！？」

思春の鈴音が朱里に直撃しそうになったその時！

ガキンツ！！

全員『！？』

思春「なっ！？」

みんなが驚いたのは

「一刀」そんなにキレると逆に疑われるよ甘寧さん」

バァーンツ！

思春の鈴音を受け止めている一刀がいた。

思春「（こやつ、私の早さより早く動いたというのか！？いや、偶然に違いない）」

思春が考えていると

孫静「思春、止めんか！貴様は呉に恥をさらす気か！」

ビシツ！

孫静が思春を叱りつけた。

孫静「ともかく、今疑われておるのは関羽殿と思春なのは事実だ。すまないが二人とも牢に入ってもらうぞ！それでよいな蓮華？」

孫静が蓮華に言つと

蓮華「孫静様の言う通りだ。二人は疑いが晴れるまで牢に入つてもらう！」

ザザッ！ ガシッ！

蓮華の命令で兵士達が二人をとらえる。

蓮華「すまないが思春も頭を冷やせ」

思春「わかりました蓮華」

鈴々「愛紗く！？」

愛紗「心配するな鈴々、私はすぐ戻ってきてやるからな」

ザザッ！

そして二人は牢に連れていかれた。

蓮華「さてすまないが疑いが晴れないので一刀殿達には関羽殿が出てくるまで監視をつけさしてもらおうぞ」

一刀「まあそれは仕方ないな」

鈴々「監視つきだなんて嫌なのだ」

朱里「鈴々ちゃん、私達が関羽さんの脱獄に協力させないためには仕方ないことです。大丈夫ですよ関羽さんが悪いことするはずない

「じゃないですか」

そう言つて朱里は鈴々を静めた。

そしてその日の夜

カツンカツンッ

ギイツ！

何者かが雪蓮が療養している部屋に入ってきた。

？「死ぬがいい雪蓮！」

ギランッ！

何者かは持っていた刀を光らせる。

ちなみに余談であるが何者かは某薬で小さくなった高校生探偵に出
てくる犯人のように黒スーツであった。

ブンッ！ ザクッ！

？「これでこの国は私のものだ！」

何者かが雪蓮を刺して喜んでいと

？「やっぱりあなただったのね」

？「！？」

後ろから声が聞こえてきたので何者かが振り向いてみるとそこにいたのは

雪蓮「もう正体はわかっているのよ」

バンツ！

そこにいたのは療養しているはずの雪蓮だった。

雪蓮「冥琳、みんな、明かりをつけていいわよ！」

雪蓮が言うと

パツ！ パツ！ パツ！

部屋中の明かりが一気につけられる。

？「うつ！？」

部屋に明かりがつくにつれて何者かの正体が明らかになってきた。

雪蓮「前々からあなたは怪しいと思っていたのよね、孫静叔母様」

孫静「くっ！？」

ババンツ！

何と！？雪蓮の命を狙った人物は雪蓮の叔母の孫静だった。

冥琳「申し訳ありませんがこちらはあなたが日頃から我々のことを憎いと感じているのに気づいてましてね」

伽留「私もお茶くみにいく時に何度も聞きましたよ」

蓮華「姉様を殺害しようとしてその罪を関羽殿に着せた罪を思い知ってください叔母様！」

ババツ！

雪蓮に続いて冥琳達も現れて

ザザツ！

城の兵士達が孫静の回りを囲っていった。

これで孫静も終わったかと思いきや…

孫静「フッフツ…アハハツ！」

何がおかしいのか孫静は急に笑い出した。

雪蓮「人って窮地きんぢになるとおかしくなるって聞いたけどホントだとわね！？」

雪蓮が笑い出す孫静を不思議に感じていると

孫静「私は正気だとも、いやなに、ここまである男がいつていたこととあっているとはな」

孫静が言つと

兵士「ぐはっ!？」

バタバタッ!

雪蓮達と一緒にいた兵士達が次々と倒れていき

又ウゝ

兵士達の後ろから見知らぬ兵士達が現れた。

雪蓮「あいつら何者よ!？」

冥琳「我々の策が失敗するだなんて!？」

突然のことに驚く雪蓮達

孫静「フフフツ…、冥土の土産にいいことを教えてやる。貴様らが私を捕らえることは最初からわかっていたのだよ!ある男から聞いてなあ」

実は数時間前、こんなことがあつたのだ。

孫静「さてと、雪蓮の息の根を止めてやるとするか」

孫静が雪蓮を殺害するための準備を部屋でしていると

謎の男「暗殺するなら少し話を聞け」

孫静「！？誰じゃ！？」

くるっ

孫静が振り向いた先には

バアンツ！

どこから侵入したのかわからないが黒のローブを身に纏った男が立っていた。

謎の男「忠告してやるよ、孫策は生きている。このままいけばあんたが捕まるぜ」

謎の男「何なら俺が手を貸してやるよどうだ？」

男が言うと孫静は

孫静「貴様、何が目的で私に協力するのだ？金か？物か？」

孫静が聞くと

謎の男「そんなものはいらさないさ、俺はただこの世界をメチャクチャにしたいだけだからな」

孫静「なるほど、よかろう協力を頼む」

そして孫静が少し目を離れた隙に

スッ

いつの間にか謎の男は兵を残して消えていた。

孫静「そして貴様らはまんまと罠にかかったというわけさ、やれ兵士共！奴らを殺してしまえ！」

ズシズシンツ！

孫静の命令に従ってじりじりと雪蓮達に迫り来る兵達

雪蓮「くっ！？」

いくら雪蓮が武力が強いといっても多勢に無勢、しかも仲間がいるのでいつものように暴れるわけにはいかなかった。

伽留「雪蓮様！？」

蓮華「姉様！？」

冥琳「雪蓮！？」

雪蓮「うっ！？」

そしてみんなは壁に追い詰められた。

兵士「くたばるがいい！」

ブオンツ！！

兵士の持っていた剣が雪蓮達に降り下ろされる。

雪蓮「くっ!？」

そして雪蓮達が目を閉じたその時

ドンッ!!

雪蓮「えっ!？」

雪蓮達に斬りかかってきた兵士がいきなりぶっ飛ばされた。

雪蓮「どうなってるの!？」

驚いた雪蓮が辺りを見てみると

一刀「どうやら間に合ったようだな」

バンッ!

何と!?!目の前には一刀がいた。

冥琳「一刀殿!?!あなた達には危険が及ばぬよう見張りをつけていたはずだが!?!」

冥琳が言うと

一刀「悪いけど見張りなら撒いてきたよ」

その頃、一刀を見張っていた兵が逃がしてしまったことにショックを受けていたという。

「一刀、孫権達はよそ者だからって客人を疑うような人達じゃないから怪しいのはあの孫静というおばさんと思っただけさ。そしたら案の定、あのおばさんが黒幕だったとわね。」

「一刀が言う」と

孫静「私はまだ　　ピー　　歳だ！兵士達よ、あやつを殺せ！」

ズズズシンツッ！

兵士達は狙いを一刀に変えて襲いかかってくる。

だが

ドガバキンツッ！

「一刀の前では10越えの兵士達も意味がなかった。」

孫静「何と！？あやつは化け物か！？」

そして孫静が驚いてる間に

ギユツッ！

孫静「なっ！？」

いつの間にか孫静は縛られていた。

冥琳「敵を目の前にして油断しすぎですよ孫静様。」

孫静「くっ!?!」

こうして孫静は反逆罪で逮捕されることになった。

一刀「さすがに少し疲れたな!?!」

一刀があらかた兵士達をやっつけて休んでいると

雪蓮「かゝずとっ」

むぎゅっ

いきなり雪蓮が抱きついてきた。

雪蓮「この前は30点だなんて言うてごめんね、あなたはもう10
0点満点よ 私の婿にならない?」

一刀「えっ!?!」

困る一刀であった。

蓮華「姉様は一刀殿をいらないと言ったじゃないですか!」

伽留「雪蓮ずるゝい!」

そして夜中にもかかわらず騒ぎだすみんなであった。

しばらくして 地下室

張昭「周瑜殿、これが孫静派の名を集めた署名じゃ」

冥琳「張昭殿にはすまないな、裏切り者の芝居させてしまつて」

冥琳が言つと

張昭「なあに、老い先短い年よりはこれくらいせねばな」

そして次の日の朝 一刀達の出港の日

雪蓮「関羽殿、迷惑かけてすまなかつわね」

ぺこりっ

雪蓮は愛紗に頭を下げる。

愛紗「迷惑だなんてそんな!？」

シャオ「今度会つた時までにはおっぱい大きくしてるから覚悟しなさいよね!」

鈴々「鈴々だつて負けないのだ!」

そんななか

朱里「ところで一刀さんの姿が見えませんが知りませんか?」

朱里が聞くと

雪蓮「一刀ならうち（呉）に来てもらおうよ。だから代わりといっ
ちやなんだけど高蘭をあげるわ」

花いちもんめしているわけではない

伽留「よろしくお願いします！」

鈴々「お兄ちゃん来ないのかなのだ？」

朱里「何だか寂しいですね」

一刀が来ないことにショックを受ける二人だが

愛紗「別に一刀殿のことは気にしなくてもよかろう」

と言いながらも

ブルブルッ

組んでいた両手が震えていた。

ザザーッ！

そして一刀を残したまま船は出港していった。

蓮華「姉様、いいんですか一刀殿を渡さなくて！」

蓮華が言うつと

雪蓮「蓮華、私は欲しいと思ったなら必ず手に入れるのは知ってるでしょ、早く一刀と子作りして次期王を作って隠居したいし」

それが本音である。

シャオ「お姉ちゃんは一刀をいらないうっていったじゃない！一刀はシャオの婿よ！」

雪蓮「私がいつそんなこと言った？いつ？何時何分何秒？地球が何回回ったとき？」

この時代ではまだ地球が丸いことさえわからないはずだが！？

そんなことはさておき雪蓮とシャオが言い争っている

ドーンッ！！

ものすごい勢いで一刀が走ってきた。

そして一刀は

ダッ！ ピョーンッ！！

高く飛び上がると

ドンッ！！

出港していった船に着陸した。

愛紗「一刀殿!?」

鈴々「お兄ちゃん!?」

朱里「はわわ!?一刀さん!?」

伽留「うわっ!?すごい!?」

ちなみに岸から船まではだいたい80メートルはある。

そして

一刀「またな孫策!」

一刀は手を振りながら別れをいうのだった。

雪蓮「キーツ!!!一刀、戻ってきなさいよー!」

シャオ「でないと今度来た時ひどい目にあわせるからねー!」

蓮華「やれやれ」

さすがの蓮華もあきれるしかなかった。

一刀達の旅はまだまだ続く。

「雪蓮暗殺事件」(後書き)

次回、劉備あらわる！

「劉備玄德」

呉の国を飛び出した一刀達は新たに高蘭（真名を伽留牙、通称・伽留^{ヤル}）を仲間に加え旅を続けていた。

そして一行が洞穴で一夜を過ごしていると

愛紗「う……うん」

愛紗が何やらうなされていた。

愛紗の夢の中

幼い愛紗「兄上、どうしましょう!？」

愛紗は夢の中で小さい頃を思い出していた。

愛紗の兄「大丈夫だ愛紗、兄上がお前だけは助けてやる!だからお前は寝台の下で隠れてなさい」

愛紗の兄が言うと

幼い愛紗「兄上はどうするのですか!？」

すると愛紗の兄は

愛紗の兄「大丈夫、兄上は無敵だから必ず愛紗の元に帰ってくるさ!だから愛紗は寝台の下に隠れてなさい」

幼い愛紗「わかりました」

ササッ!

幼い愛紗は素直に寝台の下に隠れて目を閉じていた。

だが

次に愛紗が目を開いた時に見たものは!?

バアンツ!!

幼い愛紗「あ…兄上!？」

変わり果てた姿となった実の兄であった。

幼い愛紗「兄上、いつものように私を驚かせようとしているんですよ? もうその手には引っ掛かりませんから目を開けてください」

愛紗の兄「……」

幼い愛紗は大好きな兄上がすでに亡くなっていることが信じられなかった。

幼い愛紗「兄上…兄上!」

そしてその日、幼い愛紗は涙が枯れるまで泣き続けたという

愛紗は幼い頃、実の兄を賊に殺されてしまいそれ以来賊を憎むようになったのだ。

愛紗「兄上!？」

ガバツ!

そして勢いよく愛紗が起き上がると

愛紗「ここは洞穴の中!？そうか、また私は過去の夢を…」

実は昔はしょっちゅう過去の夢を見続けた愛紗であった。

愛紗「そういえば最後にあの夢を見たのは一刀殿に出会う前の夜だったな」

スッ

愛紗は寝ている一刀の方をしてみると

鈴々「むにゃむにゃ、もう食べられないのだ」

伽留「むにゃむにゃ、追いついてみるよ雪蓮」

朱里「一刀さるん」

一刀「うーん、動けない!？」

ズッシリ!

一刀の体は三人に申し掛かられていた。

愛紗「まったくもう一刀殿らしいというか」

いつもの愛紗なら一刀を殴っているところだがそれをしないのには数日前に原因があった。

数日前

一刀が呉の国を飛び出してすぐのこと

愛紗「どうして呉の国に残らなかったのですか？あのままいれば一刀殿は呉の国王になれたかもしれないのに、それにあなたの大好き
な巨乳もあるでしょう」

と愛紗が一刀に聞くと

一刀「そんなの決まってるだろ！国王なんかでいるよりも俺は愛紗と旅がしたかったからさ」

愛紗「（ドキンッ！／＼／）」

鈴々「お兄ちゃん、鈴々は？」

朱里「はわわ！？私は？」

伽留「私は？」

一刀「もちろんみんなとも旅をしたかったからさ」

だが内心一刀は巨乳は惜しかったな〜と考えてるのだった。

愛紗「（私はどうしたというのだ！？旅をするのは当たり前のはずなのに一刀殿に言われると何故か顔が赤く！？／＼／＼）」

今まで恋をしたことがない愛紗はこれが恋心だとわからなかった。

ということがあったのだ。

愛紗「さて、まだみんな寝ているし私も寝るとするか」

愛紗が再び寝ようとする

わあーっ！ わあーっ！

急に外が騒がしくなってきた。

愛紗「何事だ？」

スッ

愛紗が外の様子を見ようと出ようとする

わあーっ！ わあーっ！

外では戦いが繰り広げられていた。

愛紗「こうしてはおれん！」

サッ

愛紗は急いで穴の中に戻ると

愛紗「一刀殿、起きてください！」

ユサユサッ！

一刀を起こすべく揺さぶるが

一刀「うーん、愛紗くみんなの前でなんて格好するんだよ」

と寝言を言った瞬間

ゴチンッ！！ ミ

愛紗に殴られて一刀は気絶してしまった。

愛紗「孔明（真名を朱里）殿、起きてください！」

愛紗は次に真面目な朱里を起こそうとすると

朱里「うーん、もう朝ですか？」

愛紗「寝ぼけてる場合ではない！外で戦いが繰り広げられているのだ！私は行くから鈴々を起こしてくれ！」

愛紗が言うと

朱里「はわわ！？わかりました！」

ダッ！

そして愛紗は偃月刀を片手に持ち、外に飛び出していった。

愛紗「（片方の鎧は義勇軍のものでもう片方は賊の鎧か）」

愛紗が現場を見ていると

賊「死ねやーっ！」

ブオンツ！！

賊の一人が愛紗に剣を降り下ろした。

だが

ガキンツ！

賊「なっ！？」

愛紗は賊の一撃を受け止めると

愛紗「私を甘く見るな！」

ズバツ！

賊「ギヤーツ！？」

逆に賊を切りつけた。

愛紗「我が名は関羽！黒髪の子山賊狩りだ！」

ババンッ！

愛紗が名乗りをあげると

賊達『嘘つけ！黒髪の子盗りものはものすごい美人だと聞いたぞ！』

ズコッ！

賊達に突っ込まれた。

愛紗「ええいつ！もうどうでもよい！ともかく齒向かつ者は偃月刀の餌食になるがよい！」

ダダッ！

愛紗はそう言って賊の中心に走っていった。

愛紗「ハアッ！」

ズバズバッ！

賊達『ぐわーっ！？』

愛紗が偃月刀を振るう度に吹き飛ばされていく賊達

さらに

鈴々「おりゃおりゃーっ！」

ドカカッ！

朱里に起こされた鈴々も愛紗と共に戦うため参上した。

愛紗「ではいくぞ鈴々！」

鈴々「悪いやつは成敗するのだ！」

ジャキンッ！

武器を構えて背中合わせに立つ二人

だが一刀はというと

一刀「ふがーっ！」

まだ寝ていた。

朱里「はわわ！？起きてください一刀しゃん！？」

朱里は一刀を揺さぶるがなかなか一刀は起きない。

そんなとき

賊「おいっ！穴の中に誰かいるぞ！」

ダダッ！

朱里「はわわっ！？」

ついに賊が穴の中に入ってきてしまった。

賊「ちび一人（朱里）に巨乳一人（伽留）と男か、八つ裂きにしてやるぜ！」

ジャキンッ！

賊達は一斉に武器を取り出す。

朱里「はわわ〜！？」

伽留「んっ？朝なの？」

賊達『くたばりやがれー！』

ザザッ！

賊達は一斉に向かってくるが

ピタリっ

急に進むのをやめて立ち止まった。

朱里「えっ！？」

伽留「何で襲ってこないの？」

二人が不思議に思っていると

賊「（何だよこれは！？あの寝ている男を見た途端足が動かなくなっちゃまった！？）」

ゴゴゴッ…!!

賊達は動かないのではない動きたくても動いたら男（一刀）に殺されると感じているのだ。

一刀「ZZZZ」

ガタガタッ!?

賊達は一斉に震えだすと

賊「ガキくらい見逃してやるよ!？」

ダダッ!

一斉に洞穴から逃げていった。

朱里「どうしたんでしょう？」

伽留「あたしにびびったのかな？」

二人はまったく一刀から出された覇気に気づかなかったという。

そして外で戦っていた愛紗と鈴々は

賊達「退却!？」

ブッブッブッ…!!

賊達は愛紗と鈴々の強さには敵わないと感じて逃げていった。

鈴々「あと少しで壊滅できたのになのだ！」

愛紗「歯応えのない賊であったな」

逃げ去る賊を見ていると

パチパチッ

二人の後ろから拍手の音が聞こえてきた。

？「助けられてありがとうございます」

くるっ

愛紗「別に礼を言われることでは…」

愛紗が振り向いて言おうとすると

愛紗「!?!」

愛紗は驚いた。何故ならその男の顔が

バアンッ!

賊に殺された愛紗の兄にそっくりだったのだ。

？「どうしましたか？」

しかも声までそっくりだった。

鈴々「愛紗、どうしたのだ？」

愛紗「ハッ！？」

ようやく鈴々の声で正気に戻る愛紗だった。

愛紗「（兄上に似ているだけで私の心が揺れ動くとはな！？）」

愛紗が感じていると

？「私はこの先にある桃花村で義勇軍隊長をしているり…」

男が最後まで言おうとすると

朱里「皆さん大丈夫ですか！？」

ずりずり

朱里と伽留が未だ寝ている一刀を引っ張ってやってきた。

一刀「ぐおーっ！」

鈴々「お兄ちゃんまだ寝てるのだ」

伽留「いくら叩き起こしても起きないから大変よ！？」

愛紗「まったくもう！我々が大変なときに！」

アハハッ！

愛紗達が騒いでいると

？「あのう……」

男が話しかけてきた。

愛紗「！？失礼したな別に忘れていたわけでは！？」

今のは完全に忘れていた。

？「構いませんよ、それより見たところあなた達は強いと感じます。庄屋（村長）に紹介したいので一緒に桃花村に来てくれませんか？」

男が言うと

愛紗「では行きましょう」

鈴々「久しぶりに暖かい布団で寝られるのだ」

朱里「旅の疲れも癒せますしね」

伽留「美味しいもの」

一刀「ぐおーっ！」

一刀達一行は桃花村に立ち寄ることになった。

その途中

鈴々「そういえばまだおじちゃんの名前を聞いていなかったのだ」

？「おじちゃん！？」

どう見ても一刀より少し年上の外見でおじちゃん呼ばわりは痛い！

愛紗「こら鈴々！お兄ちゃんだろう！」

愛紗が注意すると

鈴々「ダメなのだ！鈴々のお兄ちゃんはお兄ちゃん（一刀）だけなのだ！」

男をどうしてもお兄ちゃんと呼ぶことに反対な鈴々

？「まあ小さな子が言ったことですから気にしてませんよ」

ホントは気にしまくっていた。

？「確かに私の名前をいっていませんでしたね、私の名前は…」

劉備「劉備玄德と申します」

「桃花村の義勇軍」

劉備「私の名は劉備玄德です」

劉備玄德。三国志を知ってる人もそうでない人も名前くらいは知っている人物。

何故なら劉備は関羽と張飛と義兄弟の契りを結び、三度孔明の所に行って孔明を仲間にした人物で蜀の国の王である。

劉備の案内で一刀達は桃花村にやって来た。

桃花村・庄屋の屋敷

庄屋「いやーっ、劉備殿がこの村に来てからというものこの村に攻めてくる賊の数が減りましてなあ劉備殿には感謝しています」

劉備「とんでもないですよ庄屋さん、私は困っている人を見過ごせないだけですよ（ニコッ）」

劉備が笑顔でにっこりすると

愛紗「（ドキンッ！／＼／）」

鈴々「何で愛紗の顔が赤くなるのだ？」

愛紗「えっ！？別になにも!?」

愛紗はすごく動揺していた。

それというのも劉備の顔が愛紗の兄とそっくりだったことが原因である。(愛紗はブラコンであった。)

劉備「しかし最近是我々義勇軍が何とか食い止めているものの賊の勢いが強まってきていてな。どうですかあなた達さえよければ我が義勇軍に加わってくれませんか？」

劉備が聞くと

愛紗「正義のためですからね」

鈴々「悪いやつは倒すのだ！」

朱里「軍略は任せてください！」

伽留「料理なら任せてよ！」

義勇軍への参加を決めた愛紗達

だが一刀はというと

一刀「ぐおーっ！」

未だに寝続けていた。

そしてその日の夜

愛紗「ハア」

愛紗はため息を吐いていた。

愛紗「いくら兄上に似ているとはいえ劉備殿のことを思うとは武人として情けない」

スッ

今、愛紗の頭の中は劉備のことを考えていたが

スッ

すぐに一刀の顔へと変わった。

愛紗「！？いかんいかん！なぜ一刀殿のことを考えてしまうのだ！？」

ブンブンッ！

愛紗が必死に頭を振っていると

劉備「関羽殿、どうされました？」

劉備が通りかかった。

愛紗「劉備殿！？いや別に何も！？」

愛紗は誤魔化そうとするが人目見ればバレバレである。

だが劉備は

スッ

愛紗に近寄ると

劉備「顔が赤い関羽殿は素敵だな」

愛紗「えっ!?!?!」

キザな台詞を言われて思わず顔が赤くなる愛紗

劉備「今宵の月は美しいが関羽殿の前ではその輝きは無に等しい」

愛紗「なっ…何を言うのです冗談はお止めください!?!?!」

武人として生きていた愛紗にとって初めて聞く言葉に愛紗が照れていると

劉備「冗談ではない!私は一目見たときからあなたのことが好きになりました。噂に高い美人、煌めく黒髪、どれをとってもあなたは美しい!あなたさえよければ是非とも我が妻になってもらいたい」

ギョッ!

愛紗「えっ!?!」

劉備は愛紗の手を握り益々顔が赤くなる愛紗

そして愛紗のとった行動は!?

愛紗「いやーっ！／／／」

ドンッ！！ ドカッ！

劉備「ぐほっ！？」

愛紗は劉備を突き飛ばすと

愛紗「申し訳ない！／／／」

ダダーッ！

その場から直ぐ様逃げ出した。

劉備「ふっ！照れるなんてかわいいお人だな」

それから数日が経ち

愛紗「でえいつ！」

ドカッ！

鈴々「うりゃりゃーっ！」

ドカッ！

賊達「ぐわーっ！？」

バタバタッ！

愛紗達が加わった義勇軍はもはや敵なしの状態だった。

鈴々「今日も完勝なのだ」

愛紗「最近の賊は手応えが無さすぎだな」

朱里「皆さんが頑張っているからですよ」

賊の討伐の帰り道

鈴々「うにゃっ!？」

愛紗「どうした鈴々？」

鈴々「あっちの方になにか気配を感じるのだ」

ガササッ!

鈴々が気配のする茂みの中に入っていくと

鈴々「あっ!？」

翠「うん…」

バンツ!

そこにいたのは頭に大きなキノコを生やした馬超（真名を翠）が木にもたれていた。

愛紗「こいつは馬超殿!？」

鈴々「頭に大きなキノコが生えているのだ!？」

愛紗と鈴々がキノコに夢中になっていると

朱里「これってマンダラタケ（架空の毒キノコ）です!？食べると頭からキノコが生えて食べた人の栄養を吸い取るんですよ!？」

朱里に言われて翠を桃花村に連れていくことにした。

桃花村

翠「（バクバクッ!）」

朱里の治療によりキノコが取れた翠は飯をガツガツ食べ始めた。

ガチャーンッ!

翠「ごっそさん!味はともかく腹はふくれたぜありがとよ!」

愛紗「馬超殿は相変わらずのようだな」

鈴々「前会った時と全然変わってないのだ」

翠「うるせえな!そっちは新しい顔がいるようだけどな」

スッ

翠は初対面である朱里と伽留を見つめる。

朱里「はわわ！？私は諸葛亮孔明でしゅ！？」

伽留「私は高蘭よ、よろしくね」

翠「あたしは馬超孟起だ。よろしくな！」

翠が朱里達と挨拶していると

劉備「どうやらあなたは関羽殿達の仲間の方ですね」

そこに劉備が現れた。

翠「あれっ？北郷、なんか雰囲気変わったか？」

劉備を初めて見る翠は劉備を一刀と間違えた。

鈴々「このおじちゃん（劉備）はお兄ちゃん（一刀）じゃないのだ！」

愛紗「鈴々！お前はまた劉備殿をおじちゃんなどと、せめて劉備お兄ちゃんと言え！」

劉備「まあまあ関羽殿、私は気にしていませんから」

ホントはすごく気にしていた。

翠「そういえば北郷はどこにいるんだよ？」

翠が聞いてくると

朱里「それが今眠ってしまして」

「刀はあれからまだ眠り続けていた。」

翠「だらしがないなあ、あたしが起こしてやるよ！」

スッ

翠が立ち上がるうたとすると

劉備「まあまあ北郷殿も長旅で疲れがたまっているのでしょう、そつとしてあげなさい。それよりも馬超殿も我が義勇軍に加わってくれませんか？」

翠の答えは

翠「まあ飯をごちそうになったし、仲間になってやるよ！」

ババンツ！

義勇軍に新しく翠が加わった。

そしてその日の夜

愛紗「まったくもう一刀殿はいつまで寝ているというのだ！」

愛紗が一刀を起こしに一刀の部屋に向かっていると

劉備「おや関羽殿」

偶然劉備と出会った。

劉備「北郷殿を起こしに行くのならやめておきなさい。さっき私が起こしに行ったのですがまだ眠ってますよ」

愛紗「起こしに行ったのですか！？すみません劉備殿に余計なことをさせてしまって」

ペこりっ

愛紗が劉備に頭を下げると

劉備「構いませんよ。それより夜の散歩に付き合ってくれませんか？」

愛紗「わかりました。お供させていただきます」

スッ

愛紗は一刀をほっておいて劉備との散歩に出掛けた。

劉備「(あんな男を起こしに行くわけがないだろう。全てはあなたと散歩したいだけの嘘さ)」

と劉備は心の中で思っていた。

庄屋の屋敷

翠「ううっ！？水飲み過ぎちまったぜ早くかわや・トイレ厠に行かないと漏れちまうぜ」

タタタッ！

翠が廁に向かつて急いでいると

翠「んっ！あれは関羽と劉備じゃないか」

偶然散歩をしている愛紗と劉備を見かけた。

劉備「関羽殿、北郷殿のことは忘れなさい！あんな寝ているだけの男は必ずあなたを不幸にしますよ！」

愛紗「でも……」

劉備の言葉にたじろぐ愛紗

劉備「その点、私のように顔もよし！統率力もある私ならば必ず関羽殿を幸せにする自信がある！どうか私の妻になってもらいたい！」

劉備の二度目の必死のプロポーズに愛紗は

愛紗「今は村を守る方が大事ですから少し考えさせてください！／／」

ダッ！

愛紗は顔を赤くしながら走り去っていった。

翠「いい展開じゃなかあの二人！おっと、早くしないと漏れちまうぜ！？」

ダダッ！

そして翠が厠に向かった後

劉備「関羽殿、私はあなたが欲しい！私は欲しいものは必ず手に入れますよ」

と言ったのであった。

そして翠が義勇軍に加わってからさらに三日が経った。

この三日の間も一刀はぐっすり眠っていた。（ただし何故か御飯は食べていた。）

もちろんほっておくわけにもいかないので殴ったり、水をかけたりしたが一刀は起きなかった。

そして桃花村では

鈴々「へくちっ！」

愛紗「まったくもう！寝苦しいからといって頭から水を被れば風邪を引くのは当たり前だ！」

鈴々は風邪を引いてしまった。

そんなとき

ガチャンッ！

劉備「皆さん聞いてください！」

突然劉備が大広間に入ってきた。

劉備「最近活躍中の我らの名を聞いて何進將軍からお声がかかりましたよ！」

何進將軍は大陸でも有名な人物であり曹操（真名を華琳）よりも位の高い人物なのだ。

劉備「送られてきた手紙によると、『連合軍を倒すために協力を求む』だそうです。何進將軍に目をつけられるなんて今まで頑張ってきた甲斐がありました！もちろん我が軍は参加することにしますがどなたか来てくれませんか？」

劉備が聞くと

翠「あたしはついていってもいいぜ」

愛紗「私もついていきたいのだが…」

ちらっ

愛紗が鈴々を心配そうに見ると

劉備「大丈夫ですよ！張飛殿だって子供じゃあるまいし、もし賊が攻めてきたとしても孔明殿が張った罫で簡単には攻めてこない！」

愛紗「しかし…」

それでも鈴々を心配する愛紗

朱里「大丈夫ですよ。私がついていますし鈴々ちゃんの看病と一乃さんの世話は任せてください」

伽留「私も残るしね」

二人がそこまで言うのでさすがの愛紗も納得した。

そして出陣の時

愛紗「それでは孔明殿、高蘭殿、鈴々のことを頼みました」

朱里「任せてください！」

劉備は愛紗と翠と義勇軍の兵士をすべて引き連れて何進將軍の元に向かった。

だが

賊「あれは義勇軍の奴らだな。どこかに出掛けるならまたとない機会だぜ！お頭達に知らせないとな」

義勇軍が出掛けるところを一人の賊に見つかってしまった。

そしてその頃、一刀はというと

「一刀、ぐおーっ！」

未だに部屋で眠っていた。

「桃花村の義勇軍」(後書き)

愛紗達が不在の時に迫り来る危機！果たしてどうなるのだろうか！

「目覚めよ一刀！」

愛紗と翠が劉備に連れられて桃花村を出掛けてから数時間後

桃花村・庄屋の屋敷

朱里「一刀さ〜ん！いい加減に起きてくださいよ〜！」

ゆさゆっさ

朱里は未だ寝ている一刀を起こすため揺さぶるが

一刀「ぐおーっ！」

一刀は全然起きる気配がなかった。

朱里「こうなったら最後の手段として鼻をつまむしか！」

寝ている人の鼻をつまむと息ができないため人を起こすことができるのだ。（マネしないでください）

スッ！

そして朱里が一刀の鼻をつまむべく手を伸ばそうとすると

ガチャンッ！

伽留「大変だよ孔明（朱里）！？」

いきなり高蘭（真名を伽留牙、通称伽留キヤル）が部屋の中に入ってきた。

朱里「はわわ！？どうしたんですか高蘭さん！？」

朱里が聞くと

伽留「見張り台からの報告で賊の大群がこの村に攻めてくるらしいよ！？」

朱里「はわわ！？」

愛紗と翠はいなく、鈴々は風邪で寝込み、戦えるのが弓を使う伽留と数人の村人だけという厳しい状況であった。

朱里「とりあえず弓隊の皆さんは矢を放って賊が来るのを少しでも遅らせるようにしてください！それと誰か伝令を関羽さん達の所へ、その間に私は何とか策を考えてみます！」

伽留「わかった」

ダダッ！

朱里の話聞いた伽留は直ぐ様駆け出していった。

朱里「（関羽さん、早く帰ってきてください！）」

桃花村が危機に陥る数時間前、愛紗達が向かった先では

劉備「何進將軍、桃花村義勇軍隊長劉備玄德、お呼ばれにつき参上しました」

スッ

劉備が何進將軍に対して頭を下げる

何進「堅苦しい挨拶は別によい、他のものもすでに来ておるから入るがよい」

何進將軍…大陸の中でもすごい権力をもつ人物であり曹操（真名を華琳）よりも高い位の人物。

翠「（この人が何進將軍!?!）」

愛紗「（確かに偉い人だな!?!）」

ゴゴゴッ…!!

愛紗と翠が何進將軍の出す覇氣オーラに驚いていると

華琳「あらっ、関羽に馬超じゃない」

バンッ!

そこには既に華琳達が来ていた。

愛紗「曹操殿!?!」

華琳「へえ、しばらく見ていないと思ったらあなた達劉備に仕えていたのね、それにしても今日はちびっこと男がいよいよっただけどど

うしたの？」

華琳が聞いてくると

翠「張飛と北郷なら今村で休んでるぜ」

華琳「そう」

華琳が言うと

劉備「おやおや関羽殿、曹操殿達とはお知り合いですか？」

ぬっ

横から劉備が会話に入ってきた。

華琳「知り合いも何も関羽とは互いに裸を見せ合った仲だもの」

愛紗「わーっ！わーっ！／＼／＼」

聞き方によっては誤解を招く言葉である。

劉備「それはすごい仲ですね！？」

さすがの劉備も少しばかり退いていた。

そして軍義が始まる。

何進「この先の砦に連合軍がいると聞く、その数はわからんが誰か向かうものはあるか？行けば褒美をたんまりとらせるぞ」

だが軍義に出ていた華琳をはじめとする将達は誰一人として名乗りをあげなかった。

華琳「（冗談じゃないわ！いくら褒美をくれるといっても敵の数がわからないのに出陣するわけないじゃない！）」

他の人達も華琳と同じことを思っていた。

ところが

スツ！

劉備「何進將軍、その役目私にお任せください」

！？

いきなり劉備が手をあげたことにみんなが驚いた。

何進「おおっ、劉備とやら行ってくれるか」

劉備「はいお任せください」

劉備が何進に言つと

華琳「あなた何を考えてるの！敵の数がわからないのに出陣するなんて馬鹿じゃないの！」

華琳は劉備に言つが

劉備「我が軍をあなたのような弱虫の軍と一緒にしないでもらいたい」

華琳「なんですって！」

ジャキンツ！

華琳は死神鎌・絶を手にとって構える。

劉備「おやおやお口では敵わないから武力でやるとはやはり弱虫のすることだ」

華琳「くっ！」

今この場で劉備を切り裂くことなんて華琳には簡単なことだが、もしそれをしたら華琳は弱虫扱いにされてしまう。なので華琳はうかつに斬りかかれなかった。

劉備「皆さんも知つての通り、我が軍には関羽と馬超がいる。この二人の豪傑がいれば連合軍なんて赤子に等しい！私は宣言します。何進將軍に勝利という二文字を差し上げましょう！」

バンツ！

劉備が言うと

何進「あっぱれじゃ劉備殿、連合軍を撃破したらお主に莫大な富（財産）を差し上げよう！」

劉備「ありがたきお言葉ありがとうございます！」

そして劉備軍天幕

翠「曹操の言う通りだよこの馬鹿！」

軍義での話をした劉備は翠に怒られた。

愛紗「止めないか马超殿、劉備殿だって連合軍を倒したい一心で決めたことだ！」

劉備「そ…そうだと…？」

もちろん劉備の狙いは別にある。それはやはり褒美が欲しいためだけである。

翠「関羽！あんたおかしいぜ、何故こんなやつに肩入れするんだ！こいつのことが好きなのかよ！」

愛紗「なっ！？／＼それは関係なかるう！」

口喧嘩をしだす愛紗と翠

とそこへ

兵士「ご報告があります」

一人の兵士が天幕に入ってきた。

劉備「何があつた？」

劉備が兵士に聞くと

兵士「桃花村が賊の襲撃にあい、至急帰還するようにと！」

愛紗・翠「!?!」

さっきまで口喧嘩していたはずの二人が兵士の話を聞いて驚いた。

だが劉備は

劉備「帰還する必要はない！」

バンツ!

劉備が言い切ると

愛紗「何を言うのですか!?!村には鈴々、孔明、高蘭、一刀殿や村人達がいるのですよ！」

愛紗は必死で劉備にいうが

劉備「だからどうしたというのだ?我々が今すべきことは連合軍を壊滅させることだ。そのためには村の一つや二つ犠牲にならないとね」

劉備が言つと

翠「!?!この野郎!」

ブオンッ！！

翠は劉備に拳を繰り出すが

愛紗「馬超殿、やめろっ！」

ピタッ！

翠の拳はもう少しで劉備に当たる直前に止められた。

劉備「さすがは関羽殿、私を助けてくださるとは…」

そして劉備が愛紗に近づくと

グイッ！！

愛紗は劉備の胸ぐらをつかんだ。

ギロリッ！！

愛紗は劉備を睨み付ける。

劉備「何だその目は！？私を殴ったら反逆罪で逮捕するぞ！？」

だが愛紗は

パッ ドスンッ！

劉備の胸ぐらから手を離すと

愛紗「あなたには殴る価値もありません。私が殴る人は信頼する人物すなわち北郷一刀殿だけだ！」

バンツ！

愛紗は劉備に言い切ると

愛紗「失礼する！」

スッ！

そのまま立ち去っていった。

翠「関羽が帰るならあたしも帰らせてもらっぜ」

スッ！

そして翠も立ち去るのだった。

一人残された劉備は

劉備「・・・！？」

魂が抜けたように呆然とするしかなかった。

その少し前、桃花村では

シュシュンツ！

賊「ぐはっ!？」

伽留率いる弓隊が何とか賊の進行を遅らせていた。

賊「怯むな!盾で防げば弓なんて怖くない!」

カカカンッ!

だが賊達は盾で弓を防いで進行してくる。

伽留「くっそー!あいつら盾使うなんて卑怯じゃん!」

これも戦略といえよう

伽留「(こうなったら仕方がない)」

スッ　パンッ!

伽留は弓を置いて手を合わせると

伽留「水よ、我に力を!」

伽留が言った瞬間

ブシューッ!!

桃花村の近くの川が勢いよく噴射し

賊達『ぐわーっ!?!』

ドドドッ！

賊達を一気に流した。

実は伽留には水を操る力があるのだ。

伽留「（いけないっ！これ以上水を使ったら川の水がなくなってしまっ！？）」

シュンッ

伽留は川の水がなくなってしまっを防ぐため操るのをやめた。

賊「おっ！水がおさまったようだぞ、それ進軍だ！」

だが水がおさまったのをチャンスとみた賊がさらに進軍をしてきた。

伽留「あーもっ！早く帰ってきてよ関羽！」

その頃、庄屋の屋敷では

ヨロヨロッ

鈴々「愛紗がない分鈴々が頑張るのだ！ゴホッ！」

鈴々が風邪で倒れている体に鞭を打って歩いていると

朱里「はわわ！？一刀さぐんいい加減に起きてくださいよ！」

ゆさゆっさー！

必死で一刀を起こす朱里を見かけた。

朱里「こうなったらホントに鼻をつまみますよ！」

スッ

朱里が一刀の鼻をつまむべく手を伸ばしたその時

鈴々「何するのだ朱里？」

後ろからいきなり鈴々の声が聞こえてきて

朱里「はわわ！？」

ずるっ！ ドシンッ！

驚いた朱里は一刀の服をめくりながら倒れてしまった。

朱里「もう鈴々ちゃん！いきなり驚かさないでくださいよ！」

鈴々「ごめんなのだ。ってあれ？お兄ちゃんのお腹に何かくっついてるのだ」

スッ

鈴々は一刀の腹を指差すと

朱里「はわわ！？これは！？」

ババーンッ！

一刀の腹の上に一枚の葉っぱがあった。

朱里「この葉っぱは麻酔草（架空の植物）ですよ！？」

麻酔草：体のどこにでも張り付けるだけで眠らせる草。張り付いている間は剥がさない限り何をしても絶対に起きないし、張られた人も起きることができない。一種の麻酔薬だが今では滅多に手に入らない貴重種である。

鈴々「つまりこの葉っぱを剥がせばお兄ちゃんは目を覚ますのか？」

「

鈴々が朱里に聞いてくると

朱里「そのはずですよ！きつと洞穴で一夜を過ごした時に偶然一刀さんのお腹に張り付いたんでしょうね」

「

ベリッ！

そして朱里は勢いよく葉を剥がした。

ドクンッ！

その直後！？

桃花村・入り口

賊「さあて、とうとう村に到着だぜ！」

伽留の頑張りもむなしく賊達は村の入り口に到着してしまった。

賊「よしっ！侵入だ」

ピタッ！

そして賊が門に触れた瞬間

ドッカーンッ！！

賊達『ぐわーっ！？』

いきなり賊達がぶっ飛ばされた。何故ならば

一刀「寝起きの運動にはちょうどいいな」

バンッ！

門には一刀が立ち塞いでいたからだ。

一刀「さあ！賊共、来るなら来いや！」

気合いを入れる一刀

そしてその頃、

紫苑「あのう、桃花村はどちらでしょうか？」

男「桃花村ならあっちだよ。それにしてもあんたみたいな子連れのは

べっぴんさんがあの村に何か用か？」

男の質問に紫苑は

紫苑「嫌ですわべっぴんさんだなんて／＼前にお世話になった人がいるんです。さあ、行くわよ璃々」

璃々「うんっ！お母さん」

桃花村に向かう紫苑親子

星「ふふっ、皆に会うのも久しぶりだな」

同じく桃花村に向かう星

愛紗「待ってるよ鈴々！」

パカパカッ！

馬を急がせる愛紗と翠

今、豪傑のみんなが桃花村に急ごうとしていた。

「桃花村攻防戦」

愛紗達が留守の間に賊の集団が桃花村に攻めてきた。

迎え撃つ朱里と伽留だが二人だけで守れるはずがない絶体絶命の危機に陥るなか数日ぶりに一刀が目を覚ましたのだった。

そして愛紗と翠も劉備の元から立ち去り急いで桃花村に向かっていった。

ドカカーッ!!

賊達「ぐわーっ!?!」

村の入り口では賊の大軍が一刀一人にやられていた。

一刀「(どうやら寝ている間に大変なことが起きていたらしいな、でも)この村には賊を一人たりとも入れないぜ!」

バンッ!

いつになく強気な一刀だった。

賊「くそっ!なんて強い奴だ!?!」

賊「こうなったら立ち去るしかないぜ!?!」

ダダッ!

一人、また一人と賊が一刀を恐れて次々と逃げていく、

その時

？「びびってるんじゃないよ！」

ドオンッ！

一人の賊の声が賊の大軍に響き渡った。

賊「あの人は『破壊僧』の異名を名乗る煌龍様だ！？」

煌龍という金色の龍の鎧を身に纏った大男は他の賊とは違いすごい気を纏っていた。

煌龍「小僧、他の奴の目は誤魔化せても俺の目は誤魔化せん、貴様は気の使い手だな」

「一刀」ということはあんたもかよ」

実は今まで一刀が大岩を持ち上げたり、遠くまで飛べた理由は気を纏っていたからである。

煌龍「今までは何とかなったかもしれんが」

スッ

煌龍は首に巻いていた12個の宝玉を一刀に向けると

煌龍「この俺に出会ったことを不運だと思いな！」

シュシュンッ！

いきなり宝玉が勝手に飛んで一刀に襲いかかってきた。

もちろんこれも気を使うものだからこそ使える技である。

一刀「ちっ！？」

サッ！

一刀は宝玉を避けようとするが

くくいつ！

宝玉には追尾機能がついているのだろうか一刀が逃げても追ってきた。

そして

めりっ！

一刀「ぐほっ！？」

宝玉は全弾一刀に命中して一刀の体にめり込んだ。

煌龍「どうだ俺の『龍玉撃破弾』の威力は？今ので数本骨が折れたようだな」

いくら一刀が頑丈とはいえさすがに今のは煌龍の言う通り肋骨が数

本折れてしまったようだ。

だが普通の人が食らえば宝玉が体を貫く威力であり骨折程度でいられただけでもまだましだといえよう

「一刀「うっ!？」」

ガクッ

おもわず膝をつく一刀

煌龍「命拾いしたな貴様、普通ならば宝玉が貫いたものの骨折程度ですむとはな、だがしばらくは動けまい。テメエら、今のうちに村を攻めるぞ！」

賊達「おおーっ!」

賊達はもはや煌龍が頭領のような組織になっており門を通ろうとすると

ガシッ!!

煌龍「んっ?」

倒れていたはずの一刀が最初に村に入ろうとした煌龍の足をつかんだ。

「一刀「ここから先には死んでも行かさねえよ!」」

煌龍「ふんっ!その心意気は買ってやるが…」」

スッ

煌龍が一刀の上に足をあげると

煌龍「いい加減つるせえんだよ！」

ブオンツ！！

ドガツ！！

一刀「ぐほっ！？」

一刀の体をおもいつきり踏みつけた。

煌龍「そんなに死にたいならさっさと殺してやるぜ！」

ジャラッ

煌龍「『龍玉撃破弾』！」

シュシュンツ！！

煌龍は一刀にとどめをさすべく再び技を一刀に仕掛けてきた。

すくっ！

だが一刀はボロボロの体で立ち上がると

一刀「まさか久しぶりにこの技を使うことになるとはな！」

スッ！

一刀は木刀を構えると

ゴゴゴツ…！！

木刀に気を流し込んだ。

煌龍「何だよこの気は！？俺よりもでかいじゃねえか！？このボロボロの小僧のどこにそんな力が！？」

気の量は体の大きさだけでは分からないもの、体が大きくても気が少ない人もいれば、その逆もありえるのだ。

だが気は強者でしかわからないので

賊「煌龍さん一体どうしたんだ？」

賊「あの小僧もさっきから動かないでしょう」

気を知らないものはある意味幸せかもしれない。

ジャキンッ！

一刀「『俄龍…』」

一刀は木刀を構えると

一刀「『スーシンダン四神弾』！」

ドゴオッ!!

一刀の木刀から気でできた四頭の龍が飛び出してきた。

ズババーッ!!

賊「何だよこれは!？」

賊「あの小僧が木刀を振るった瞬間、あっちにいた仲間が切られていく!？」

力のないものは何が起きたのかもわからずに切られていくのだった。

バキバキンッ!!

煌龍「俺の宝玉が!？」

そして煌龍の宝玉も一刀の攻撃に打ち砕かれてしまい

ドガガガガッ!!

煌龍「ぐおーっ!？」

一刀の出した龍の気は煌龍を攻撃していった。

これが一刀が恋との戦いですら出さなかった本気のである。ならば何故今まで使わなかったのかというところ

ピキッ! バキンッ!!

一刀の気の力が強すぎて木刀が耐えきれないためである。

一刀「ちっ！木刀が砕けちまった」

バタンツ！

一刀の木刀は砕けてしまったが煌龍を倒すことができた。だが

賊「あんな疲れきった小僧ならば俺達でも倒せるぜ！」

賊「くたばっちまえ！」

賊達は一刀が疲れきった隙を狙って一斉に襲いかかってきた。

一刀「くそっ！力を使いすぎた!？」

これが一刀が普段から本気を出さないもうひとつの理由、今の一刀でも気の量を調整するのが難しいのだ。

一刀「行かすわけにはいかないぜ！」

バツ！

だが一刀はボロボロの体でありながらも賊の進行を食い止めるべく立ちふさがるが

賊「邪魔なんだよお前！」

賊「疲れきったお前なんて怖くないんだよ！」

ドカカッ！！

賊達は疲れきった一刀に攻撃を仕掛けまくる。

賊「とどめだ！くたばりな！」

ブオンツ！！

賊の一人が一刀にとどめをさすべく斧を振り上げたその時！

ズバンツ！ ドサツ！

斧を振り上げた賊の斧が地面に落ちた。

賊「へっ？」

賊が不思議そうにして手を見ると握っているのは斧の柄のみであり刃先は切り落とされていた。

そして賊達が後ろを向いてみると

バンツ！

愛紗「我が名は関羽、黒髪の子山賊狩りだ！」

翠「あたしは西涼の馬超でい！」

そこにはようやくたどり着いた愛紗と翠がいた。

翠「おいっ！あそこにいるのは北郷じゃないのか！？」

翠が門の前で倒れている一刀を発見すると

愛紗「（遅かったか）貴様ら、よくも一刀殿を！生きてここから帰れると思つなよ！」

ドオンッ！！

賊達『ひいつ！？』

愛紗のただならない殺気にびびる賊達

賊「なあに、相手はたかが二人、こっちはまだ百人はいるんだぜ！

数の多さに強気になる賊だが

？「ならば三人ではどうか？」

賊達『！？』

愛紗「お前は星！」

賊達は星の気配に全く気付いてなかった。

賊「だがたかが三人……」

この状況でも諦めない賊がいたが

ヒュンツ！ ザクツ！

それを言った賊は矢に刺された。

そして矢が放たれた方向を愛紗達が見てみると

紫苑「四人ですわ」

璃々「違つよお母さん、璃々もいるから五人だよ」

バンツ！

そこには紫苑と娘の璃々ちゃんがいた。

愛紗「黄忠殿まで来てくれたのか！？」

紫苑「今こそ璃々を助けてくれた恩返しに来ましたわ」

賊「くそっ！まだ…」

それでも諦めきれない賊だが

バァーンツ！

急に門が内側から開かれるとそこにいたのは

村人「北郷さんがあんなにボロボロになっても戦っているのになんか隠れてなんかいられるか！」

村人「俺達の村は俺達を守るんだ！」

ババンッ！

武装した村人達およそ二百人が出てきた。

これで戦況は百人VS二百人と逆転してしまい

賊達『くっそー！覚えとけよー！』

ダダダッ！

残った賊達は逃げるしかなかった。

そして

愛紗「大丈夫ですか一刀殿！？」

ダッ！

愛紗はボロボロにされた一刀に肩を貸して立たせようとする。

一刀「愛紗…みんな…、俺が寝ている間に迷惑かけちゃったな」

愛紗「我々は別に迷惑だなんて思っていません」

愛紗が言うと

鈴々「その通りなのだお兄ちゃん」

朱里「眠っていたのは麻醉草が原因なわけですし」

伽留「一刀が気にすることないって」

いつのまにか村にいた鈴々達がやってきて一刀を慰めた。

一刀「みんな、ありが…」

一刀が最後まで言おうとすると

劉備「皆さん、探しましたよ」

ぼろ〜ん

そこにボロボロの姿になった劉備が現れた。

劉備「関羽殿達が勝手に出ていったせいで我が軍は進軍できずで私は何進將軍から重いお仕置きを受けたのですよ！こつなつたら関羽殿と馬超殿には責任として自害して…」

劉備が最後まで言おうとすると

一刀「あんたがあのお有名な劉備か、はっきり見るのは初めてだったな。握手してもらえるか？」

スッ

一刀は劉備に握手を求めた。

劉備「ほう、私の名を知ってるなんて私も有名になったものだな」

スッ

そして劉備が一刀と握手しようとして手を差し出すと

ぐっ！

劉備「えっ？」

一刀の手はパーからグーに変わり

ドグボツ！！

劉備「ぐぼべっ！？」

おもいつきり劉備の顔をぶん殴った。

ドシンッ！！

そして三回ほど錐揉み（きりもみ）回転して劉備が落ちてくると

一刀「今のは俺の仲間を苦しめた分だ。それくらいで勘弁してやるからつせろっ！」

ゴゴゴッ…！！

今、一刀はものすごい覇気を劉備に当てていた。

その結果

じよろろっ

劉備「あああ！？かか様怖いよっ！」

劉備はあまりの一刀の恐ろしさに失禁して泣きながら逃げていった。

鈴々「ニヤハハッ！大人なのにお漏らしなんてサイテーなのだ」

翠「うっ！？」

翠には少し痛い言葉である。

愛紗「それにしても一刀殿、私の分まで劉備を殴ってくれてありがとうございました」

一刀「別に構わない…よ」

ヨロッ

気をほとんど使いすぎると力が抜けて眠ってしまうのが気の使い手の特徴だった。

そして一刀が倒れた先は

ぽよんっ

愛紗の胸の中だった。

そしてそのまま一刀は寝てしまった。

星「おっ！久しぶりに『何してるんですかー！』が見られるのか
」

だが星の考えとは裏腹に

愛紗「疲れたでしょう。ぐっすりお休みください」

ぎゅっ

いつもなら突き飛ばす愛紗だが今回は逆に抱き締めた。

このまま終わればよかったのだが

「刀「うゝん愛紗」

「刀の寝言ですべてが崩れる。

「刀「みんなの前で裸で抱きついちゃダメじゃないか」

カチンッ！

愛紗「なんて夢を見てるんですかー！／＼」

ゴツチンッ！！

「刀「いつてー！？」

今回の一刀の最大ダメージは愛紗の拳骨だったという。

「桃花村攻防戦」(後書き)

次回は番外編としてOVAの学園が始まります。

「生徒会長争奪戦前編」(前書き)

今回の話はOVA一巻を元にしていきます。

設定が前までと少し違っているところがありますので注意してください。

「生徒会長争奪戦前編」

ここは聖フランチエスカ学園。

今日この学園に新しい転校生がやって来た。

ダッ！

朱里「目標！人を前にしても上がらない！」

水鏡女学院からの転校生の諸葛亮朱里である。

だが彼女がいざ学園に入ろうとすると

カクンッ！

朱里「はわわ！？」

朱里は躓いて（つまずいて）倒れそうになるが

ガシッ！

倒れそうになつた直前誰かに支えられて助かった。

朱里「あ…ありがとうござい…」

朱里が助けてくれた人にお礼を言おうとすると

「一刀「大丈夫かい？」

パンツ！

今まで女学院で育っていた朱里にとって男を見る機会が少なくしかもその男が少し美形だったのだから

朱里「はわわ〜！？／／／」

バタンツ！

一刀「えっ！？」

朱里は興奮して倒れてしまった。

しばらくして、昼休み

朱里「（ああ、顔を見ただけで倒れるなんて失格でしゅ。それにしてもこの学園に何で男の人がいるのでしょうか？）」

フランチエスカ学園は女子校である。

そのことを朱里が考えながら昼食のパンを買いに購買部にたどり着くと

わらわらっ！！

購買部は人が溢れていた。

朱里「はわわ！？あの人達が買い終わるのを待っていたら昼休みが終わってしまいます！？」

割り込みができない朱里らしい答えである。

そして朱里がどうしようか考えていると

愛紗「そのきみ、どうしたのだ？」

くるっ

朱里が声の聞こえてきた方を向いてみると

愛紗「君は転校生か？」

黒髪のきれいな人がいた。

朱里「あ…あの…」

愛紗「その様子だとどうやら購買のパンを買えなくて困っているらしいな。よし、多く買ってあるから分けてやるう。ついてくるがよい」

グイッ

朱里「えっ!？」

愛紗は朱里の手を引いて中庭に移動した。

中庭

愛紗「二人とも待たせたな」

愛紗が言うつとすでに中庭には

翠「遅いぜ愛紗！」

星「どこにいつていたのだ？」

愛紗の同級生である馬超翠と趙雲星がいた。

愛紗「すまない、ちょっと購買部が混んでいてな、それよりこの子を加えてよいか？」

スッ

愛紗は朱里を前に出すと

朱里「はわわ！？はじめまちて転校生のしょかちゅりょう朱里でしゅ！？」

朱里は緊張して噛みまくっていた。

翠「何だか変わった子だな！？」

星「まあよいではないか。少し変わっている方がからかいがいがない人としてはいいものだ」

絶対からかう気である。

愛紗「ところで鈴々と一刀はどこだ？」

翠「鈴々は掃除当番、一刀ならいつもの場所だぜ」

スッ

そう言うと翠は一本の木を指差した。

愛紗「またあいつはサボりか」

スッ

そして愛紗は木に近づくと

愛紗「一刀、昼食のパンだ！それより授業に出たらどうだ」

愛紗が言うと

一刀「うるさいな、俺はどうせ関係ないから授業に出なくてもいいんだよ」

木に上っていた一刀が話しかけてきた。

朱里「あのう、関羽さんは誰と話してるんですか？」

朱里が星に聞くと

星「あの木に上っているのは学園長が呼び寄せたこの学園でも数少ない男子の北郷一刀であり…」

星「愛紗の婚約者だ」

星が言つと

ずるっ！ ドッシーン！

愛紗はすっころび、一刀は木から落ちた。

愛紗「星、何が婚約者だ勝手にいうでない！／＼／」

一刀「俺と愛紗はただの幼馴染みだから！／＼／」

二人が星に迫ると

星「おや、違ったのか？ てっきりそうかと思って学園中に言つておいたのだがな」

愛紗・一刀『余計なことをいうな〜！！』

ちなみにその話を聞いた数名の生徒が怒つたのは別の話である。

朱里「あれっ？この人どこかで見たような？」

朱里は一刀を見て今朝のことを思い出そうとするが逆光だったため顔がよく見えなかったのだ。

そんなとき

ドドドッ！

遠くの彼方から土煙が上がっているのが見えてくると

鈴々「うりゃりゃーっ！」

遠くの彼方から愛紗の義姉妹である張飛鈴々が現れた。

鈴々「お腹ペコペコなのだ！パンを頂戴なのだ」

スッ

鈴々が手を出してパンを要求すると

愛紗「すまないな鈴々、お前の好物であるアナゴサンドは売り切れだ」

愛紗が鈴々に言った直後

鈴々「えーっ！？」

シヨックを受ける鈴々

愛紗「代わりにウナギサンドを買ってきたから食べるがよい」

スッ

愛紗は鈴々にウナギサンドを差し出すが

鈴々「嫌なのだ！鈴々はアナゴサンドが食べたいのだー！」

じたばたっ

駄々をこねる鈴々に

愛紗「鈴々、文句をいうでない！」

愛紗が強く言うと

鈴々「愛紗がアナゴサンド買ってきてくれないのがいけないのだ！」

反論する鈴々

愛紗「人を買わせておいて文句を言うな！」

鈴々「お姉ちゃんなら妹の好物を買ってくるのが普通なのだ！」

二人の口喧嘩はしだいにエスカレートしていき

鈴々「もう愛紗なんて知らないのだー！」

ダダッ！

鈴々は走り去っていった。

一刀「鈴々!?」

一刀は鈴々を追いかけようとするが

愛紗「あんな奴はほっておけ」

愛紗に止められた。

星「しかしよいのか愛紗よ、鈴々がいなければ生徒会長争奪戦に出られないぞ」

朱里「何ですかそれ？」

翠「転校生の朱里は知らなくて当たり前だよ。生徒会長争奪戦つてのは大将・武将二人・軍師の四人一組で行う大会で優勝した軍の大將が生徒会長になれるんだよ」

星「しかも今年は学園長の奮発ふんぱつで勝者の願いをひとつ叶えてくれるという副賞付きだからな」

朱里「はわわ！？学園長って太っ腹ですね！？」

一方、他の軍では

曹操軍

桂花「優勝は華琳様以外には考えられません！」

春蘭「我が軍の優勝は間違いなしです！」

秋蘭「頑張りましょう」

華琳「そうよ、私以外の会長なんて有り得ないわ（会長になったら関羽と一刀を我が手に！）」

孫権軍

蓮華「冥琳、もう一度言ってみる！」

冥琳「何度でも言いましょう蓮華様、あなたが人の上に立つには早すぎます！」

バタンツ！

そして冥琳は出ていった。

思春「蓮華様、気を確かにしてください」

蓮華「私は間違っているのか？姉様、教えてください！」

バンツ！

蓮華が見上げた写真には蓮華の姉である雪蓮の写真が花に囲まれていた。

フランチェスカ学園学生寮

雪蓮「ちよつと！！死んだ風にしないでよね！」

フランチェスカ学園三年生雪蓮。留年生である

董卓軍

月「詠ちゃん、私頑張るね！（会長になって一刀さんとデートを！）」

詠「月がやけに燃えている!?」

袁紹軍

麗羽「おーほっほっほっ！わたくしが会長になるのは確かですわ。何故ならば秘密兵器がありますもの」

猪々子「斗詩、秘密兵器って何だ？」

斗詩「さあわからないや」

そして関羽軍

愛紗「確かに鈴々がいなくて是我が軍は三人になってしまっな」

愛紗が言うと

朱里「あれ？愛紗さんと翠さんと星さんと一刀さんで四人じゃないですか？」

朱里が数の間違いを指摘すると

一刀「俺は当日学園長から解説役を頼まれているから無理なんだよ」

この学園では学園長の命令は絶対である。もし破ればどんな目にあわされるかわからない。

朱里「そうですか。ならばここであつたのも何かの縁ですし私が出ます！」

友達を多く作りたいために行動に出る朱里であった。

愛紗「それはありがたい。よしみんな絶対勝利するぞ！」

一刀以外「おーっ！」

しかしこの時一刀は見逃さなかった。わずかに星がにやっとしていたことを

一刀「（あの顔は絶対何か企んでいるな）」

そして生徒会長争奪戦当日

陳琳「皆さま、大変長らくお待たせしました。いよいよ生徒会長争奪戦開催です！それではまず選手入場！」

ダダダッ！

実況である陳琳が言うと選手達が行進してくる。

曹操軍

大将 華琳

武將 春蘭

秋蘭

軍師 桂花

孫権軍

大将 蓮華

武将 思春

小蓮^{シャオ}

軍師 穩

董卓軍

大将 月

武将 恋

華雄

軍師 詠

公孫贊軍

大将 公孫贊

武将 季衣

霞

軍師 ゼブラ軍師（冥琳）

袁紹軍

大将 麗羽

軍師 斗詩

武将 猪々子

そして…

鈴々「にやはっ！」

愛紗「お前は鈴々！？何故袁紹軍に！？」

愛紗は鈴々が袁紹軍にいることに驚いていると

麗羽「おーほっほっほっ！張飛さんはアナゴサンド一年分で我が軍に入りましたのよ」

鈴々「愛紗なんて鈴々がやっつけるのだ！」

食い物で軍に加わった鈴々だった。

愛紗「鈴々め、だが負けるわけにはいかない！いくぞみんな！」

愛紗が言うと

翠「おっっ！」

朱里「はいっ！」

だがそこに星の声はなかった。

愛紗「星はどこにいった？」

翠「あれっ？いつの間に!？」

朱里「さっきまでいたんですけど」

姿が消えた星を探す愛紗達。

一方、星はというと

女子更衣室

星「やはりヒーローは遅れてくるものだからな。特別派手な姿で登場せねば」

星はもうひとつの姿である華蝶仮面に変身するための衣装選びに夢中になっていた。

そして更衣室の外では

一刀「こんなことだと思ったよ。星のやつ時間かかりすぎだったの」

星の行動を予測していた一刀が待ち構えていた。

一刀「早くしないと人数不足で愛紗達が失格になってしまっ！？こうなったら仕方ない！」

そして一刀は

星「うゝむ、やはり赤か白か迷ってしまうな」

星が服選びに夢中になっている隙に

シュンッ！ サッ！

部屋に忍び込んであるものを持ち去っていった。

そして会場では

陳琳「おーっと！関羽軍の選手が一人足りない。このままでは人数

不足で失格になります」

翠「くつそー！戦わずして負けるなんて悔しいぜ！」

朱里「はわわ！？」

愛紗「もはやこれまでか…」

関羽軍の誰もが諦めたその時

？「ハ―ハツハツハツ！」

どこからか声が聞こえてきた。

？「悲しみ溢れる美女の声、助けてと喚く（わめく）乙女の涙。美々しき蝶が助太刀いたす！」

バンツ！

声を出してきたものが舞台に降りてきた。

華蝶仮面Z「我が名は華蝶仮面Z！ただいま参上」

現れてきた者はどこからどう見ても蝶の仮面をつけた一刀だった。

女子更衣室

星「仮面はどこにいったのだ！？あれがないと出られない！？」

「生徒会長争奪戦中編」(前書き)

三部作の二部目です。

「生徒会長争奪戦中編」

生徒会長争奪戦にて参加を決める愛紗達。

だが愛紗と鈴々が喧嘩をしまい鈴々は袁紹軍に入ってしまう。

おまけに愛紗達の軍であった星が華蝶仮面として出るための準備に時間をかけてしまい危うく愛紗達は失格になりかけてしまう。

だが愛紗達の危機に現れた人物は

華蝶仮面Z「華蝶仮面Z推参！」

その人物は誰がどこから見ても華蝶の仮面を着けた解説のため参加できないはずの一刀であった。

全員『・・・！？』

全員が驚くなか

スタツ

華蝶仮面Zが愛紗達の方に立ち寄ると

華蝶仮面Z「私が来たからには安心したまえ」

と言った瞬間

ガシッ！

華蝶仮面Zは愛紗に胸ぐらを掴まれてしまい

愛紗「何をしてるんだお前は！」

翠「そんなバレバレの変装で出場できるわけないだろ！」

朱里「はわわ！？一刀さん！？」

華蝶仮面Z「何をいうのだね？私は北郷一刀という美男子ではないぞ」

責められた華蝶仮面Zがとぼけようとすると

愛紗・翠・朱里「とぼけ（るな・ないてください）！」

更に責められる華蝶仮面Z

だが

鈴々「あいつはいったい誰なのだ！？」

麗羽「まさか関羽軍に助っ人が現れるなんて！？」

学園長（貂蝉）「あらん、北郷君以外にもいい男がいたなんてねん」

意外とバレていなかったりする。

華蝶仮面Z「学園長、北郷君からの伝言で北郷君は腹痛のため解説

を休むそうです」

華蝶仮面Z（一刀）が言うと

学園長「腹痛じゃ仕方ないわねん。時間もないし、さっさと始めるわよん」

いろいろ騒動があったもののようにやく生徒会長争奪戦が開始された。

陳琳「それでは組み合わせの発表です」

一回戦 第一試合

関羽軍 VS 董卓軍 … A

一回戦 第二試合

公孫賛軍 VS 孫権軍 … B

二回戦 第一試合

Aの勝者 VS Bの勝者

二回戦 第二試合

曹操軍 VS 袁紹軍

決勝戦

といった具合である。

(二回戦へのシードを華琳と麗羽が運で掴みとった)

陳琳「それでは最初は陸上競技です。皆さん体操着に着替えてください」

〔着替え中〕

パアンツ！

華琳「何で私達まで体操着に着替えるのかしら？」

秋蘭「おそらく妄想するための読者サービスでしょう」

絵がないのが残念である。

だが

華蝶仮面Z「おおーっ！今はほとんどお目にかかれない女子のブルマ姿だ〜！」

一人だけハッスルする華蝶仮面Z(一刀)だった。

そんな一刀には当然のごとく

ゴチンツ！！ ミ

愛紗「競技に集中しろ！」

愛紗のゲンコツが落ちるのだった。

陳琳「それでは一回戦第一試合、関羽軍VS董卓軍。種目は二人三脚です」

出場選手

愛紗・華蝶仮面Z

華雄・恋

陳琳「それではスタート！」

ピーッ！

そして競技が開始された。

愛紗「1・2・3・1・2・3」

華蝶仮面Z「1・2・3・1・2・3」

うまくテンポよく進んでいく愛紗と華蝶仮面Z（一刀）

翠「さすがは幼馴染みだぜ」

朱里「二人に任して正解でしたね」

もし華蝶仮面Zでなく二人のどちらかが走っていたら転んでいたに違いない。

対して董卓軍はというと

恋「…お腹空いた」

華雄「恋！さつさと走らんか！」

ずるずるっ

お腹が空いて動けない恋を華雄が引きずりながら進んでいた。

詠「ちっ！やっぱりあの二人に任せるべきではなかったか！こんな
つたら月、恥ずかしいと思うけど頼むわよ！」

詠は月に指示を出す

月「恋さん、こっちを見てください！」

恋「…んっ？」

恋が呼ばれた先を見ると

セキト「くう〜んっ」

ビシッ！

月「早く来ないとセキトをひどい目に遭わせますよ！／＼／＼」

バァーンッ！

そこにはゴール前にてボンテージスタイル（女王様）をした月が恥ずかしがりながらも鞭ムチを縛られた恋の愛犬であるセキトに目掛けて

お仕置きしようとしていた。

それを見た恋は

恋「…セキト、助ける」

ビュンッ！！

華雄「えっ！？うわーっ！？」

セキトを助けるため恋は先程までが嘘のように猛スピードで華雄を引きずりながら走っていった。

詠「よしっ！作戦成功よ！」

この時、詠は勝利を確信したが

ドビュンッ！！

恋「…！？」

恋の横から物凄いスピードで華蝶仮面Zが愛紗を引きずりながら走り抜けていった。

何故かというと

華蝶仮面Z「月のボンテージ姿を間近で見たい！」

煩惱丸出しであった。

そして

陳琳「ゴール！！」

華蝶仮面Zが恋より早くゴールした。

月「ふえっ！？」

華蝶仮面Z「君のその姿をぜひ間近で！」

ダッ！

華蝶仮面Zが月に襲いかかるうとするが

ゴチンッ！！ ミ

愛紗「いい加減にしないかこのエロ男！」

間一髪、愛紗に助けられる月だった。

陳琳「さあーっ！続いて一回戦第二試合 公孫贄軍VS孫権軍の試合開始です」

この戦いは借り物競争となり、代表者は大将である公孫贄と蓮華に決まった。

蓮華「（冥琳、そんなに私が嫌いなのか）」

蓮華は選手控え場に立つ公孫贄軍軍師ゼブラ軍師（冥琳）を見つめる。

陳琳「それではスタート！」

そして競技が開始された。

しかし始まる直前までゼブラ軍師を見ていた蓮華は公孫賛に少し出遅れてしまった。

公孫賛「お先にいくぞ！」

パシッ！

公孫賛は蓮華よりいち早く借り物が書かれた紙を手に持った。

公孫賛「さて私の借り物は？」

パサッ！

そして紙を広げると

公孫賛「！？（カッチーン）」

公孫賛は驚きのあまり石になってしまった。何故ならば紙に書かれていた借り物は

『学園長（貂蟬）の下着』

これでは誰であるかと借りることができない。

蓮華「よしっ！」

パシッ！ パサッ！

出遅れた蓮華は公孫贄が石になっている間に紙を手に取り広げると

蓮華「（あやつしかいないな）」

ダッ！ スッ！

ゼブラ軍師「えっ！？」

何を考えたのか蓮華は紙を見た後、ゼブラ軍師の手を取ってゴールに走っていった。

そして

陳琳「ゴール！！」

蓮華はそのままゴールした。

ゼブラ軍師「どう言うことですか？」

ゼブラ軍師（冥琳）が聞いてくると

蓮華「紙にこう書いてあったからな」

パサッ

蓮華が手に取った紙には

「あなたの成長に必要な人」

と書かれていた。

蓮華「私には冥琳、お前が必要なのだ。これからもよろしく頼む」

ゼブラ軍師「蓮華さま……」

仲直りをする二人であった。

一方公孫贇は

公孫贇「あんなもの借りたら私は終わりだ〜!？」

すでに負けていることも忘れて叫んでいた。

陳琳「さあ〜っ!二回戦からの舞台は屋内プールで行われますので
出場選手は水着に着替えてください!」

そして選手達は更衣室に移動する。

華琳「何のために体操着着たのかしら？」

愛紗「今の時期にプールとはな」

ぶつぶつ言いながらも女子更衣室に行く選手達

そしてその中には

華蝶仮面Z「さあ水着に着替えなくては！」

どさくさ紛れに華蝶仮面Zも女子更衣室に入ろうとするが

ドガバキツ！ ミ

愛紗「お前は男子更衣室だろうが！」

華蝶仮面Z「すみませんでした」

愛紗にボコボコにされる華蝶仮面Z（一刀）であった。

しばらくして、屋内プール

陳琳「さあーっ！全員水着に着替えたところで競技再開です！なお、解説の北郷君が欠席のため保険医の紫苑先生に来てもらっています

」

紫苑「よろしくね」

そして競技が説明される。

陳琳「二回戦第一試合 関羽軍VS孫権軍。種目は水中騎馬戦です

」

ルール

- ・三人一組で馬をつくり、最後の一人が一番上に乗る。
- ・馬役の人は手を使って妨害、鉢巻き取りをしてはいけない。
- ・先に一番上の人の鉢巻きを取った軍の勝ち

・決着がつかずに上の人がプールに落ちた場合落ちた軍の負けとなる。

関羽軍

馬役 先陣 華蝶仮面Z

両脇 愛紗

翠

上の人

朱里

孫権軍

馬役 先陣 穩

両脇 蓮華

思春

上の人

小蓮^{シャオ}

陳琳「それでは始め！」

そして試合が開始された。

蓮華「悪いがこの勝負、勝たせてもらう」

シュバツ！

開始早々、蓮華達は後ろに回り込むと

シャオ「食らいなさい！必殺『長江の滝』！」

バシャシャーツ！！

シャオが起こした水しぶきが関羽軍に襲いかかる。

翠「どうなってるんだよこれ!？」

愛紗「人間業ではないぞ!？」

実はこれには秘密があった。

舞台裏

伽留「それぞれ」

舞台裏に隠れていた伽留が水を操っていたのだ。

ドババァッ!!

そうとは知らない関羽軍はまともに水を食らってしまっ。

翠「ゲホッ!少し飲んじまったぜ」

朱里「はわわ!?!このままでは体力が削られて私達が不利です」

愛紗「何かいい手はないか!？」

考え出す関羽軍。そんなとき穩をじつと見ていた華蝶仮面Z(一刀)が

ピカーンッ!

何かをひらめいたようだ。

華蝶仮面Z「俺に一つ考えがある」

果たして華蝶仮面Zの考えとは！？

そしてその頃、女子更衣室では

星「どこだ！仮面！？急にみんなが入ってきたので思わず隠れてしまった。はて、では私の代わりに関羽軍に誰が入ったのだろうか？」

星は少し考えるが

星「そんなことより早く仮面を見つけなければ！」

その仮面は一刀が持ち去っているのを知らない星であった。

「生徒会長争奪戦後編」(前書き)

三部作の三つ目です。

「生徒会長争奪戦後編」

生徒会長争奪戦にて参加を決める愛紗達。

ところがメンバーであった鈴々が愛紗と喧嘩して袁紹軍に入り、星は着替えに手間取って関羽軍はあえなく失格になってしまう。

だがその危機を救ったのは解説役のため出場できなかったはずの一刀が華蝶仮面Zとして関羽軍に参戦。

その後、生徒会長争奪戦は着実に進んでいき準決勝第一試合 関羽軍VS孫権軍による水中騎馬戦が行われた。だが水を操る孫権軍に関羽軍は苦戦する。

そんなとき、華蝶仮面Z（一刀）は何かをひらめくのだった。

華蝶仮面Z「そうだ！あの手しかないな」

華蝶仮面Zが何かをひらめくと

華蝶仮面Z「愛紗、翠、足を地につけないで浮かんでくれ！朱里は俺にしっかり捕まっけていてくれ、そして合図したら鉢巻きを取るんだ！」

指令を出す華蝶仮面Zに

翠「何する気だ？」

愛紗「ともかく言う通りにするしかないな」

朱里「はわわ！？わかりました」

パツ！ パツ！ ガシツ！

華蝶仮面Zの指示通り愛紗と翠は足を地につけなくて浮かんでいき、朱里は一刀にしっかりと捕まっていた。

華蝶仮面Z「それじゃあいくぜ！」

シュツ！

すると華蝶仮面Zは

華蝶仮面Z「おりゃーっ！」

ぐるぐるーっ！！

孫権軍の回りを高速で回っていた。

蓮華「何をする気だ？」

思春「頭がおかしくなったのでしょうか」

ところが

華蝶仮面Z「そして次だ！」

キュルンッ！！

いきなり華蝶仮面Zは右回転から逆の左回転に高速で回りだした。

華蝶仮面Z「うおーっ!!!」

華蝶仮面Zは右回転、左回転と次々と回っていく

穩「何する気ですかね〜？」

しかし、この時穩は気づいてなかった。

ゆさゆっさー!

華蝶仮面Zが起こした回転によって自分の巨乳が大きく揺れていることを

そしてついに...

ブチンッ!

穩「へっ!?!」

穩の水着が揺れまくる衝撃に耐えきれなくなり

ぽろりっ

ちぎれてしまい穩の胸が丸出しになった。

穩「いや〜んっ／＼／＼」

サッ

慌てて手で胸を隠そうとする穩

だが騎馬戦で前を構える人の手が急に離れると

ぐらりっ！

シャオ「うわっ！？」

当然のごとく上の人がぐらつくことになり

華蝶仮面Z「朱里、今だ！」

朱里「はわわ！？はい」

この好機を逃すことなく朱里は目を回しながらも

バツ！

シャオ「あっ！？」

シャオの鉢巻きを取った。この瞬間

陳琳「小蓮選手の鉢巻きが奪われたことにより勝者関羽軍！」

関羽軍の勝ちが確定した。

しかし、ほとんどの人は何故こうなったのかわからなかった。だが観客席から見ていた冥琳は

冥琳「なるほどな、人の体は水に浮かぶもの、それは女の胸だつて例外ではない。水に浮かんだ穩の胸は波立つごとに揺れていきそれを華蝶仮面Zが高速回転することにより波立ちが早くなっていき最後には穩の水着がちぎれるくらい揺れたというわけか」

冷静に分析していた。

穩「すみませ〜ん。私の胸が大きいばかりに〜」

華蝶仮面Z「ハハハッ！正義は勝つのだ！」

ところがこの華蝶仮面Zの策には欠点があった。一つは目を回すこと、もう一つは…

ゴチンッ！ガツンッ！！ ミ

愛紗「何が『正義は勝つのだ』だこの馬鹿め！ / / /」

翠「あたし達の水着まで流しやがってこのエロエロ魔神が！ / / /」

一緒に一刀に捕まっていた愛紗と翠の水着も回転により脱げてしまつたことである。

華蝶仮面Z「すみませんでした」

水着が脱げてしまった二人に殴られる華蝶仮面Z（一刀）であった。

その後、愛紗と翠の水着も見つかりしばらくして

陳琳「さあーっ！色々ありましたが続いて準決勝第二試合、曹操軍
VS袁紹軍の戦いです！」

ズラリッ！

陳琳の宣言で並び立つ水着姿の両軍

華琳「麗羽、私はどんな勝負でもつけるわよ」

麗羽「おーほっほっほっ！そういうセリフは今のうちにたっぷり言
っておきなさい！」

そして競技が説明される。

陳琳「競技は袁家に伝わる白鳥のまわしを締めた女同士の見相撲で
す！」

陳琳が宣言すると

ズコッ！！

ずっこける曹操軍

華琳「何なのよその競技は！」

華琳が抗議しようとする

麗羽「あーら、曹操さんという人が一度宣言したことを捨てる気で
すの？」

斗詩「文ちゃん、何て言ったっけ？」

猪々子「確か『どんな勝負でもつけるわよ』だったよな」

鈴々「ここで逃げたら男がすたるのだ」

女である。

カチンッ！！

そして麗羽達の言葉にキレた華琳は

華琳「誰が逃げるといったの！受けてたとうじゃないの！」

参加をつけることにした。

しばらくして

バーンッ！

そこには白鳥のまわしを締めた両軍がいた。

秋蘭「さすがに恥ずかしいな／＼」

春蘭「華琳様の命令ならば仕方ないだろう／＼」

桂花「華琳様以外に見せたくないのに／＼」

華琳「まさかこんな姿を一刀に見せることになるなんてね／＼」

「

麗羽「おーほっほっほっ！さあいきますわよ！」

斗詩「文ちゃん、麗羽様って羞恥心無いのかな？／＼」

猪々子「産まれたときに母親の体に置いてきたんだろっよ／＼」

さすがの姿に麗羽以外恥ずかしがる両軍

華蝶仮面Z「これは！？是非とも記録せねば」

ガチャガチャッ

華蝶仮面Z（一刀）がビデオカメラを取ろうとすると

ゴチンッ！… ミ

愛紗「このエロ助が」

華蝶仮面Z「すみません」

愛紗に殴られる華蝶仮面Zであった。

陳琳「それでは試合開始です！」

ルール

- ・まわし以外を身に付けてはいけない。
- ・押されてプールに落ちた人の負け

そして袁紹軍先鋒は

鈴々「鈴々なのだ！」

ドンツ！ 春蘭「うわっ！？」

ドンツ！ 秋蘭「うわっ！？」

ドンツ！ 桂花「ひえっ！？」

字数の都合で次々と落とされていく曹操軍

鈴々は羞恥心が無いのか胸を隠さないのに対し、胸を隠す曹操軍は両手が使えない。

そして残るは華琳一人となった。

華琳「こうなったら、恥ずかしいけどやるしかないわね！／／／」

バツ！

何と！？華琳は胸を隠していた両手を開放して戦う気だ！

華蝶仮面Z「おおーっ！／／／」

華蝶仮面Zは華琳を見つめるが

バンツ！

陳琳「何と！？華琳選手、乳首に絆創膏はんそうこうを貼っています！？」

紫苑「これはルール違反では？」

貂蟬「これはこれでエロいからありよ！グッジョブよ」

どうにか認められたようだ。

華琳「両手が使えればこちらのものよ！」

鈴々「負けないのだ〜！」

ガシッ！

二人は手をつかみ合う。だが疲れている鈴々が不利のようだ。

麗羽「こうなったら猪々子、斗詩、あれをやりますわよ！」

猪々子「あれですか！？」

斗詩「やだな〜／＼／＼」

そして試合は

華琳「どうやら私の勝ちのようね！」

鈴々「うぬぬ〜！？」

もう少しで鈴々が落ちそうになったその時

ぴんっ！　ぴんっ！

ぴりぴりんっ！

麗羽達がまわしの白鳥を動かしていた。

猪々子「グワッ！」

斗詩「グワッ！」

そして白鳥（？）の声を出す猪々子と斗詩、そして

麗羽「アフ○ック！」

麗羽がつまらないことを言つと

華琳「ぷふっ！」

今の何がおかしかったのか急に笑い出す華琳

鈴々「今なのだ！」

華琳「えっ！？」

そしてその隙を鈴々が見逃すはずがなく

ドンッ！！ 華琳「きゃっ！？」

ドボンッ！

華琳はプールに落ちてしまった。

麗羽「フフフッ、曹操さんはつまらないギャグには弱いですからね」

華琳と幼馴染みの麗羽にしかできない手である。

しばらくして

陳琳「さあーっ！ながかった生徒会長争奪戦もいよいよ決勝戦！関羽軍VS袁紹軍の戦いです！」

ズラリッ！

そして選手達が並び立つ

鈴々「愛紗には負けないのだ！」

陳琳「それでは最終競技はやはり競泳です！」

関羽軍 翠・華蝶仮面Z・朱里・愛紗

袁紹軍 猪々子・斗詩・麗羽・鈴々

陳琳「それでは字数を減らすためにもスタート！」

そして競技が開始された。

猪々子「それっ！」

翠「負けないぜ！」

ザブンッ！

勢いよく飛び込む二人

猪々子「お先に〜」

翠「なっ！？」

二人の身体能力はほぼ互角のはずなのに何故か猪々子が翠を大きくリードしていた。

陳琳「何故でしょうかね？解説の紫苑先生お願いします」

紫苑「それはおそらく胸ね！水の抵抗で胸のある翠ちゃんより胸のない猪々子ちゃんの方が進みやすいのよ！」

猪々子「どうせあたいは胸がないよ！」

叫ぶ猪々子だった。

斗詩「そんなことより文ちゃん！」

猪々子「そうだった！？」

タツチ！

翠よりいち早く猪々子が次の斗詩にタツチした。

翠「くっ！？かず…華蝶仮面Z、頼むぞ！」

華蝶仮面Z「任せておけ！」

タッチ！

そして出遅れて翠も華蝶仮面Zにタッチした。

愛紗「あれっ？そっういえば一刀って」

ザブンッ！

華蝶仮面Zは勢いよく飛び込むが

華蝶仮面Z「ぶあっぷ！？ぶあっぷ！？」

華蝶仮面Z（一刀）は金づちだった。

翠「お前泳げなかったのかよ！？だったら歩いてもいいから行きやがれ！」

華蝶仮面Z「おっ！そうか！」

スッ

そして華蝶仮面Zは足をつけると

バシユンッ！

水の抵抗なんてお構いなしに進んでいった。

斗詩「うそっ!？」

そして斗詩に追い付いてしまった。

華蝶仮面Z「頼むぞ朱里！」

斗詩「頼みます麗羽様！」

朱里「はいつ！」

麗羽「いきますわよ！」

ザブンッ!

勢いよく飛び込む二人。だが

朱里「はわわ〜!？」

麗羽「おーほっほっほっ！」

バシャシャーツ!

二人は浮き輪を使っているためなかなか差がなかった。

朱里「愛紗さん！」

麗羽「必ず勝ちなさい！」

愛紗「任せておけ！」

鈴々「合点なのだ！」

そして二人は同時にアンカーである愛紗と鈴々にタッチした。

鈴々「うおーっ！アナゴサンドパワーなのだ〜！」

バシヤシャーッ！

愛紗「なっ！？」

試合前にアナゴサンドを食べまくった鈴々は物凄い勢いで泳ぎまくる。

だが

プスッ！

鈴々「へっ！？」

アナゴサンドを食べ過ぎてしまいへそから元気が漏れてしまった。

鈴々「にゃ〜…」

ブクブク〜

元気が漏れてしまい沈んでいく鈴々

愛紗「鈴々！？」

バシヤッ！

すぐさま鈴々を助けに行く愛紗

ザバツ！

愛紗「大丈夫か鈴々！？」

鈴々「あいしやく…」

だがその瞬間

陳琳「おーっと！愛紗選手、鈴々選手を助けるためとはいえ妨害に
より勝者、袁紹軍です。よって生徒会長は麗羽さんに決めました
！」

麗羽「おーほっほっほっ！」

喜びまくる麗羽

鈴々「ごめんなのだ愛紗、鈴々のせいだ…」

鈴々は愛紗に謝ると

愛紗「私は妹のお前を助けるのなら生徒会長にならなくてもよい」

愛紗が言うこと

鈴々「あいしやく！」

ギョッ！

鈴々は愛紗に泣きながら抱きつくのだった。

華蝶仮面Z「どうやら仲直りしたようだな」

翠「めでたしめでたしだぜ」

ところが

星「かゝずととどくの〜！」

又ッ！

華蝶仮面Z「星!？」

星「私の大事な仮面をよくも、許しませんぞ〜！」

星が華蝶仮面Z（一刀）に迫っていく。

パッ！

一刀は仮面を星に渡すと

一刀「許してくれ〜！」

びゅーっ！

一刀は逃げていった。

星「待ちなされ〜！」

ドドーン！

星は一刀を追いかける。

そしてその頃

麗羽「（副賞の望みはまだかしら？）」

麗羽が副賞を待っていると

貂蝉「副賞はあげるけど、私からのご褒美として…
ブチューッ！」

ブチユッ

麗羽「ギャーっ！？」

この後、麗羽は気絶してしまい副賞はおじちゃんになったという。

「生徒会長争奪戦後編」(後書き)

さて次回から真・恋姫編

と言いたいところですが

この小説を楽しみに待っている人(いるのかな?)には悪いですが、第一期が終わりましたので次回より西森の新作が始まりますので再び不定期更新になります。なるべく早く投稿しますのでしばしお待ちください。

「守りの代償」(前書き)

久しぶりの投稿です。

本来なら鈴々と翠が喧嘩する話ですが一刀がいるといこととで少し話を変えてみました。

「守りの代償」

一刀達が桃花村にて賊の襲撃から村を守って二週間が過ぎた。

そして愛紗達桃花村義勇軍（愛紗・鈴々・朱里・伽瑠・一刀）の仲間
に新しく趙雲（真名は星）、馬超（真名は翠）、黄忠（真名は紫苑）
が仲間に入った。

そして一刀の覇気を恐れて失禁（お漏らし）しながら逃げ出した劉備
の行方はわからずじまいだった。ちなみに劉備は紫苑の娘である
璃々ちゃんを誘拐した黒幕であることがわかり、劉備という名も偽
名ということが判明した。

そして村を救った一番の人物である一刀はというと

じゅっ！

庄屋の屋敷の屋根の上で折れた木刀を見つめていた。

賊達との戦いで本気を出した一刀の力に木刀が耐えきれず折れたの
だった。

一刀「すまないな小百合姉」

この木刀は一刀が市大会優勝時、一刀の家の隣に住んでいる愛澤小
百合からもらった木刀なのだ。

一刀「この世界に来てはや2ヶ月近く、あいつは俺に何をさせよう
としてるんだ？」

一刀は2ヶ月ほど前、何処からか聞こえてきた声に『ある世界を平和に変えてほしい…』と言われてこの世界につれてこられたのだ。
(1話参照)

一刀「俺がいないと小百合姉も心配するし、一刀も泣いてるかもしれないな」

スッ

一刀は懐から一枚の写真を取り出して見つめる。

その写真には一刀と小百合と一刀が写されていた。

一刀が写真を眺めていると

愛紗「一刀殿！」

ドキッ!?

いきなりの声に驚く一刀

声の出所は下から、すなわち部屋の中から聞こえてきた。

愛紗「一刀殿、祝勝会の宴が始まりますので来てください!でない」と鈴々が騒いで困ります」

この黒髪ポニーテールの女性は関羽雲長(真名は愛紗)といい、一刀がこの世界に来て初めて出会った人物である。

一刀「ああ、今から行くから待っていてくれ」

愛紗「急いでお願いしますよ！」

ちなみに愛紗は一刀に惚れている。

愛紗「余計なことを説明するでない！／＼／」

桃花村・庄屋の屋敷

庄屋（村長）「いや、皆さま方の活躍は見事なものです。おかげで付近の賊はみな討伐されました」

この庄屋はたとえ小さな勝利であっても祝勝会を開こうとする性格である。

庄屋「特に孔明殿の策は見事ですな！」

朱里「はわわ！？私なんて別に！？」

この金髪ショートの子は諸葛亮孔明（真名は朱里）名軍師であり、驚くとはわわと言ってしまふ。

朱里「私なんてまだまだですよ。皆さんがいたからこそその勝利です！？」

庄屋「またまた、そんな謙遜しなくても」

庄屋が朱里をほめすぎていると

鈴々「ぶーっ！鈴々だって頑張ったのに朱里だけ誉めてずるいのだ
！」

この赤髪の小さな女の子は張飛翼徳（真名は鈴々）、愛紗の義妹で
元気なのが取り柄な怪力娘。子供っぽいところがある。

鈴々が拗ねていると

庄屋「張飛殿だって活躍は素晴らしいですとも！豚にまたがって戦
う姿は猛豚將軍と呼ばれているほどですよ」

鈴々「猛豚將軍…かつこいいのだ！」

ちなみにその時みんなの頭に浮かんだ猛豚將軍はまさに豚人間とい
うような感じである。

伽瑠「次の料理ができましたよ」

この子は高蘭（真名は伽瑠牙（通称・伽瑠））。元呉軍の料理長で
あり弓の名手。水を操ることができ胸がでかい、そして…

翠「あたしがいただきますだぜ！」

ぱくっ！

翠は出された料理をすぐに食べる。ところが…

翠「かれーっ！！」

ゴオーッ！！

あまりの辛さに口から火を吐く翠

伽瑠「ふふふつ、唐辛子をたっぷり入れたんだよね」

いたずらっ子でもある伽瑠だった。

翠「テメエ！よくもやりやがったな！一発殴らせろ！」

伽瑠「やだよ」

ダダッ！

二人はおいかけてこを始める。

この茶髪ポニーテールの女性は馬超孟起（真名は翠）。西涼太守馬騰の娘である。以前は父を殺した曹操（真名は華琳）を憎んでいたが後にそれが誤解だとわかってからは恨んでいない。馬の扱いがうまく、ときおり失禁する。

星「あまりドタバタするでない埃がたつてご飯が食べられないではないか」

この落ち着きのある水色の髪の女性は趙雲子龍（真名は星）。冷静な性格だがよく人をからかう。身が軽く早さを得意とし、正義の味方、華蝶仮面に変装して正義をする（正体は鈴々と璃々ちゃん以外には知られている）。

星「まあ私はメンマさえ無事ならば別に構わぬ…」

星が最後まで言おうとする。

翠「待ちやがれ！」

ドンッ！

翠が星にぶつかってしまい

ガチャンッ！

星の持っていたメンマ壺を割ってしまう。

その瞬間……

星「よくも私のメンマをーっ！ 二人とも覚悟するがよい！」

星も争いに加わった。

普段はクールな星もメンマが関係していれば豹変するのだった。

ドタバタッ！

星が加わりドタバタ騒ぎをする三人に

ドンッ！

紫苑「食事中は静かにしなさい！」

薄紫色の髪であるこの女性は黄忠漢升（真名は紫苑）。弓の名手であり義勇軍の母親的存在。子持ちであり爆乳。一見大人しそうだが

キレたら愛紗よりも恐い

紫苑が机を叩くと

シュンツ

直ぐ様騒ぎが収まるのだった。

紫苑「みんな静かにしていい子ね」

実はそうではなく、もしあのまま騒いでいたらこの場は地獄と化していたに違いないと感じて静かにした三人だった。

璃々「あつ！お母さん、関羽お姉ちゃんとお兄ちゃんが来たよ」

この子供は璃々。紫苑の娘であり義勇軍の癒し系。まだ5歳くらいの子供だが紫苑から教わった言葉を使うため見た目とは違う発言をする。

璃々が指差した先には愛紗と一刀がいた。

愛紗「遅れてすまないな」

一刀「待たしてゴメンね」

二人がみんなに謝ると

鈴々「遅いのだー！鈴々、お兄ちゃんが来るまでずっと待っていたのだ！」

一刀「それは悪かった」

一刀は鈴々に謝って椅子に座る

璃々「よいしょっと！」

スッ

そして当然のように一刀に座る璃々ちゃん

紫苑「こら璃々、そこに座ったら一刀さんが食べにくいから降りなさい」

璃々「いや、璃々ここに座るの〜！」

璃々ちゃんは一刀から降りようとしなない。

一刀「別に構わないよ黄忠さん。璃々ちゃん軽いからさ」

紫苑「まあ一刀さんが言うのでしたら」

星「一刀殿、食事が終わりましたら鍛練に付き合ってもらえますかな？」

先の賊達との戦いで隠していた一刀の力が明らかになった。はつきりいって一刀の実力はこの場にいる誰よりも強いのだ。

だが

一刀「俺はほら、武器がないからさ」

星「代わりの木刀ならいくらでも…」

一刀「あの木刀でしかダメなんだよ！」

ガタンッ！

全員『・・・！？』

突然の一刀の叫びに全員が驚く

ハッ！？

一刀は自分が何をしたのかを思い出すと

一刀「ごめん星、急に怒鳴ったりして俺は今日は飯いらないからさ

」

スッ

そして一刀は去っていった。

愛紗「一刀殿…」

鈴々「無理もないのだ。前に聞いたけどあの木刀はお兄ちゃんが別の世界から持ってきた大事なものののだ。それが壊れたら別の世界との繋がりが消えてしまうのだ」

朱里「大事な武器が壊れましたからね」

星「少しばかり軽く言い過ぎてしまったようだな」

確かに星の言う通り代わりの木刀ならいくらでもある。だが一刀の木刀は一本しかないのだ。おまけに普通の木刀だと一刀の力が強すぎてすぐ壊れてしまうのだ。

みんなが一刀に同情して暗い気分になる。

さすがにこの状況では庄屋も明るくするわけにはいかなかった。

そしてみんなが暗くなったとき

ドンッ！

愛紗が机を叩くと

愛紗「少し出てくる」

スッ

愛紗が外に出ていこうとする。

翠「どこ行くんだよ関羽？」

翠が聞くと

愛紗「こういう気分になったのも全て一刀殿が落ち込むせいだ！私があやつのうじうじした根性を叩き直してやる！」

スッ

そして愛紗は出ていった。

紫苑「今は関羽さんに任せるしかないわね」

みんなは愛紗に任せることにした。

しかし少しばかり何かがおかしいような気がする。実はみんなは一部を除いて真名を交換しあっていないのだ。

「真名交換」(前書き)

お待たせしました31話目投稿です！

「真名交換」

星の何気ない一言に怒った一刀が飛び出した後

愛紗が一刀を追っていった。

そして他のみんなは

璃々「お母さん、お兄ちゃんは何で怒鳴ったの？」

璃々が母親である紫苑に聞くと

紫苑「それはね、趙雲お姉ちゃんが一刀くんの大事にしているものを他のを使えって言ったからよ」

紫苑が璃々に言うと

璃々「じゃあ星お姉ちゃんが悪いのか？」

この璃々の一言に

紫苑「ダメじゃないの璃々！ちゃんと趙雲お姉ちゃんって言わなきゃ！というより何で趙雲お姉ちゃんの真名を知っているの!？」

紫苑が璃々に聞くと

璃々「鈴々お姉ちゃんから教えてもらった」

じっ…

みんなの視線が鈴々に集中する。

鈴々「だって鈴々達は仲間だから教えてあげたのだ。仲間なら真名くらい教えるのが普通なのだ」

真名くらいという鈴々だが真名を許可もなく言ってしまうと首を斬られてもおかしくないのだ。

翠「でもまあ張飛の言う通りだよな」

伽留「確かに今まで一緒に戦ってきて真名を交換してないのはおかしいよね」

朱里「もしかして私達の真名は一刀さんにとって木刀と同じくらい大事なものかもしれませぬ」

星「フツ！ならば私は真名を失ったら別の真名を使えといったようなものか、それなら一刀殿が怒るのも無理もないな」

ガタツ！

そして全員が椅子から立つと

全員『（行くか・行きましょう）！』

ダダツ！

全員が飛び出していき

庄屋「皆さんどちらにいくのやら？」

一人残された庄屋は首を傾げる（かしげる）のだった。

鈴々達が飛び出す前、一刀を追って出た愛紗は

愛紗「一刀殿はどこにいったのだろうか？」

一刀を探していると

愛紗「あれは！？」

泉近くの木の下に一刀が座っているのを愛紗が見つけた。

愛紗「かず…」

愛紗が一刀を呼ぼうとすると

キラントツ　　ぼたりっ

一刀が小刀を手に持ち、一刀の手首から血が流れていた。

愛紗「バカなことはやめろ！？」

ダツ！

見ての通り一刀が自殺しようとしているのを見て急いで一刀の元に行く愛紗

一刀「んっ…愛紗か…」

そして一刀が愛紗に気付いて振り向いた瞬間

バチンッ！

一刀「ぐほっ!?」

一刀は愛紗の平手打ちを食らってしまった。

愛紗「このバカ者が！いくら大事なものが壊れたからって自殺する奴があるか！」

バツ！

愛紗は一刀が握っていた小刀を奪い取る。

一刀「返してくれよ！俺は死んでもあの世界に帰るんだ！」

もはや一刀は気が狂っていた。

ガシッ！

一刀は愛紗の持つ小刀を奪い取るうとする。

愛紗「やめぬか！木刀が壊れたくらいで死に急ぐでない！」

一刀「あれはただの木刀じゃない！俺にとっては唯一あつちの世界と結ぶ大事なものなんだ！」

一刀と愛紗はもみ合いになる。

愛紗「一刀殿の気持ちは私にもわかるから落ち着け！」

愛紗が言う

一刀「嘘つけ！愛紗は大事なものを失ったことがないから平気で言えるんだよ！そんな愛紗に俺の気持ちはわかるものか！」

一刀が言った瞬間

バチンッ！！

愛紗が一刀の頬を叩いた。

ぐいっ！

そして愛紗が一刀の胸ぐらを掴むと

愛紗「大事なものを失ったことがないだと、ふざけるな！一刀殿はたとえ別の世界だとしても肉親がいるだけましではないか私なんて家族がいないんだぞ」

愛紗は小さい頃に両親を病で亡くし、たった一人の肉親である兄も賊に殺されたのだった。

愛紗も一人ぼっちだったのだ。

愛紗「一刀殿、私が約束してやる！必ず何があろうともあなたを元の世界に帰してやる！だから自殺なんてするんじゃない！」

ほろりっ

そんな愛紗の目からは涙が流れていた。

愛紗の叫びを聞いた一刀は

「一刀「ありがとう愛紗、俺が弱虫だったんだよ」

ぎゅっ！

一刀は折れた木刀を握ると

「一刀「木刀が折れたからって、俺がよわよわしていたんじゃない小百合姉や一刃に笑われちまうもんな」

そして一刀は

スッ

小刀を取り出すと

シャシャシャッ！

折れた木刀を小刀で削り取っていき

ジャーンッ

一個のお守りを完成させた。

くるっ

「一刀「ありがとう愛紗」

ニコッ

「一刀は愛紗に笑顔を見せると

愛紗「（ボンッ！／／／）」

愛紗の顔が茹で蛸のように真っ赤になった。

愛紗「（いきなりあの顔は反則だろうが／／／）礼なぞ言わなくてよい！我々は仲間なのだか…」

愛紗が最後まで言おうとすると

スッ

「一刀が愛紗に顔を寄せる。

愛紗「（なっ！？／／／）」

「一刀「愛紗、動かないで」

スーッ… ガシッ！

そして一刀は愛紗にゆっくりと手を近づけて押さえる。

愛紗「（もしかしてこれは接吻キスなのか！？でも一刀殿になら…／／／）」

ぱちりっ

愛紗は一刀を受け入れるように目を閉じる。

そして二人の体は一刀の方からどんどん接近していき…

愛紗「（一刀殿、私はあなたを愛し…）」

ピタリっ！

だがここで一刀の動きが止まり

スッ

愛紗に手を伸ばすと

スッ！

一刀「大きなゴミだったな」

愛紗「へっ！？」

一刀が愛紗に近づいた理由、それは愛紗の頭についていたゴミを取るためだったのだ。

するとその時

ドターッ！！

愛紗の後ろの草むらからいきなりみんなが倒れてきた。

翠「紛らわしいことするなよ！」

星「まあ一刀殿に展開を求める方がおかしいと思ったがな」

紫苑「今度しつかり教えなきゃね」

伽留「うまくいけたらネタにしてからかってあげようと思ったのに
〜！」

朱里「はわわ〜！？それはいけませんよ！？」

いきなり現れたみんなを見た一刀と愛紗は

愛紗「どこから見てたんだ？」

愛紗が聞くと

璃々「愛紗お姉ちゃんがお兄ちゃんをぶつたとこからだよ」

ほとんど始めの方である。

愛紗「お前ら〜！！」

恥ずかしいところを見られて怒りだす愛紗

そんなとき

鈴々「鈴々達だってお兄ちゃんのこと心配だからついてきたのだ

！
「

鈴々が言うつと

星「一刀殿、先程の発言を詫びさせてもらいます」

一刀「別に構わないよ！木刀が折れたところであつちに帰れないわけじゃないしさ」

一刀が言うつと

星「それでは私の気持ちが悪くせぬ！一刀殿の大事なものを侮辱した代わりに私の真名を預けます！」

星が言うつと

紫苑「と言っていますますが実はさっき真名を交換しあつてない事実にご気づきまして」

翠「折角だから交換しあつて話になつてな！」

鈴々「お兄ちゃんの大事な木刀の代わりに鈴々達の大事な真名をあげるのだ！」

朱里「私達があげられる大事なものは真名しかありませんしね」

みんなの話を聞いた一刀は

一刀「ありがとうみんな」

ぐずっ！

涙を流しながら感謝していた。

伽留「泣くのはまだ早いつて！ほらお酒持ってきたから乾杯ついでに真名を言い合おうよ」

愛紗「それもそうだな」

スッ！

そしてみんなは酒の入った杯を上げると

愛紗「我が名は関羽雲長！真名を愛紗だ！これからもよろしく頼む！」

鈴々「鈴々は張飛翼徳！真名は鈴々なのだ！」

星「我が名は趙雲子龍！真名は星！以後よろしく！」

翠「あたしは馬超孟起！真名は翠だ！よろしくな！」

朱里「私は諸葛亮孔明！真名は朱里です！よろしくでしゅ！」

紫苑「私は黄忠漢升！真名を紫苑と言いますわ！」

璃々「璃々は璃々だよ」

伽留「私は高蘭！真名は伽留^{きやろが}牙、伽留^{きやろの}つて呼んでね」

そしていよいよ一刀の番になった。

一刀「俺は北郷一刀！あごな字と真名はない一刀って呼んでくれ！」

と言った瞬間

星・朱里・翠・紫苑・伽留「へっ！？」

いきなり朱里達が驚きだした。

星「これは驚いた！？まさか真名がなかったとわな！？」

璃々「お母さんこれでもうみんなを真名で呼んでもいいよね？」

紫苑「ええ、いいわよ璃々」

璃々「やったー！」

みんなの真名を堂々と言えるようになって喜ぶ璃々ちゃんだった。

そして一刀達はようやく互いに真名を交換しあったのだった。

「真名交換」(後書き)

次回、本物の劉備(桃香)が登場

「訪れた二人連れ」(前書き)

本物の劉備(桃香)とオリキャラの劉雷が登場します。

「訪れた二人連れ」

? 「ハアハア…」

? 「劉備様、急いでくださいよ！」

一刀達がいる桃花村に桃色の髪をしたほんわかそうな女の子（西森のイメージ）とバカとテストと召喚獣の木下秀吉の顔をして胸にサラシを巻き、三國無双5のリョ統の服装（知らない人は調べてください）をした男装した女の子が向かっていた。

? 「海ちゃん、ちょっと待ってよ」

海「早くしてください！噂によればこの先の桃花村に劉備様の名を語る男がいるんですよ！みつけしだいボコボコにぶちのめしてやらなきゃ私の気がすみません！」

その頃、桃花村では

朱里「それでは愛紗さん、一刀さん行つてきます」

朱里達は村の警備にいくのであった。

星「愛紗よ、一刀殿と二人つきりだからといっていちゃいちゃするでないぞ」

愛紗「なっ！？／＼何をいうのだ星！」

鈴々「愛紗の顔が赤いのだ」

二人をからかう星と鈴々

紫苑「大丈夫ですよ璃々もいますし」

翠「だよな、さすがに一刀がエロエロ魔人でも子供が見てる前でエツチなことはしないよな」

伽留「一刀ならわからないけどね」

一刀「そんなに俺って信用ないの!？」

璃々「？」

そして愛紗と一刀と璃々を残してみんなは村の警備に行くのであった。

璃々「愛紗お姉ちゃん、おしっこ〜！」

愛紗「えっ!？仕方がない一刀殿、私は璃々をトイレに連れていきます」

一刀「わかった。俺は薪を割っておくよ」

しばらくして

一刀「よっ！」

パカッ!

一刀が薪を割っていると

？「ムキーツ！！」

何処からか声が聞こえてきた。

一刀「誰の声だ？」

そして一刀が声のする方に向かってみると

海「何なのよこの村は！おじさんばつかで若い男なんか一人もいないじゃない！こうなったら若い男をみつけしだいぶん殴ってやる！」

？「海ちゃん、女の子なんだから言葉も女の子っぽくしなきゃダメだよ。そんな性格じゃ好きな男の子ができないよ」

桃色の髪をした女の子が海に言うと

海「ご心配なく！私は劉備様命なので男には興味ありませんから！」

聞き方によつてはおかしい言葉である。

そんなとき

一刀「誰がいるの？」

バツ！

一刀が二人の前に現れた。その瞬間

海「若い男ーっ！」

バツ！

若い男である一刀を見かけた海が一刀めがけて飛びかかってきた。

？「海ちゃん！？」

一刀「えっ！？」

海「くたばれーっ！」

そして

ドンッ！！

海は一刀に拳を繰り出した。

？「海ちゃん！？」

海「私の拳を食らって立っていた奴は一人もいな…」

ところが

バンッ！

一刀「いきなり殴ってくるなんて危ないな！？」

海「なっ!?!」

一刀は海の拳を受け止めていた。

海「このっ!このっ!このっ!」

シュシュシュッ!

海は一刀に拳の連撃を繰り返すが

一刀「いきなり何するの!?!」

パパパパシッ!

一刀はそれをすべて受け止めていた。

?「あの人、海ちゃんの拳を受け止めるなんてすごいなあ〜!?!」

桃色の髪をした女の子が二人の戦いを見ていたその時

ドンッ!　ぐらりっ!

?「えっ!?!」

ドバツ!

女の子はすっかり置いてあった材木に手が当たってしまい、材木が女の子に向かってきた。

?「きゃーっ!?!」

そして叫び声を聞いて

海「はっ！？劉…」

気づいた海が叫んだその時

ビュンッ！！

海「へっ！？」

海の目の前を一刀がものすごい早さで走り抜け

ガララーッ！！

材木が崩れた時には

？「えっ！？」

バンッ！

女の子は一刀にお姫様抱っこされていた。

一刀「大丈夫怪我はない？」

にこっ！

そして一刀のスマイルを間近で見た女の子は

？「は…はい／＼／」

ポッッ！！

顔を赤くするのだった。

一刀「（顔を赤くして熱でもあるのかな？）」

だが鈍感な一刀が気づくはずがなかった。

海「（私が見切れないなんてあいつ何て早さなんだ！？）」

海が一刀の早さに驚いていると

ガシャンッ！

一刀「（ドキッ！？）」

一刀の後ろから何かが割れる音がしたので

ギギギッ…

一刀がブリキ人形のごとく首を後ろに回してみるとそこには

愛紗「（プルプルッ）」

お茶を落とした愛紗が震えていた。

一刀「あ…愛紗さん！？」

愛紗「一刀殿が薪割りを頑張っているので差し入れにお茶を持って

「いったら薪を割らずに女の子を抱いているとはね…」

愛紗から見た一刀の姿は女の子をお姫様抱っこしているにしか見えないのだ。

一刀「こ…これには事情が!？」

一刀が愛紗に言おうとすると

愛紗「問答無用!」

ギンツ!!

ドカバキドスバコツ!! ミ

愛紗は女の子を傷つけないように一刀だけを狙い殴る。

一刀「ごはっ!？」

バタツ!

一刀の顔がキューブマン(キン肉マンのキャラ)のようになったところようやく攻撃は止められた。

愛紗「まったく!お主は大丈夫だったか?」

一刀を殴り終えた愛紗が一刀に抱かれていた女の子を見ると

?「な…何でもないです!？」

怒りの愛紗を間近で見た女の子は愛紗に怯えていた。

海「ねえ、ところでさ」

愛紗「何だ？」

そんななか海が愛紗に話しかけてきた。

海「この村で一番偉い人のところに連れていってくれない？」

しばらくして

桃花村・庄屋の屋敷

この場には紫苑と翠を除くみんながいた。

星「一刀殿、確かに私は愛紗といちゃいちゃするなどは言ったが、他の女をつれてくるとは驚きですな」

一刀「誤解ですから」

顔をはらした一刀をからかう星

朱里「それであなただちは誰なんですか？」

朱里が二人に聞くと

海「私は劉雷、字は神王。記憶喪失のところをこのお方に助けられてから旅してるのよ」

ちなみに海は劉雷の真名である。

鈴々「それでお姉ちゃんは誰なのだ？」

鈴々が桃色の髪をした女の子に聞くと

？「私の名前は…」

劉備「劉備玄德です」

女の子が名前を言った直後

バタンツ！

翠「劉備だと！」

紫苑「劉備ですって！」

朱里「はわわ！？」

いきなり紫苑と翠が入ってきた。

もちろん劉備という言葉に反応したのは一人だけではなく

一刀・愛紗・星・伽留『……！？』

鈴々「はにやつ？」

鈴々以外のみんなが武器を構えようとしていた。

しばらくして

翠「すまないな、劉備って言葉に反応しちまってよ」

紫苑「お見苦しいところを見せてしまいましたね」

二人が劉備に謝ると

劉備「気にしないでください」

海「やっぱりあいつ劉備様の名を語って悪さしていたのね！で、あんたらは何されたの？」

海が聞くと

ピクンッ！

紫苑「何をされたかですか…」

プルプルッ！

紫苑の体が震え出して

紫苑「あの男は我が娘である璃々を人質にとって長の暗殺を企んだばかりか名声だけのためにこの村を利用した上に愛紗ちゃんの乙女心をもてあそび…」

一刀「朱里、璃々ちゃんに目隠ししておいてくれ」

朱里「わかりました！？」

紫苑の体にいち早く恐怖を感じた一刀が朱里に指示した直後

紫苑「もし見つけ出したら…耳を削ぎ、鼻を落として目を潰し…時間をかけて生爪を一枚一枚剥がしてから三枚におろし…っ！片身を薄く切つてさつと湯通しして骨は油でカラツと揚げて…っ！！」

ゴゴゴゴゴツ…！！

伽留「ひっ！？」

鈴々「紫苑の顔が怖いのだ！？」

普段は優しい感じの紫苑だが今の顔は地獄の鬼も裸足で逃げ出すくらいに形相だったという

一刀「落ち着いて紫苑！？璃々ちゃんもいるんだし！？」

ガシッ！

一刀が紫苑を後ろから押さえ込むと

紫苑「はっ！？ごめんなさいっ！…あんっ！／＼／＼一刀さんどっこわっているんですか」

一刀「えっ？どこって…」

一刀が自分の手を見てみると

ガツシリ！ むにゅっ

一刀の手は紫苑の爆乳をしっかりと掴んでいた。

「一刀「ぶほっ!?!」」

その事に気づいた一刀が驚いた直後

ゴツチーンッ!! ミ

愛紗「お前という奴は」

一刀は愛紗に殴られた。

劉備「あの人さつきから殴られてばかりですけど大丈夫なんですか!?!」

星「心配無用、あれはいつもの夫婦漫才めおとですからな」

愛紗「め…夫婦ではない!」

海「そんなことより偽者の劉備はどこにいるの?会ったら私がぶん殴ってやるんだから!」

海が聞くと

伽留「たしかあいつは…」

伽留「お漏らししながら逃げていったっけ」

海「なにそれっ?」

26話『桃花村攻防戦』参照

劉備「その時その人、剣を持っていませんでしたか？」

劉備が聞くと

一刀「剣？俺は偽劉備には一度しか会っていないからな、みんなは知っているか？」

愛紗「さあ、私も知りませんが」

星「当然であろう、愛紗は偽劉備の腰ではなく顔を見ていたのだからな」

愛紗「なっ!？」

朱里「はわわ!？やめてください!話が先に進みませんよ!そういうえば確かに見事な剣を腰にさしていたような気がします」

朱里が言うと

劉備「やっぱりそうでしたか!？あの剣は私にとって大事なものです!」

ドンッ!

劉備はいきなり机を叩いて立ち上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4711t/>

真・恋姫†無双～乙女大乱改～

2011年11月20日19時13分発行